

大菩薩峠

無明の巻

中里介山



温かい酒、温かい飯、温かい女の情味も畢竟、夢でありました。

その翌日の晩、蛇滝じやだきの参籠堂に、再びはかない夢を結びかけていた時に、今宵は昨夜とちがってしとすと雨です。

机竜之助は、軒をめぐる雨滴あまだれの音を枕に聞いて、寂しいうちにうつつりとしていきますと、頭上遙かに人のさわぐ声が始まりました。

しとしとと降りしきる雨をおかして、十一丁目からいくらか
の人が、この谷へ向って下りてくるのが確かです。

見上げるところの九十九折つづらおりの山路から徐ろおもむに下りて来るのは、

桐油^{とうゆ}を張つた山駕籠^{やまかご}の一挺で、前に手ぶらの提灯を提げて蛇の目をさしたのは、若い女の姿であります。

ややあつて、駕籠だけは蛇滝の上に置かせて、蛇の目の女だけが提灯を持って、参籠堂の前まで下りて来ました。

わざと正面の御拝^{ごはい}のある階段からは行かないで、側面の扉をほとほと叩いて、

「御免下さいまし」

なんとなく、うるおいのある甘い声。机竜之助は枕をそばだてて、その声を聞いていると、

「あの、昨晚申し上げましたように、わたくしはこの夜明けに江戸へ参ります、それは、いつぞやも申し上げました、わたくしの子供の在所が知れました、ふとしたことから兄の家へ乳貰^{ちちもら}いに来た人が、その子連れて参りましたのを、兄が取り戻し

たから、そつと、わたくしに取りに来るようと沙汰さたがありました、それ故、急いで行つて参ります、急いで帰るつもりではございますけれど、行きがかりで日数がかかるかも知れません、どちらに致しましても、わたくしはあの子を連れてお江戸に近いところにはおられませんから、きつと戻つて参ります、それまでの間、昨晚も申し上げましたように、これから上野原へお移り下さいまし、あれに月見寺つきみでらと申しまして、山家やまがにしては大きなお寺がございます、あのお寺には、わたくしの妹がおりますから、あれへおいでになつて、暫く御養生をなさいます」

扉の外に立つた女は欄干につかまつて、扉の中へこれだけのことを小声で申し入れました。中へは入ろうとしないで、外でこれだけの用向をいって、中なる人の返事を待つてゐる間に、ちようちん提灯の中を上からながめているその面おもてが、やや盛りを過ぎては

いるけれども、情味のゆたかな女で、着物もこのあたりの人とはいえないまでに、柄のうつりのよいのを着ているのが、提灯の光ですつきりと見えるのであります。これぞ、巢鴨庚申塚のほとりで、不義の制裁を受けて殺されようとした女に紛れもないのです。たしか、この女の郷里は、ここから程遠からぬ小名路こなじの宿しゆくの、旅籠屋はたごやの花屋の娘分として育てられた女であります。覗のぞいている提灯にも、花という字が大きく書いてあるのでわかります。

あれから後、夢のような縁に引かされて、この蛇滝こもに籠こもるこ
とになつてほぼ百箇日、その間の保護は、この女から受けてい
たと見るよりほかはありません。

今、この女は江戸へ行くとのことです。江戸へ行かねばなら
ぬその理由は、よそへ預けておいた行方ゆくえふめい不明の子供の行方がわ

かつたから、それを取り戻しに行くのだと言っています。あの近所へ近寄れない怖れと弱味とを持っておりながら、やはり子供の愛には引かされて行くものらしい。

「子供というのは、それほど可愛いものかなあ」

扉の中で竜之助の声。

「可愛ゆうござんすとも、子供ほど可愛ゆいものは……」

提灯の中を見入っていた女が面を上げた時に、その身体からだが欄干からするすると巻き上げられて、蛇にのまれたように、扉の中へすいこまれてしまいました。

二

参籠堂の中で、焚火が明るくなつた時分に、机竜之助は、い

つのまにか着物をきがえて旅の装いをすまし、頭巾ずきんをかぶつて、その火にあたつておりました。

それと向い合つて、女は後れ毛おくげをかき上げて、恥かしそうに横を向いていましたが、

「長房ながふさというのへ出て小仏へかかるのが順でございますけれども、駕籠屋さんが慣れていきますから、高尾の裏山を突切ると言いました、五十丁峠の道をわけて、山道づたいに上野原へ出た方が、道は難渋なんじゆうでも、人目は安心でございます」

「いや、なにかとお世話になるばかりで、御恩報じもできないことを痛み入ります」

と竜之助は、焚火に手をかざして、その蒼白あおしろい面に、いささかながら感謝ひらめの閃きを見せると、女は、

「いいえ、どう致しまして、わたくしこそ、命を助けていただ

いた御恩が返しきれないのでございます」

「いつ、拙者が人の命を助けたろう」

「お忘れになりましたのですか」

女はその言葉に呆れたらしい。^{あき}

「そなたに助けられた覚えはあるが、そなたを助けた覚えはありません」

「まあ、ほんとうにお忘れになりましたのですか、あの、巢鴨の庚申塚のことを」

この時、女は、病気のせいでこの人の記憶が鈍^{にぶ}つたのではないかと、まじめに疑いはじめたが、竜之助は、

「覚えていますとも……」

「それごらんなさいませ。あのことがなければ、わたくしはとうなつていたか知れませんが、いいえ、わたくしはあの時に殺さ

れていたのです、それを、あなた様に助けられましたので」

その時の思い出が、女を堪えがたい羞恥しゅううちと感謝とに導く。

「そのとき助けたのは、拙者ではない、助けようと思つたのも拙者ではござらぬ。もしその時、そなたたちを助けようとした人、助け得た人があつたとすれば、それは弁信といつて、安房あわの国から出た口の達者な、やはり眼の見えない小坊主の働きじや。拙者は人を助けはせぬ、助けようともしなかつたのみならず……」

「いいえ、もうおつしやらなくてもよろしうございます、なんとおつしやつてもわたくしは、現在あなた様に助けられているのですから」

女はひとり、それを身にも心にも恩に着ているのであつた。

人の過あやまちは七度ななたびこれを許せと、多数の私刑者の中に絶叫して歩いたのは、竜之助の言う通り、安房の国から出た弁信という口

の達者な、目の見えない小坊主であつた。しかるにその人は感謝を受けないで、この人がひとりほしいままに女の心中しんじゅうだ立てを受けている。怨み必ずしも怨みではない、徳必ずしも徳ではない。外では雨の音。

「さて」

と刀を取つて引き寄せようとしたのは、待たしてある駕籠のこおもんばかとを慮つたのでしよう。

「まあ、お待ち下さいませ、まだよろしうございます、かまいませんです、みんな家の者同様の人たちなんですから」

最初には、上へあがることをさえ憚はばかつた女が、今はかえつて名残りを惜しんで、立たせともなき風情ふぜいであります。

「ああ、そうでした、わたくしはいつぞやお約束の餞別せんべつを、あなたに差上げるつもりで持つて参りました」

と言つて、女は立つて扉を押し、

「駕籠屋さん、あの刀をちよつとここへ貸して下さいな」

やや離れた行衣場ぎようえばに、同じく焚火にあたり、無駄話をしていた二人の駕籠屋を呼びます。

三

女は駕籠屋かごやから刀箱を受取つて、それを改めて竜之助の前に置いて、

「あなた、この刀には、なかなか因縁いんねんがあるのでございます」

「何という人の作か、それを聞いておきましたか」

といつて竜之助は、箱の紐に手をかけてほどきはじめました。

「ええ、銘がございますそうです」

「在銘ものか。そうしてその銘は？」

箱の中から萌黄もえぎの絹の袋入りの一刀を取り出して、手さぐりで、その紐を払うと、女は燭台しよくだいをズツと近くへ寄せて、

「どうか、よくごらんなすって下さいまし、こういうものばかりは見る人が見なければ……」

「その見る人が、この通りめくらだ」

袋の中から白鞆物しらさやものを取り出しますと、女は、

「それでも、心得のあるお方がお持ちになればちがいます」

といって、今更、燭台を近く引き寄せたことの無意味を恥かしく思います。

「重からず、軽からず、振り心は極めてよい」

「手入れの少ないわりには、さびが少しもついておりませぬ」
「なるほど。そうして刃紋はもんの具合はどうじゃな」

といつて竜之助は、鞘を払った刀を、女の声のする方へ突き出して見せました。

「刃紋とおつしやるのは……」

女はここち身を引きかげんにして、この時はじめて、傍近く引き寄せた燭台の存在が無意味でないことを知りました。竜之助の面と、かお突き出された白刃とを、蠟燭の光で等分にながめて、返事にさしつかえていると、

「刃紋とは、つばもと鰐元から切尖まで縦に刃の模様がきつみぎついてはいるはず、その模様が大波を打ったように大形についているのもあれば、丸味を持った鋸ののこぎり歯のように細かくついているものもある、或いは杉の幹を立てたようなのが真直ぐに幾つとなく並んでいるものもある、のたれというのものもある、美しい乱れ形になっているものもあります」

「ございます、ちょうど、雨だれの簷のきを落ちる時のような同じ形が揃つばって、鏢つばの下から切尖まで、ずっと並んで、いかにもみごとでございます」

「あ、では五ぐの目乱めみだれになつてゐるのだろう。それから、鉦にえと匂におい、それは、あなたにはわかるまいが……銘があるとの話、その銘は何という名か覚えていますか」

「小さい時から聞いておりました、国広くにひろの刀だそうでござい
ます」

「国広……」

「はい」

「ただ、国広とだけか」

「ええ、国広の二字銘だとか、父が申しておりましたそうで」

「ああ、国広か」

竜之助にかなりの深い感動を与えたものらしく、刀を二三度振り返してみて、

「国広にも新刀と古刀とあるが、これはそのいずれに属するか、相州の国広か、堀河の国広か」

とひとり打吟じて、

「多分、堀河の国広だろう、ああ、いい物を手に入れた」

彼の蒼白い面あおしろの色が、みるみる真珠の色に変わってゆくと、

「堀河の国広というのは、よい刀ですか」

「新刀第一だ」

その真珠色の面が刀の光とうつり合つて、どこかに隠れていちしおた血汐が、音もなく上つて来るようで、気のせいか女の鬢びんの毛が、風もないのに動いて見えます。

刀を抛なげうつてここにほぼ百日。ようやく人の世の微光がその眼

に宿りかけた時、再びこれに刀を与えた。要らざる餞別せんべつ。与うべからざるものを与うるのが、女の常か。

四

雨のしとしとと降る中を、わざと甲州街道の本街道を通らずに、山駕籠とうゆに桐油とうゆをまいて、案内に慣れた土地の駕籠舁かごかきが、山の十一丁目まで担かつぎ上げ、それから本山を経て五十丁峠の間道を、上野原までやろうとするのは、変則であつてまたかなりの冒険です。しかし、駕籠屋が好んでそれをやるわけではなく、また乗る人が好んで、それを行きたがるわけでもなく、要するに女の特別の頼みと、駕籠屋が山上に住んでいて、往返おうへんの距離と案内においてかえつて優れているせいと思われまゝ。女は、そこ

まで見送つて、別に一人の男をつれて、駕籠屋には駄目を押し、参籠堂から本道を家へ帰つてしまいました。

十一丁目までの間は、壁にのぼるような急勾配。きゆうこうばいそれから道は緩やかになつて、そこで駕籠屋たちも無駄話をする余裕が出来ました。

「もし、旦那様、あの花屋のお若さんは、あなたのおかみさんですか」

朴訥な言葉で、ばくとつ前棒をかついでいた若いのが、駕籠の中の竜

之助に問いかけたものですから、竜之助もむずがゆい心持で、

「違う」

「そうですか、お若さんは江戸で御亭主をお持ちなすつたそうですが、本当でしょうか」

「拙者は、それをよく知らないのだ」

「そうですか」

といつて、前棒の若い駕籠屋は黙つてしまいました。その言葉つきによつて見ると、これは全く土地の人間で、雲助風の悪ずれたのとは、たちが違うことがよくわかります。暫く無言で、やや坂道になつたところを上りきると、今度は後ろのが、

「お若さん、子供があるつて本当だろうか」

ぽつりと、思い出したようにいい出したのは、前棒のよりはやや年とつたような声です。そうすると、前のが、

「ああ、そりや本当なんだ、なんでも今度は、その子供を引取つて来るとかいつてゐるものがあつたよ」

「子供があれば御亭主があるだろう」

「そうだな、御亭主があつても子供はないのはあるが、子供があつて御亭主のねえというのはあるめえ」

「では子供と一緒に御亭主さんも来るんだらう」

「そうかも知れねえ」

あたりまえならば、この会話に何か皮肉が入りそうなのを、極めて平凡な論理と想像で進行させてしまつて、道はまた少しく勾配にかかるので黙つてしまいました。

「旦那様」

今度のは、後ろの駕籠屋が思い出したように、駕籠の中に向つて言葉をかけました。そこで竜之助は、

「何だ」

「わたしどもは、あんまりお若さんが親切にあなた様の世話をなさるから、それで、お若さんはあなたのおかみさんだろうと、もつぱら噂うわさをしておりましたよ」

「それは有難いような、迷惑なような話で、拙者は世話にはなつ

たけれども、縁はないのです」

「それでも、お若さんは、大へんあなたに御恩になったように申しておりましたよ」

「別に骨を折って上げた覚えもないけれどな、まあ計らぬ縁でこうして世話になるのだ、あれはなかなか親切でよい人だ」

「そうです、親切で、氣前がなかなかようございます。旦那様は、あのお若さんの盛りの時分から御存じですか、それとも、近頃のお知合いなんですか」

「ほんの、つい近頃の知合いだ」

「そうですか、小名路こなじの花屋のお若さんといえば、甲州街道きつての評判でございましたよ、街道を通る人が花屋のお若さんから、お茶を一ついただかないことには話の種になりませんでした、それだけ評判者でしたけれども、身の上をお聞き申すとか

わいそうです」

「ははあ」

机竜之助は思わぬところから、女の身の上話を聞かされようとするのを、あながちいやとは思いませんでした。今までも、自分を推^おしては問わず、女もまた好んで語ろうともしなかったが、雨の山駕籠を揺りながら、朴^{ぼく}訥^{とつ}な土地の者の口から無心に語り出でられようとする情味を、あえて妨げようとする気にもなりません。

「御存じですかね、お若さんは花屋の本当の娘ではありません、小さい時に貰われて来たんです」

「なるほど」

「貰われて来たんですけれども、その親許がわからないのですね」

「親がわからない？」

「それがね、わかつているのですけれども、わからないことにしてあるんです」

「というのは？」

「それが、なかなか入り込んでいます。あの甲州街道の、駒木野のお関所の少し北のところに、お処刑場しおきばのあとがあるんでございます。今は、そこではお処刑しおきがありませんが、昔は、あそこでよく罪人が首を斬られたものです。今の花屋の死んだお爺さんが、そのお処刑場の傍らで供養にする花を売っていました、つまり花屋という名も、そこいらから起ったんでしょうねえ。ところで、あるとき一人の浪人が、その花屋のお爺さんひとふりに一口の刀と、まだ乳ちばなれのしない女の子を預けてどこかへ行つてしまいました、この女の子が、あのお若さんなのです。浪人衆

は多分、父親なんでしょう、関所を通るについて、子供をつれては通りにくいことがあつたのでしよう、それっきりお父さんというのが音沙汰がありませんで、女の子は花屋で引取つて育てました、これがあのお若さんなんです。土地の人は、そんなことを知つてゐる者もありますが、知らないものもあります。本人のお若さんは、そのことを知らないでゐるそうです」

「それが、どういう縁で、江戸の方へかたづいたのだ」

「そのことは、あんまりよく存じませんが、なんでもお若さんはいやがつていたのを、先方が強^たつてというのに、世話人の方へ義理があつて行くことになつたんだそうですよ」

後ろの老練なのが、委細を説明していたが、この時、不意に前棒の若いのが口を出して、

「お若さんには、別に好きな男があつたつていうじゃないか」

「いろいろの噂があるにはあつたがね。何しろ街道一といわれ
たくらいだから、人がいろいろのことをいいまさあ」

「なかなか固いという者もあれば、思ひのほか浮気者だといつ
てる者もあつたね」

「いよいよ江戸へ行つてしまふという時に、高尾の若い坊さん
が一人、縊^{くび}れて死んでしまいました。それについて、またいろ
んな評判がありますが、つまり、その坊さんは、恋のかなわな
い恨みだということになっています」

「そんなことがあつたか知ら」

「お前たちがまだ、鼻汁^{はな}をたらしていた時分のことだ」

「してみると、お若さんは罪づくりだ」

「罪づくりにもなんにも、一体が女というものは、たいてい罪
つくりに出てくるものですが、そのうちにも美しい女ほど、よけ

い罪つくりになるわけですねえ、旦那様」

といつて老練なのが、竜之助のところへ言葉尻を持って来たのを、

「そうだ、そうだ」

と聞き流していると、前棒さきぼうの若いのが、

「罪つくりは女だけに限ったものでもあるめえ、男の方が、女に罪を作らせることも随分ありますねえ、旦那様」

両方から、罪のやり場を持ち込まれて竜之助は、

「そりゃ、どちらともいわれない」

この時、竜之助はふと妙な心持になりました。

本坊の前から炊谷^{かしきだに}へかけて森々^{しんしん}たる老杉^{ろうさん}の中へ駕籠^{かご}が進んで行く時分に、さきほどから小止みになっていた雨空の一角が破れて、そこから、かすかな月の光が洩れて出でました。

「占^しめた、お月様が出たよ」

老杉の間から投げられた光を仰いで、行手を安心する駕籠舁の声を、駕籠の中で竜之助は聞いて、

「ああ、雨がやんだか」

「ええ、雨がやんでお月様が出ましたよ、もう占めたものです」
「この分だと、大見晴らしから小仏の五十丁峠で、月見ができますぜ」

しかしながら、山駕籠は別段に改まって急ぐというわけでもなく、老杉の間の、この辺はもう全く勾配はなくなっている杉の大樹の真暗い中を、小田原提灯の光一つをたよりにして、ず

んずん進んで行きます。

駕籠に揺られている竜之助は、天に月あることを聞いたが、身は今、この老大樹の闇の中を進んでいることを知らない。ただ、梢こずえはるかの上より降り落つる陰深な鳥の声を聞いて、ここは多分、護られたる靈域の奥であろうとは想像するのです。

ふと、その空氣の圧迫と、怪しい鳥の落ちて来る鳴き声に、過ぎにし武州御岳山の霧きりの御坂みさかの夜のことが、彼の念頭を鉛のように抑えて来ました。宇津本文之丞を木劍の一撃に打ち斃たおしたその夜、同門の人にやみうちを受けた霧の御坂の一夜、その夜、山の秘鳥、御祈祷鳥ごきとうどりが、降りかかるようにわが身边に鳴いていた中を、彼は熱さに燃ゆるお浜の胸を抱いて、闇を走ったのではないか。

お浜はいずれにある。恨みに生きて恨みに死んだ、かの憎む

べき女の遊魂は、いずれにさまよう。

人間の罪、今も心なき駕籠舁の口から出たその人間の罪は、男女いずれに帰すべきやを知らない。その起るところのいつであるか知らないように、その終るところのいずこであるやを知らない。ただ知っているのは、罪は畢竟ひっきようずるに、罪以上のものを産まないということ。

それは仮りに罪といつてみるまでのことで、竜之助自身にあつては、世のいわゆる罪ということが、多くは冷笑の種に過ぎないことです。彼は自分の生涯を恵まれたる生涯だとは思つていないが、また決して罪惡の生涯だとは信じていないのです。彼自身においては、自分が生きるように生きているのみで、未だ曾かつて企たくらんで人を陥れようとしたことがない。わが生きる前途にふさがるものは容赦なく、これを犠牲にして来たつもりだが、わ

が存在を銜^{てら}うために一筋でも、他を犯したことはないつもりである。夜な夜な出でて人を斬ったことですが、彼は渴して水を求むるのと同じことで、自己の生存上のやむにやまれぬ衝動に動かされたのだという、盲目的の信念に生きているのであった。国と国が争う時には、幾万の人の命が犠牲になるではないか……自然が威力^{たくまし}を逞^{たくまし}うした時、おびたらしい人畜を殺すこともあるではないか。誰が国と自然との罪を責める？

悪いことをしていない、という盲目的信念は、今までこの男をして、世の罪ある者の方へ、罪ある者の方へと縁を結ばしめて来た。愛すべきものは罪である。ことに愛すべきは罪を犯して来た女である。今まで彼を愛し、彼に愛せられた女性は皆、この罪ある女ではなかったか。愛でも恋でもない、それは罪と罪とのからみ合う戯れではないか。ただし戯れにしては、その

悶え^{もだ}があまりに重くして深いことの怨みがある。

道はいつしか、老杉の境を出でて樺木科^{かばのきか}の密林をよぎると、そこから、すすき尾花の大見晴らしの頭が現われます。

「すっかり晴れちまったね。いいお月見ですよ、旦那様」

駕籠屋がいい心持で天を仰いで、雨あがりの雲間の冴^さえた月をながめて、その気分をいささかながら駕中^{がちゆう}の人に伝えようと
する好意で、

「ここのお月見は格別ですね、何しろ十二カ国が一目で見渡せる
んですからね」

駕籠は、すすき尾花の大見晴らしを徐々^{しずしず}と押分けて進むと、
五十丁峠のやや下りになります。少しく下つてまた蜿蜒^{えんえん}として、
すすき尾花の中に見えつ隠れつ峰づたいに行く道が、すなわち
小仏の五十丁峠。もし昼間にこれを通るならば、身の丈を蔽^{おほ}い

かくすほどの、すすき尾花の路のつい足もとから、バタバタと雉子^きや山鳥が飛び出して、幾度か旅人を驚かすのですが、夜はすべての鳥が、その巢に帰っていると見えて、悠長な駕籠屋を驚かすほどの物音もなく、五十丁峠を七八丁ほど来て、また高い峰の頂にかかった時、

「向うのあの松林の中で、変な火の色が見えたぜ」

「え、松林の中で？」

二人の駕籠屋はいい合わせたように、大だるみの方面へ走つた峰つづきの松原の方を眺めました。

「なるほど」

「何だろう、あの火は」

「提灯でもなし」

「焚火でもなし」

駕籠の中で、それを聞いていた竜之助は、むらむらと昨夜の夢を思い起しました。その松林には、はるばると甲州の白根の奥から来た肉づきの豊かな年増としまの山の娘がいて、その火は、温かい酒と松茸まつたけを蒸しているのではないか。

「こつちへ来るようでもあるし、あつちへ行くようでもあるし」「いやな色をした火だなあ」

駕籠かごの歩みが、こころもち遅くなったのは、すすき尾花の丈がようやく高くなつて、歩みわずらうせいでしょう。

「だけんど、おれはこの道でおつかねえと思つたのは、たつた一ぺんきりさ」

と前棒さきぼうの若いのが、おじけがついて、強がりをいつてみたくでもなつたもののようです。

「そりゃあ、どうしてだ」

「高尾の山には天狗様がいるという話だが、おれは、三年ばかり前の晩景ばんげ、この通りでその天狗様にでつくわしてしまった。な
あに、鼻も高くはないし、羽団扇はうちわもなにも持つちやいなかったし、あたりまえの旅人の風なりをしていたんだが、その足の迅はやいこと……すつとすれ違つたと思つたら、あの地蔵辻から、もう大見晴らしの上に立つていたのにおつたまげて、あの時ばかりは動けなくなつちまつたよ」

六

その地蔵辻の上へ駕籠を置いて、駕籠屋は一息入れています。
蜿蜒えんえんとして小仏へ走る一線と、どこから来てどこへ行くとも
ない小径こみちと、そこで十字形をなしている地蔵辻は、高尾と小仏

との間の^{おおだいら}大平です。

四方に雲があつて、月はさながら、群がる雲と雲との間を避けて行くものののように、景信^{かげのぶ}と陣馬^{じんば}ヶ原^{はら}の山々は、半ば雲霧^{うんむ}に蔽^{おほ}われ、道志^{どうし}、丹沢^{たんざわ}の山々の峰と谷は、はつきりと見えて、洞然^{どうぜん}たるパノラマ。その中に置き据^すえられた一つの駕籠。

机竜之助は、その中に、堀河の国広を抱いて、うつとりと眠るともなく、醒^さめるともなく、天狗様の怪異談まで聞いて、駕籠のとどまつたことを夢心地に覚えていると――

その時、不意に風でも吹き起つたもののように、サーツと尾萱^{おがや}の鳴る音が、行手ではなく、自分たちが今たどつて来た道筋から起つたかと思うと、月影に見ゆるのは、旅人らしい一箇の人影です。

「今晚は」

その人影は早くも、休んでいた駕籠の傍へ来た。先方から挨拶の言葉で、二人の駕籠屋があわてました。

「今晚は」

「いいあんばいに、雨があがりましたね」

「ええ、いいあんばいに雨があがりましたよ」

「どちらへおいでになりますね」

「ええ、上野原の方へ。急病人がありましたのでね」

「それは、それは」

といって、旅人はお辞儀をして、その駕籠のわきの細道を通りぬけようとして、また踏みとどまり、

「済みませんが、火を一つお貸しなすって下さいまし」

「さあ、どうぞ」

この旅人は、棒鼻の小田原提灯の中の火が所望と見えて、懐

ろから煙草入を出すと、その面を提灯の傍へ持つて行きました。
駕籠屋は心得て提灯を外して、その旅人の鼻先に突きつけてやりながら、その面を見るとかなりの年配で、堅気の百姓のようでもあるし、何か一癖ありそうにも見えますが、物ごしは最初から丁寧で、好んでこの夜道を突切りたがる男とは見えません。
「いや、どうも有難うございました」

吸いつけた煙草をおしただいて、お礼の真似事をしながら、ジロリと駕籠の方を見ましたが、あいにくに提灯をこつちへ持つて来ていたものだから、横目でジロリと見たぐらいでは、思うように見当がつかないらしい。

「どう致しまして」

そこで旅人は、煙草をくゆらして、お別れをしようとしたが、また何か思いついたもののように、

「若い衆さん、お気をつけなさいましよ、やがて霧が捲いて来ますぜ」

「え、霧が……こんな雨上りの月夜にですか？」

「そうですよ、町の真中でさえ霧に捲かれると、方角を間違えますからな、ことに山路で霧に捲かれては、いくら慣れておいでなすつても、困ることがありますからね」

「そうですねえ」

駕籠屋は、いよいよ解^げせぬ色で、その忠告を聞き流していたが、なあーに、こんな雨上りの月夜に、そう急に霧が捲くことがあるものかと、たかをくくつてそれにはあえて驚きもしなかつたが、やがて、

「あッ！」

と驚かされたのは、いま立去つた旅人の挙動です。つい、たつ

た今、そこで煙草の火をつけて、霧の起るべき予告をしておい
て立去った旅人は、早や眼を上げて見ると、二十八丁の頂に、豆
のような形を消して行くところです。

「今の人が、もうあすこまで行つた」

「あッ！」

と若いのが青くなつたのは、今も今の話、天狗様の夜歩きを、こ
の男は生涯に二度見たからです。二人の見合わせた面は真蒼で
す。

「さあ、いけねえ」

慄えがとまらないでいる。この時遅しとでもいおうか、谷と
沢の間から、徐々として白いものが流れ出すと、峠や峰の横合
いからも、ひたひたとその白いものが流れ出して来るのです。
気のついた時分には、月の光も隠れておりました。

「さあ大変！ 天狗様のお告げ通りになったぞ」

彼等は、いま立去った旅人を人間とは見なかったように、いま捲き起った霧を、単純な天変とは見る事ができないで、戦^{おのの}きはじめました。

「旦那様、旦那、どう致しましょう、いつそ駕籠^{かご}を戻しましょうか、それとも千木良^{ちぎら}の方へでも下りてしましましょうか」

根が正直な土地の駕籠屋だけに、まじめになつて駕籠の中の客に相談をかけると、その理由を知ることのできない竜之助は、
「どうして」

「今晚は、いけない晩でございますよ」

「何がいけない」

「お聞きになりましたか、今、怪しい旅の人が、煙草の火を借りて参りました、それが、その、ただの人ではないのでござい

ます」

「ただ人ひとでない？」

「ええ、さきほどもお話し致しました通り、この高尾のお山には、昔から天狗様が棲すんでおいでなさるのです、そうして今の旅人がたしかに、その天狗様に違いありません」

「ばかなことをいうな、拙者もここでその旅人のいうことをよく聞いていたが、人間の声だ」

「左様でございます、言葉だけをお聞きになつたんでは、ちつとも人間と変りはございません、また姿を見たつて人間とちつとも変りはございませんが、旦那様、歩くところをござらんになれば、直ぐわかります」

「何か変つた歩きつきをして見せたか」

「変つたどころではございません、今ここで煙草の火をつけて、

霧が捲くから用心しろとおつしやつたかと思うと、もう二十八丁目の天辺^{てっぺん}へ飛んで行つてしまいました」

「羽が生えて飛んで行つたのか、足で歩いて行つたのか」

「それは、よく見届けませんでした。二人がこうして傍見^{わきみ}をしているかいない間に、もうあすこまで一飛びに飛んで行つたんですから、おおかた羽が生えたんでしょう」

「心配することはない、ずいぶん世間には足の迅^{はや}い奴があるものだ、人間業^{にんげんわざ}とは思えないほどに迅い奴があるものだ、そういう奴が、よく山道の夜歩きなぞをしたがる」

「足の早いといったつて旦那、たいてい相場がありましたよう、今のあの旅人なんぞは……」

「たとい、天狗にしろ、お前たち、なにも天狗に申しわけのないほど悪いことをしているわけではあるまい」

「いいえ、論より証拠でございます、天狗様がお知らせになつた通り、晴れた月夜が、このように霧になつてしまいました」

「かまわず目的通りの道を行くがよい」

「でも旦那、ほかの者と違つて、相手が天狗様じゃないません」

「お前たち、天狗に借金でもあるのか」

「御冗談をおっしゃつてはいけません、罰ばちが当たります」

「罰は拙者が引受けるから、かまわずやつてくれ」

「行くには行きますがね」

二人の駕籠屋は怖々こわこわながら棒に肩を入れました。どのみち、

進むか退くかせねばならぬ運命を、ぼんやり立っているのはなお怖いような心持がする。最初のうちは、彼等が仰天したほど深くはなかつた霧が、歩き出すにつれて、歩一歩と深くなりま

さつてゆくようです。やがては峰も谷も、すすきも尾花も一樣に夜霧に蔽おおわれて、人も駕籠もその中に没入して、五十丁峠は晦冥かいめいの色に塗りつぶされてしまいました。

駕籠屋が迷いはじめたのはそれからです。本来この連中が、この慣れきつた道に迷うはずがないのを、迷い出しました。

「旦那、方角がわからなくなっちゃったんですが、どっちへいったもんでしょう！」

正直な二人が、ようやくのことで弱音よわねを吐き出した時分は、もう真夜中で、彼等としては、こうも行ったら、ああも戻ったという、思案と詮術せんすべも尽き果てたから、鈍重な愚痴を、思わず駕籠の中なる人に向つてこぼしてみたのです。

「こんなはずではなかったんですが、どっちへ行つても道へ出ないでございます、いつそ千木良か底沢へ下りてしまおうかと

思いますが、その道がどうしてもわからないでございますよ」

「それを拙者に言つたつて仕方があるまい」

「それはそうでございますけれども、景信から陣馬を通つて上野原へ山道をする、その慣れきつた山道が、今夜に限つてわからなくなつてしまつたのは、只事じゃございません」

彼等はもう、おろ、おろ、声です。

竜之助は、もう取合わない。

「もうし」

この時、立てこめた夜霧の中から、不意に響いて来たのは人の声です。それも優しい子供らしい声でしたから、

「おや！」

「失礼でございますが、あなた方は、そこで何をしておいでになりますか」

続いて彼方かなたの夜霧の中から起った声は、以前と同じく優しい子供らしい声で、しかもこの時は一層はつきりして、朗々たる音吐おんとになっておりました。

「道に迷ったんだよ」

駕籠屋は、不意や、おそれや、癩癩かんしゃくや、いろいろの思いで投げ出すように返事をしますと、先方で、

「私もそうだと存じましたから、失礼ながらこちらから言葉をかけてみましたのでございます、さいぜんから、あなた方は同じ所を往きつ戻りつなさっておいでのお様子、只事とは思えませんが、せんでございますものですから、もしやとお尋ねを致しました。斯様かように申します私は、決して怪しいものでもなんでもございませぬ、もと安房あわのくに国清澄きよすみの山におりました小法師でございまして、あれから一度は江戸へ出て参りましたが、江戸も少し

さわるることがございましたために、私に幼少の折から琵琶を教
えて下さいました老師が、あの高尾山薬王院に隠居をしておい
での由を承り、それを頼つて参りましたが、不幸にして老師は
かみがた上方の方へお立ちになつてしまつたあとなのでございます、そ
れ故に、私も高尾がなんとなくつれなくなりましたから、今宵
心をきめまして、またも行方定めぬ旅に出でたというわけなの
でございます。連れが一人ございます、これは清澄の茂太郎と
申し、私よりも年下の男の子でございます」
問われないのにこれだけのことを、一息に喋しゃべつてしまつた者
があります。

これより先、道庵の家の一間で、中に火の入れてない大きな唐銅からかねの獅嚙火鉢しかみひばちを、盲法師めくらほうしの弁信と、清澄の茂太郎が抱き合つて相談したことには、

「茂ちゃん、また困ったことが出来たね」

「どうして」

「お前がこの間、上手に笛を吹いたものだから、たちまち評判になつて、あれは清澄の茂太郎だ、清澄の茂太郎が道庵先生の家いへに隠れていると、こう言つて噂うわさをしていたのが広がつてしまつたようだよ」

「困つたね」

「それが知れるとお前、また小金ヶ原のような騒ぎがはじまつて、二人が命を取られるかも知れない、そうでなければ両国へ知れて、またお前が見世物に出されてしまうかも知れない」

「どうしたらいいだろう、弁信さん」

「わたしは、それについて、いろいろ考えてみました、うちの先生に御相談をしてみようと思ったけれども、うちの先生は、そんな相談には乗らない先生だから困っちゃう」

「どうして、先生が相談に乗らないの」

「でもね、先生に薄々^{うすうす}その話をする^{りき}とね、先生があ^{りき}の調子で力み

返ってね、ナニ、お前たちを取り戻しに来るものがあるって？

有るなら有るように来てごらん、幾万人でも押しかけて来てご

らん、^{はばか}憚りながら長者町の道庵がかくまった人間を、腕ずくで

取り返せるなら取り返してみろ、とこう言つて大変な力み方で、

わたしたちの言うことを耳にも入れないのだから、先生に相談

しても、トテも駄目だと思います」

「では、どうしたらいいだろう」

「茂ちゃん、先生にはほんとうに済まないけれどもね、二人で今のうちにここを逃げ出すのがいちばんいいと思つてよ、今のうち逃げ出せば、二人も無事に逃げられるし、先生のお家へも御迷惑をかけないで済むから、今のところは御恩を忘れて、後足で砂を蹴るようで、ほんとうに済まないけれども、あとで私たちの心持はわかるのだから、いつそ、そうしてしまつた方がよいだろうと思う。茂ちゃん、お前逃げ出す気はないかえ」

「弁信さん、お前が逃げようと言うんなら、あたいも逃げる」

「それじゃあ逃げることにしようよ、それもなるべく早い方がいいから、今晚逃げることにしようよ」

「あたいはいつでもいいけれど、逃げるつて、お前どこへ逃げるの」

「逃げる先は、わたしがちゃんと考えてあるから心配をおしで

ない」

「もう、小金ヶ原じゃあるまいね」

「まさか、二度とあそこへ逃げられるものかね、今度は全く方角を変えて、いいところを考えてあるんだから心配をしなくつてもいい。それでね茂ちゃん、もう一つ相談だが、お前、ここですわたと同じように、坊さんになつてしまふ気はないかえ」

「頭を丸くするの、なんだかイヤだなあ」

「イヤなものを無理にとは言わないけれど、向うへ行つて長くいるようなら、そうしておしまいよ」

「そりゃあ、お前、都合によつちやあね、坊さんになつてもいいけれども、いま直ぐじゃきまりが悪いよ」

「いま直ぐでなくつてもいいのよ、その心持でいてくれればいい

いの」

「そうして、お前、逃げて行く先はどこなの」

「それはねえ、これから甲州街道を上って行くと、甲州境に高尾山薬王院というお寺があるのよ、そこへ逃げて行こう」

「お前、そのお寺と懇意なの」

「そのお寺に、昔わたしに琵琶を教えてくれたお師匠さんが、御隠居をなさっていらつしやるということを思い出したんだよ」

「それはよかったね」

「そんなに遠いところじゃないのよ、ここから十五六里ぐらいのものでしょう。茂ちゃん、お前は足が達者だし、わたしは眼が見えないけれども、旅をすることは平気だから、十里や二十里はなんともありやしないね」

「十里や二十里、なんともないさ」

「それじゃお前、今夜、人が寝静まつてから逃げ出すことにしようよ。先生はお帰りになるかならないか知れないけれど、どちらにしてもあの通り酔っぱらつておいでなさるから、夜中に眼をおさましなさるようなことはないけれど、国公さんに気取けどられないように気をつけて下さい」

「ああ」

「そのつもりで、あたしは草鞋わらじをちやあんと買つておきました、少し大きいけれども、茂ちゃん、お前もこれをお穿はき」

「有難う」

「お小遣こづかいは、あたしが持っているのを、お前にも分けて上げるよ」

「有難う」

「裏のくぐりから出ることにしましょう。夜中に、あたしが時

分を見計らつてお前を起すから、それまではゆつくり休んでおいで」

「ああ、あたいはそれまで休んでゐるけれど、弁信さん、お前寝過ごしちやいけないよ」

「大丈夫」

「弁信さん、お前の前だけどね、あたいはお寺はあんまり好きじゃないのよ、清澄にゐる時だつて、ずいぶん頑入がんにゅうにいじめられたからなあ」

「ああ、そうそう、頑入はずいぶんお前を苛いじめたつけね。けれど

もね、頑入の方から言えば無理もないところがあるんだよ、お寺へ入れられてもお前は、少しもおとなしくないんだもの、そうして人の嫌いな虫や獣とばかり遊んでゐるんだもの。頑入はお仕置のつもりであんなことをしたんだから、頑入ばかりが悪

いと思つてゐるとお前、了見りようけんが違ふよ」

「高尾の山には、頑入みたような坊さんはいないだらうなあ」

「そりやいないだらうけれど、お前、おとなしくなくちゃいけないよ」

「山へ行きたいなあ」

「山はお前、房州よりもあつちの方が本場だから、ずいぶんいい山がたくさんあるだらう、峰つづきを歩くと、甲斐の国や信濃の国の山へまでいけるんだからね、それを楽しみにしてお前、早くお寝よ」

二人はここで相談をととのえて、おのおの眠りに就きました。果してその翌日になると、道庵の屋敷にこの者共の影が見えません。そこで、さすが呑気のんきな道庵主従も騒ぎ出して見ると、二人の寝た行燈あんどんの隅に置手紙がしてあります。それを読んだ道庵

が大きな声をして、

「べらぼうめ、逃げるなら逃げるでいいけれど、道庵の家は食物が悪いから居堪いたたまらねえの、やれ人使いが荒いから逃げ出したのと、よそへ行つて触れると承知しねえぞ」

と言つてプンプン怒つてみたけれども、別にあとを追つかけるとも言いませんでした。ともかくも相談の通りに道庵屋敷を落ちのびた二人の者は、真夜中の江戸の市中をくぐり抜け、弁信は例の琵琶かしらだかを頭高に負いなし、茂太郎は盲者の手引をして行く者のように見えましたから、さのみ怪しむものもありません。

上高井戸あたりで夜が明けました。それから甲州街道の宿々を、弁信法師は平家をうたつて門附かどづけをして歩きます。

茂太郎はその手引のつもりで先に立つていたが、弁信の語る平家なるものが、なにぶん俚耳りじに入らないで困ります。

祇王祇女を淋しく歌つても、那須の与市を調子高く語り出しても、いっこう家並の興を惹きません。道行く旅人の足をとどめることもできません。

ある時は、祭文語りのために散々に食われて、ほうほうの体で逃げました。

「弁信さん、お前の平家は、根っから受けないねえ」

府中の六所明神に近い大きな櫟並木の下で、一休みした時に、さすがの茂太郎も、弁信法師の平家物語なるものに、そぞろ哀れを催してしまいました。

ところが、弁信法師はそれほどにはしよげておりません。

「ねえ、茂ちゃん、平家というものは、本来流して歩くように出来ていないのだからね。お江戸の真中だつてお前、平家を語つて歩いて、それを聞いてくれる人は千人に一人もありやしない

よ。だからなるべくよけいの人に聞いてもらいたいと思うには、これじゃ駄目なんだよ。それで、あたしは琵琶をやめて三味線にし、平家の代りに浄瑠璃じょうるりをやつてみたいと、ずっと前からそのつもりでいたけれどもね、気に入った三味線が手に入らないし、それから浄瑠璃もまだ人様の前で語れるほどに出来ていないから、やつぱり、まだこうして手慣れた琵琶をやっているのよ」

「だからお前、琵琶をやめて、急いで歩いた方がいいだろう」

「それでもねえ、黙って道を歩くよりは、何かの縁になるものだから、やつぱり、あたしは知っていることは人様に伝えた方がよかろうと思つてよ。人様があたしをお喋りしゃべりだという通り、あたしは知っているだけのことはみんな喋つてしまいたいし、聞いてくれ手があつてもなくつても、覚えていてくれるだけの平家は

語つてしまいたいのが、わたしの性分なんでしょう。それについて、ここはお前、武蔵の国の府中の町といって、この府中の町にはお六所様というのがあつて、これが武蔵の国の総社になつてゐるのです。あたしは今晚、そのお六所様のお宮の前で、平家を語つてお聞かせ申したいと思つていますよ。昨夜は十五夜でしよう、今夜は十六日ですからね、いざよいのお月様をいただいて、あたしの拙い琵琶を神様へ奉納をして上げたいと思つて、さいぜんからそのことを考えて来ました。日が暮れて月が上る時分まで待つて、そろそろお六所様のお庭へ行つてみましょうよ」

櫂の根に腰をかけた弁信が、こんなことを言い出したから茂太郎も、さすがにその悠長に呆れあきました。呆れながらまた弁信らしい願ひであると思ひました。

「弁信さん、お前がその気なら、あたいだつていやとは言わないよ」

この二人は、木茅きかやに心を置く落人おちうどのつもりでいるのか、それとも道草を食う仔馬こうまの了見でいるのか、居候から居候へと転々して行く道でありながら、こし方も、行く末も、御夢中であるところが子供といえば子供です。

陰曆十六日の月があがった時分に、この二人は相携えて、武蔵の国の総社、六所明神の社の庭へわけいりました。

八

六所明神の前にむしろを敷いて弁信法師は、ちよこなんと跪かじこまり、おもむろに琵琶を取り上げてキリキリと転手てんじゅを捲き上げ

ると、その傍らに介抱気取りで両手を膝に置いて、端然と正坐しているのが清澄の茂太郎です。

こつそりと入って来たから、誰も知る者はありません。

あらかじめ二人の間に約束があつたと見えて、琵琶はただちに曲に入りました。その弾奏は自慢だけに、堂に入つたところがあります。大絃だいげんは嘈々そうそうとして、急雨のように響かせるところは響かせます。小絃しょうげんは切々せつせつとして、私語のように掻き鳴らすところは鳴らします。宮商角徵羽きゅうしやうかくちゆうの調べも、乱すまじきところは乱さずに奏かなでます。

果して、弁信法師が、琵琶を弾かせて名人上手といえるかどうかは疑問だけれども、ごまかしを弾かないことだけは確かかのように、曲に第五の巻の月見を選んだことは、如才ないと見なければなりません。

「旧き都は荒れゆけど、今の都は繁昌す、あさましかりつる
夏も暮れて、秋にも既になりにけり、秋もやうやう半ばにな
りゆけば、福原の新都にましきける人々、名所の月を見む
とて、或ひは源氏の大將の昔の路を忍びつつ、須磨より明石
の浦づたひ、淡路の迫門を押しわたり、絵島が磯の月を見る、
或ひは白浦、吹上、和歌の浦、住吉、難波、高砂、尾上の月
の曙を眺めて帰る人もあり、旧都に残る人々は、伏見、広沢
の月を見る……」

弁信は得意になつて旧都の月見を語りました。前にいうよう
にこの盲法師が、琵琶にかけて名人上手であるかどうかは疑問
ですけれども、月夜の晩に、月見の曲を選んで、古今の名文を
わがもの面に清興を気取らず、かなり無邪気な子供らしい声で
語るから、人をして声を吞んで泣かしむるほどの妙味はなくと

も、聞いていて齒の浮くような声ではありません。

「中にも徳大寺の左大将実定の卿は、旧き都の月を恋ひつつ、八月十日あまりに福原よりぞ上り給ふ、何事も皆変りはてて、稀に残る家は門前草深くして庭上露茂し、蓬が杣、浅茅が原、鳥のふしどと荒れはてて、虫の声々うらみつつ、黄菊紫蘭の野辺とぞなりにける、いま、故郷の名残りとしては、近衛河原の大宮ばかりぞましましける」

弁信法師は得意になつて、この妙文をほしいままに語つて退けました。
みようもん

不思議なもので、こうなつて来ると、東夷の住む草の武蔵の真中の宮柱に、どうやら九重ここのえの大宮の古き御殿の面影おもかげがしのばれて、そこらあたりに須磨や明石の浦吹く風も漂い、刈り残された雑草のたぐいまでが、大宮の庭の名残りの黄菊紫蘭とも見

え、月の光に暗い勾欄こうらんの奥からは緋ひの袴をした待宵まつよいの小侍こじじゆうが現われ、木連格子きつれごうしの下から、ものかわの蔵人くらんども出て来そうです。ただ、琵琶を抱えている弁信法師だけが、どう見直しても徳大寺の左大将とは見えないとは言え、あまり喋り過ぎた時は小憎らしいほどな小坊主が、この時は、いかにもしおらしい月下の風流者であります。風流者というより敬虔けいけんなる礼拝者のように見えました。

茂太郎もまた、しんみりとして、両手をちゃんと膝に置いたままに、神妙に聞き惚れているのに。どうでしょう、心なき御輿みこし部屋べやの後ろから姿を見せた白丁はくちようの男が、いきなり長い竿を出して、

「おい、誰だい、そこでピンピンやつてるのは誰だい、誰にこ
とわってそんなことを始めた、誰の許しを得て歌なんぞをうた

うんだい」

闇の中からがなり出したので、せつかく浮き出した情景が、すっかり壊されました。

「へえ、どなたでございますか、まことに申しわけがございません」

せつかく、曲も終りに入ろうとする時に、正直な弁信法師は、撥ばちをとどめて返事をしました。

「申しわけがございませんじやない、断わりなしに社やしろのお庭へちんにゅう闖入しては困るじやないか」

「まことに申しわけがございません……」

弁信法師は琵琶をむしろ蓆の上にさしおいて、さて徐ろおもむに弁明を試みようとする態度であります。

「申しわけがないと悟ったら、早く出て行かつしやい」

長い竿で、弁信の頭をつつこうとします。

「ええ、少々、お待ち下さいまし、ただいま、立退きまするでございます……立退きまするについては、一応お話を申し上げておかなければなりません。それと申しますのは、わたくしはこうやって、お断わりを申し上げずにお庭を汚けがして拙つたない琵琶を掻き鳴らしましたのは、なんとも恐れ入りましたこととでございします。ただいまやりましたのは、お聞きでもございします。が、平家物語のうちの旧都の月見のくんだりでござりまする。お聞きの通り拙い琵琶ではござりまするけれども、これでもわたくしが真心まごころをこめて、六所明神様へ御奉納の寸志でござりまする。昔、妙音院の大臣おとどは、熱田の神宮の御前で琵琶をお弾きになりましたところが、神様が御感動しまして、靈驗まが目のあたりたいらのあそんつねまさごのに現われましたこととでござりまする。また平朝臣経正殿

は、竹生島明神の御前で琵琶をお弾きになりましたところが、
明神が御感応しまして、白竜が現われたとのことでござりま
する。わたくしなんぞは、ごらんの通りさすらいの小坊主でご
ざいまして、無衣無官は申すまでもございせん、その上に、
お心づきでもありませんが、この通り目がつぶれているので
ござります、目かいの見えない不自由なものでございます、そ
れに、琵琶とても、節^{ふし}とても、繰返して申し上げるまでもなく、
お聞きの通りの拙いものでございますから、とても神様をお悦
ばせ申すのなんと、左様なだいそれた了見^{りようけん}は持っておりませ
んののでござりまする。ただまあこうも致しまして、わたくしの
心だけが届きさえ致せば、それでよろしいのでございますから、
もう暫くのところお待ち下さいませ、せめてこの一くさりだけ
を語ってしまいたいのでござりまする、旧き都を来て見れば、

浅茅ヶ原あさじはらとぞ荒れにける、月の光は隈くまなくて、秋風のみぞ身には沁しむ、というところの、今様いまようをうたつてみたいと思ひますから、どうぞ、それまでの間お待ち下さいませ、それを済ましさえ致せば、早々立退きますでござりまする」

一息にこれだけの弁解をしてしまつたから、さすがの社人しゃじんも相当に呆あきれたと見えます。ただ呆れただけならいいが、どうもそのこまこましやくれた弁解ぶりが、癩ひつけにもさわつたやうで、

「いけねえ、いけねえ、貴様たちは火放泥棒ひつけどろぼうでも仕兼ねまじき乞食坊主だろう、昔の高貴の方と一緒にの氣になつて、神様へ琵琶を奉納という柄じゃねえ、そんなことを言い言い、社の御縁の下に野宿でもしようというたくらみだろう。つい、この間も、危ないところ、乞食めが潜りもぐ込んで、煙草の吸殻を落したために、火事をしでかすところだつた。乞食琵琶なんぞはサッサと

やめて、早く出ろ、早く出ろ、出ねえとこれだぞ」

またしても長い竿で、弁信の頭をつつきました。

「弁信さん、出ようよ」

茂太郎は、見兼ねて促うながしました。

「出ろ、出ろ。貴様たち、それほど琵琶が弾きたいなら、河原へ行つて、思う存分弾くとも呶どな鳴るともするがいいや。そこを出ると多摩川で、その近辺の河原が分倍ふばい河原がわらといつて、古戦場のあとだ。河原の真中で弾く分には、誰も文句をいうものはなかろう」

社人は、一刻の猶予も与えずに追い立てるから、弁信も詮方せんかたなく、琵琶を抱いて立ち上りました。

弁信の喋しゃべった通り、平皇后宮亮たいらのこうごうのみやのすけつねまさ経正は、竹生島ちくぶしまで琵琶を弾じた時に、明神が感応ましまして、白竜が袖に現われたかも知れないが、弁信が六所明神で琵琶を奉納すると、白竜が現われないで、竹竿が現われました。

その竹竿につつき出された二人は、これから宿中を流して歩こうとも思いません。また宿を求めて泊ろうとも致しません。わからずやの社人に差図をされた通り、正直に程遠からぬ分倍河原へ出てしまいました。ここで奉納の曲の残りを語ってしまい、なお夜もすがら喋りつづけ、或いは語りつづけるつもりと見えます。

分倍河原へ来て見ると、多摩川の流れが月を砕いて流れています。広い河原には、ほとんどいっぱいに見草の花が咲いて

います。遠く水上^{みなかみ}には、秩父や甲州の山が朧^{おぼ}ろに見えるし、対岸の高くもない山や林も、墨絵のようにぼかされています。

「ここが分倍河原というんだらう」

^{むしろ}蓆を巻いて来た茂太郎は、月見草の中に立つて、さてどこへ席を設けたものかと迷っています。

「ああ、ここが分倍河原で、古戦場のあとなんだよ」

弁信法師はこう言いましたけれども、その古戦場の来歴を説明するまでには至りません。いかに耳学問の早い物識りのお喋り坊主でも、行く先、行く先の名所古蹟を、いちいち明細に説明して聞かせるほどの知識は持っていないのがあたりまえです。

しかし、二人の立っているところは、いわゆる、分倍河原の古戦場の真中に違いなので、そこは昔、^{ぐんばいがわら}軍配河原となえられたところであります。しかも、茂太郎が席を設けようかと思案

しているあたりの小さな二つの塚は、俚俗に首塚、胴塚ととなえられる二つの塚であります。治承四年じしやうの十月には、このあたりへ、源頼朝が召集した関八州の兵が轡つわものくつわを並べて集まりました。新田義貞が鎌倉勢に夜うちをかけたのもここでありました。頼朝がここに集めた関八州の兵は、総勢二十八万騎ということだから、かなりの人数でありましたろう。義貞が北条勢を相手にした時は、太平記によると、

「義貞追ひすがうて、十万余騎を三手に分けて三方より同じく関ときを作る、入道恵性えしやう驚きて周章あわて騒ぐ処へ、三浦兵六力を得て、江戸、豊島としま、葛西かさい、川越かわごえ、坂東ばんとうの八平氏、武蔵の七党を七手になし、蜘蛛手くもで、輪違わちがひ、十文字に攻めたりける、四郎左近太夫大勢たいげいなりと雖も、一時に破られて散々ちりぢりに、鎌倉をさして引退ひきしりぞく」

茂太郎は程よきところへ蓆を敷きました。弁信はその上へ乗つて、後生大事ごしょうだいじに抱えて来た琵琶を、そつとさしおいてから、きちんと座を構えると、つづいて茂太郎が前と同じように介添役かいぞえやく気取りで、少し前へ避けて坐り、さて、弁信は再びおもむろに琵琶の調子をしらべにかかると、

「茂ちゃん」

「何だエ」

「淋しいねえ」

「ああ」

「何か、音が聞えるよ」

「何の音が」

「轡くつわの音が聞えるよ」

茂太郎は何の音も聞くことがないのに、弁信は聞き耳を立て

て、撥ばちを取り直そうとしません。

「轡しるしの音が聞えるよ」

「どっちの方から聞えるの」

「東の方から」

「嘘だろう、東の方からじゃない、土の下から聞えるんだろう」

「いいえ、東の方から、此方こつちへ向いて轡しるしの音が聞えるのよ」

「弁信さん、そりやお前の気のせいだろう、ここは昔の古戦場

だというから、昔、戦いくさをして死んだ軍人いくさにんの魂が、この河原の下

に埋まっているんだろう、その軍人や、馬の魂が、お前の耳に

聞えるのに違いない」

「なるほど、そう言われてみると……この川の下流にあたって、

新田義興につたよしおきという大將が殺された矢口ノ渡しでは、どうかすると

馬ひづめの蹄の足音が不意に聞えて、竜頭りゅうずの甲かぶとをかぶった大將の姿が

現われるということを聞きました。茂ちゃんの言う通り、いま聞えるあの轡くつわの音も、昔ここで死んだ軍人の怨霊おんりようの仕業しわざかも知れない、それが土の下から響いて来るのを、あたしの空耳そらみみで東の方に聞えるのかも知れない」

弁信はこう言いました。自分の耳を疑ったことのない弁信が、かえって荒誕こうたんな怨霊説に耳を傾けるのが迷いでしよう。

「そうだろう、でも、お前に聞えるものなら、あたいにも聞えそうなものだねえ」

「お待ちよ……何か、わたしは氣になつてならない」

弁信は見えぬ眼に四辺あたりを見廻そうとしたが、四辺を見廻したところで、前に言う通り、ややもすれば弁信の身の丈よりも高い月見草が、頭を出している分倍河原に過ぎません。

「弁信さん、あたいが悪かった、たしかに聞えるよ、たしかに、

あたいの耳にも馬の足音が聞えて来たよ」

その時坐っていた茂太郎が、席を立ち上りました。

子供とはいえ……、立ってみれば月見草よりも背が高い。立つて、そうして茂太郎が前後と左右と、遠近と高低とを見廻したけれど、月の夜の河原に見咎め得べきなものもありません。

「ええと……一つ……二つ……三つ……四つ……」

弁信は坐ったままで、小声で物の数を読みはじめました。

「何を言っているの、弁信さん」

「五つ……六つ……七つ……八つ……」

弁信はしきりに数を読んでいる。茂太郎はそれを不審がつているうちに、

「十……十一……十二……十三……十四……十五……！」
で終わりました。

「ああ、これですつかり臍ふに落ちた。茂ちゃん、馬の数は十五だよ、つまり十五人の人が、馬の轡を並べて東の方からやつて来たんですよ。夜中に十五人も馬を並べて通るのが只事ではないと思つて考へてみたが、江戸の侍たちが月見の遠乗りに、この分倍河原をさして来たものでしょう。今夜はいざよいですかね」

ところがこの十五騎の蹄の音がやむと暫くたつて、府中の町がひっくり返るような騒ぎになりました。喧々囂々けんけんごうごうと罵る声のしが地に満つるの有様です。

一年一度行われる関東名物の提灯祭りの夜以外には、絶えてないほどの騒ぎが持ち上つたのは、まさしくいま乗込んだ十五騎が持ち込んだものに違いありますまい。事の体ていをよく見ると、どうやら全町を挙げて家探やさがしが行われているようです。

騒ぎ、驚き、怖れ、憂えている人々の罵る声を聞いてみると
こうです。世にはだいそれた奴があればあるもので、江戸のあ
るお大名の奥方を盗み出して、たしかにこの町あたりまで入り
込んだ形跡があるようで、江戸の市中の取締が轡を並べて追
かけて来たということです。いや、それは奥方ではない、お部
屋様だという者もありました。ともかくも諸侯の秘蔵の寵者おもいものを
盗み出して、連れて逃げるということであつてみれば容易なら
ぬことです。

その探索の手にかかった町民の迷惑というものもまた容易な
ものではありません。泊り合せた旅人どもの迷惑というものも
容易なものではありません。まして婦人の驚愕きょうがくと狼狽ろうばいは見るも
気の毒な有様。

遙はるかに離れているとは言いながら、常の人よりは三倍も五倍

も勘^{かん}の鋭い弁信が、その騒ぎを聞きつけないはずはありません。

「茂ちゃん」

「何だい」

「府中の町は今、上を下への大騒ぎをやっているね」

「そうか知ら」

「何か大變が出来たのに違いない」

「何だろう」

二人もまた安き心がなく、自分たちの追われた府中の町をながめて、茂太郎は立ったまま、弁信は坐ったまま、伸び上っているけれど、その騒ぎの要領を得るには少し離れ過ぎています。「いけない、お月様まで隠れてしまった、さっきまで霽^はれていた空が、すっかり薄曇りに曇ってしまったよ、弁信さん、雨が降りそうになってしまったよ」

「琵琶は止めにしよう、ね、茂ちゃん、こんな日に無理をする
と悪いから」

さすがの弁信法師も、再三の故障に気を腐らして、琵琶を弾くのを断念したようです。茂太郎もまたそれが穏かだと思いません。弁信はせっかく琵琶を弾くことを断念して、静かにそれを袋に納めました。

十

府中の宿のこの大騒ぎの避難者の一人に、が、ん、り、き、の百蔵があります。こういう場合において、この男は避難ぶりにおいて、抜け駆けにおいても、決して人後に落つるものではない。手が入ったと聞いて、自分が泊っていた中屋の二階から、屋根

づたいに姿をくらましたのは、例によつて素早いもので、もちろん、あとに煙管きせる一本でも、足のつくようなものを残して置くブマな真似はしないで、スワと立って、スワと消えてしまった鮮かな脱出ぶりは、手に入いったものです。

そうして、まもなくすました面かおを、日野の渡し守の小屋の中へ突き出して、

「お爺とうさん」

「はい、はい」

道中師で通っているが、んりきの百蔵は、ここの渡し守のおやじとも疾とうからなじみで、言葉をかければ、響くほどの仲になっているのです。

渡し守の小屋の中へ身を納めて、土間に燃えた焚火の前へ腰をかけ、おもむろに腰の煙草入を抜き取った時分に、程遠から

ぬ街道の騒動が、渡し守のおやじの耳に入つて来たものです。

「何だい、ありや、えらく騒がしいじゃねえかな」

寝ていたおやじが起き直ると、がんりきは、さあらぬ面かおをして、

「お爺とっさん、気をつけな、府中の宿は今、上を下への大騒ぎだぜ」

「え、府中の宿が上を下への大騒ぎだつてな？　なるほど、馬で

人が駆けるわな、夜中に馬で飛ばす騒ぎは只事ではござるめえ」

おやじは、むつくりと起きて心配そうです。倅せがれの家は府中の

町はずれにあつて、幾人いくたりかの孫もあるはず。

「只事じゃねえ、府中の町をひつくるめて、一軒別に家さがしが始まつてるんだぜ」

「へえ、一軒別に家さがし……なんです、泥棒ですか、駆落かけおちで

すか」

「さあ……」

が、ん、り、きは尋ねられて、はじめて当惑しました。実は、脱出ぶりの迅い^{はや}のを鼻にかけて、ここへ避難して来てはみたものの、何者に追われて来たかと聞かれると手持無沙汰です。家探しの声は聞いたが、何の理由で、何者の手で家探しが行われるのか、それを聞き洩らしたのは重大な手落ちだ。我ながら気が利いて間が抜けていると、が、ん、り、きはいささか悄気^{しよげ}していると親爺は、もう提灯をさげて、

「それじゃ親分済みませんが、今夜はひとつここに泊っていておくんなさいまし、わしはこれから宿^{しゆく}まで様子を見に行つて来ますから」

おやじはが、ん、り、きに留守の小屋を託して、渡し守の小屋を出

て行つてしまいました。

日野の渡しの渡し守の小屋は、江戸名所図会ずえにある通りの天地根元造りです。この天地根元造りへひとり納まつたが、んりきは、結句これをいい都合に心得て、焚火の前には、だ、かり、ながら思わず見上げると、鼻のさきに弁慶が吊り下げてあります。

その弁慶には焼いて串にさした鮎あゆ、鮓はや、鰻うなぎの類が累々とさしこんである。が、んりきは手を伸ばして鮎を一串抜き取つて、少しばかり火にかざして炙あぶつてみると、濁りでもいいから一杯飲みたくなりました。

酒はおやじの蓄えを知っている。自在につるした鉄瓶も燗かんのしごろに沸いている。左の手を上手にあしらつて少しばかり働いて、それから、さいぜん親爺が寝ていた空俵の置へみこしを据すえてしまつて、燗の出来るのを待つているうちに、何か思い

出して、

「南条先生も、ずいぶん人が悪いや」

とつぶやいてニヤリと笑う。

それから手酌^{てじやく}で、一ぱい二はいと重ねているうちに、いい心持になつて、そのまま、うとうとといど寝^ねをはじめてしまひました。いつか知らないうちに、おやじの寢床にもぐり込んで一夜を明してしまつたが、夜中におやじの帰つた様子もなし、焚火にくべてあつた松の切株^{しき}が頻りに煙を立てて、劍菱^{けんびし}の天井から白々と夜の明け初めたのがわかります。

何かしら、昨夜、この男、相当のいい夢でも見たものか、寝起きの機嫌がそれほど悪くはなく、

「南条先生も人が悪いが、がんりきをがんりきと見込んで、けしかけるなんぞは隅には置けねえ」

しきりに南条なにがしが口頭に上つてくるのは、その以前、相模野街道で南条なにがしから、が、ん、り、き、の百蔵がこういつて^{そその}唆かされたことがある、「よろしい、それでは貴様に知恵をつけてやろう。ほかでもないが、相手は出羽の庄内で十四万石の酒井左衛門尉だ、今、江戸市中の取締りをしているのが酒井の手であることは貴様も知っているだろう、我々にとつて、その酒井が苦手であることも貴様は知っているだろう、酒井は我々の根を絶ち、葉を枯らそうとしている、我々はまたそこにつけ込んで、酒井を焦らそうとしている、その辺の魂胆^{こんたん}はまだ貴様にはわかるまい、わかしてもらふ必要もないのだが、貴様の今に始めぬ色師自慢から思いついたのは、酒井左衛門尉の御寵愛^{ごちようあい}を蒙^{かうむ}った尤物^{ゆうぶつ}が、いま宿下りをして遊んでいることだ、それは佐内町の伊豆^{いずじん}甚という質屋の娘で、酒井家に屋敷奉公をしている

うち、殿に思われて、お手がついて、お部屋様に出世をして、当時はある事情のもとに宿下りの身分であるという一件だ、その名はお柳という。これだけのことを聞かせてやるから、あとは貴様の思うようにしてみる」——こういつて猫の前へ鰹節を出したのが、今いう、その南条先生なるものの言い草である。この南条という男、ある時は慨世の国士のように見え、ある時はてんで桁けたに合わないことを言い出して、掠奪や誘拐を朝飯前の仕事のようにいつてのける。勧めるのに事を欠いて、が、ん、り、きの百蔵というや、く、ざ、者にこんなことを勧めるのは、油紙へ火をつけるようなもので、ただでさえも、そういうことをやりたくて、やりたくて、むずむずしている男に向つて、こういつて筋を引いたから堪ったものではない。「先生、が、ん、り、きを見込んで、そうおつしやつて下さるのは有難え」——手を額きようえつにして恐悦し

たのはつい先頃のことです。今や、その仕事にとりかかろうとして、しきりに思出し笑いをしているとところへ、夜前の渡し守が帰つて来ました。

「親方、お留守を有難うございました、いやはや、昨晚は話より大騒ぎでしたよ」

その時が、んりきは、もう起き上つて火を焚きつけていました。そこでが、んりきはなにげなく、

「お爺さん、騒ぎとつというのは何だったね」

「乱暴な奴もあればあるもので、あるお大名の殿様のお妾めかけを盗み出して逃げた奴があるんだそうですよ」

「え……」

「お江戸から、その殿様のお妾を盗んで来て、なんでも、たしかにこの府中のうちに泊つたにちがいないと睨にらまれたんだそう

でがす」

「ナニ、何だつて」

「それをお前さん、あとから追いかけてきたもんでがす、何しろ、殿様の御威勢ですからね、二十人ばかりのお侍が馬を飛ばせて江戸から、これへ追いかけて来たんだそうで……」

「ま、待ってくれ。してみると昨晚の家やさがしというのは、泥棒や火つけというようなものじゃあなかったんだね」

「どういたして、殿様のお妾なんです、お大名のお部屋様を連れ出した奴があつたんだそうでがすから」

「そいつはなかなか大事おおごとだった……」

「大事にもなんにも、浄瑠璃さいもんや祭文で聞くお半と長右衛門が逃げ出したのなんぞより事が大きいでがすから、町の役人たちも騒ぎました」

「やれやれ」

ここまで聞いてみると、どうやら、が、ん、り、き、の胸が穏かでな
くなりました。大名のお部屋様をそその嚇かして来たという、だいそ
れた色師の腕が憎いと、そういうところに妙な反抗心を持つこ
の男は、その憎い仇かたきの面を見てやりたくなる心持で、

「そうして、お爺さんとつ、その色敵いろがたきは首尾よくつかまったのかえ」

「ところが、つかまらねえんですが、たしかにこの府中の町へ
入ったはずなのが、どこをどうして逃げたか、いつこう行方ゆくえが
わからなくなつてしまいましたんで」

「おやおや」

が、ん、り、き、としては、首尾よく逃げおお了せたその果報者をますま
す憎い者に思つて、また一面には、さがしに来たやつらの腑甲斐ふがい
なさを、腹のうちで嘲あざけつていたが、なんだか腹の中が無性むしように穏

かでない。

「それで何かえ、そのお妾を盗まれたという殿様はいったい、どこの何という殿様だか、それを聞いて来なすったか」

「それが、その酒井様の……」

「ナニ、酒井様？」

「ええ、出羽の庄内の酒井様」

「何だつて」

が、ん、りが飛び上つたのは、よくよく胸にこたえるものがあつたと見えます。

「ええ、出羽の庄内で十四万石、酒井左衛門尉様のお手がついたお部屋様を、悪者が盗み出して、そうして、この甲州街道を逃げたということですよ」

「やい、ばかにするな、そのことならおれが知ってるんだ」

が、ん、り、き、は眼の色を変えて飛び出そうとするから、渡し守のおやじが呆氣あっけにとられて、

「親方、お前さん、それを知つておいでなさる？」

「知つてるとも。知らなけりや、どうしてこんなことが聞いていられると思う、ばかばかしいにも程があつたもんだ、昨夜ゆうべもそれを考えて、ひとりで思出し笑いをしていた奴はどこにいる、先手を打たれて眼の前で騒がれながら、いい心持でどぶろくを飲んでいりやあ天下は泰平だ、面つらを洗つて出直さなけりやあ、とても明るい日の下を歩けるわけのものじゃねえ」

こういつて、が、ん、り、き、の百蔵は道中差をつき差すと共に、小屋の外へ飛び出して、いきなり多摩川の流れて、ゴシゴシと自分の面かおを洗いはじめました。

十一

やや暫くあつて、村山街道の方面から、八幡太郎の櫓並木けやきなみきを、なにくわぬ面をして、府中の町へ入り込もうとするが、んりきの百蔵を見ることができません。

多摩川べりから大廻りに廻つて、宵に逃げ出したあぶないところへ、再び足を踏み入れようとするこの男の心の中は、渡し守から聞かされた昨夜の事件の内容で、自分ながら呆氣に取られると共に、むらむらと例によつての功名心に油が乗り、わざわざこうして取つて返したもので、取つて返した以上は、必ずしるしを挙げて、我ながら氣の利いて間の抜けた昨夜のしくじりを取り返そうという自信のほどが、鼻の先にうごめいている。「いけねえ、草鞋わらじが切れちやつた、幸先さいさきがよくねえや、ちえッ」

八幡太郎の櫓並木のとつつきで、草鞋のちの切れたのを舌打ちして忌々し^{いまいま}がったが、まだ夜明け時分ではあり、近いところに店もなし、当惑して見廻すと、馬頭観音のささやかなお堂の前につるしてあるのが奉納の草鞋です。

「これ、これ、これを御無心申すことだ」

といって百蔵は、堂の前へやつて来て、自分の草鞋を脱ぎ捨て、奉納の草鞋を抜き取り、それに紐を通して、例の片手で器用に穿^はいてしまうと、何と思つたか、そのまま立たないで、堂の戸前へ腰を卸し、

「いつ見ても、この櫓並木はたいしたものだ、八幡太郎が奥州征伐の時に植えたということだが、八幡太郎は今から何年ぐらい前の人だか知らねえが、まあ、ざつと千年も経つかな、見たところ、千年は経つまいがな、何しろ、櫓としては珍しい方だ。雑司^{ぞうし}

ヶ谷^やの鬼子母神の櫓が、またかなりの大木だ。そのほか一本立ちならば随分あつちこつちに大木はあるにはある。いつたい、関東でも、この辺の地味は櫓^{けやき}にいいんだろう。そういえば上方^{かみがた}へ行つちや、あんまり櫓の大木というのを見たことがねえ……そりやそうと、これからこの櫓並木を通つて府中の宿^{しゆく}へ入り込むと、さて、どういうふうに当りをつけてみたものかな。いつたい、おれがいろいろ考えてみると、お役人の力で軒別に家さがしをして、それでわからねえものが、おれがこうして、ぶらりと飛び込んでみて当りのつくはずもねえのだが、さて、いったん府中の町へ入り込んで逃げたとすればどこだ、どこをどつちへ行けばうまく逃げ果せるか。ここをこつちへ行けば逃げ損うということは、ちゃんとおれが心得ている、その心得で考えてみても、どうもこの悪者はまだ府中の宿を離れてはいねえと、

こう睨にらんだのだ、つまり酒井様のお手のついた別嬪べっぴんをつれ出した奴が、ほんとうにこの府中の町へ逃げ込んだものとすれば、そうして昨晚ゆうべつかまらなかったのが本当だとすれば、これはまだてつきり、この府中の町のどこかに隠れている。隠れていて、ほとぼりの冷めた時分に、連れ出そうという寸法にきまつている。そんならば、広くもねえこの府中の町の中に、そのだいそれたいたずら者が隠れているのか、そこが問題だテ。そのの見当が、玄人くろうとでなくつちやあちよつと附きにくかろう。ところでが、んりきの鑑定をいってみるとこうだ……これはつまり、あの六所明神の社の中に何か仕掛があつて、神主のなかにグルな奴があるんじゃないやねえかな、六所明神は武蔵の国の総社で、なかなかけんしきがある、守護不入てえことになっていっていると聞いたが、そこだ！」

が、ん、り、き、の百は、この時したり面がおに、ポンと自分の膝を打つて、櫓並木から六所明神の森をながめたものです。果してこの口くでなしの鑑定が当っているかどうかは知らず、当人は、いっぱし睨にみの利きいたつもりで、武蔵の国の総社六所明神を向うに廻し、一合戦をする覚悟の色を現わして、小鼻をうごめかしながら立ち上る拍子に、どうしたものかよろよろとよろけて、あぶない足を踏み締めると、これはしたり、自分の風合羽かざがっぱの裾がお堂の根太ねだにひっかかっている。

「ちえっ」

苦にがい面かおをして、それはずしにかかつて、思わず面の色を変えました。

合羽の裾が何かにひっかかつて、それで足をすくわれたものと、いまいましがって外しにかかる、

「おや？」

といつて百の面の色が変つたのは、単に出そこなつた釘の頭や、材木のそ、く、れにひつかかつたのではない、刀の小柄こづかで念入りにピンと、その合羽の裾が根太へ縫いつけられてあつたからです。

「誰だい、こりやあ」

さすがのやくざ者も、これには少しばかり度肝どきもを抜かれまして、自分が有頂天うちようてんになつて、六所明神を向うに廻しての策戦を考えているうちに、後ろにいてこういうたちの悪いいたずらをした奴がある。それをうつかり気がつかずに引張り込まれたなぞは、返す返すもドジだ。昨夜の逃げ出し以来、どうもが、ん、りの風向きが悪いと、自分ながら業わざが煮えて、

「誰だい、こんな悪戯いたずらをしたのは」

抜き取った小柄を手にして、堂の後ろを見込んで呼びかけてみたが、が、ん、り、き、の心持では、こういう悪戯をする奴はほかにはない、七兵衛の奴が後ろに隠れていてやったのにきまつている、一杯食わされたなという心持で呼んでみたのですが、

「が、ん、り、き、」

といって、物騒がずに堂の後ろから姿を現わしたのは、意外にも七兵衛ではありません。形こそ七兵衛に似たような旅人の風はしているが、第一、七兵衛よりは物々しい声であつて、全く七兵衛とは別人に相違ないから、ここでもが、ん、り、き、の百が見当外れで、

「え……」

「どうだ、が、ん、り、き、おれを知ってるか」

といって、笠の紐へ手をかけて、そろそろと出て来ました。

「やあ、あなた様は……そうだ、水戸の山崎先生でございましたな」

「うむ、驚いたろう」

「全く驚きましたね、わつしはまた、てつきり、七兵衛の奴とばかり思っていたものですからな。先生、なかなかお人が悪い、時節柄ですから、ずいぶん驚いてしまいましたよ、どうかお手柔らかにお願い致したいものでございます」

「別段、貴様をおどかしてみてもなかつたのだが、張つておいた網に貴様の方からひつかつたようなものだから、ふしようしろ。実は、もう少し大物を引っかけるつもりで張つた網だが、いやなみそ、さ、ざ、い、がひつかつたので、おれも少しうんざりしているのだ」

「み、そ、さ、ざ、い、は恐れ入りました」

「ところで、が、ん、り、き、おれがこうして網を張っているわけも、また貴様がこうして、あぶないところへ近寄りたがるわけも、大概はわかつているはずだが、ここで計らず、二人がめぐりあつたのは、六所明神のお引合わせかも知れないぞ」

「どう致しまして」

が、ん、り、きは額へ手を当てて苦笑いしました。今まで自分は南条、五十嵐の方の手先をつとめて、この山崎——この人はもと新撰組の一人で水戸の浪士、香取流の棒をよくつかう人——に楯を突いて来たので、この山崎には七兵衛が附いて、おたがい張り合つて来たのですが、ここで苦手にとつつかまつては、苦笑いがとまらない。

「が、ん、り、き、昨夜のあのいたずらは誰の仕事だ、貴様はよく知っているだろうな、知らないとは言わせんぞ。あれは南条力と五

十嵐^{なにかし}某らの浪人どもが企^{たくら}んで、伊豆甚の娘を盗み出して逃げたものに相違あるまい。多分、貴様あたりがその手引をしたものと睨^{にら}んでいる。どうだ、真直ぐにいつてしまえ、どっちへ逃げたか、それともどこへ隠したか、てつとり早く明白^{はつきり}といつてしまえ」

山崎讓はグツと近く寄つて来て、小柄を持っているが、ん、り、きの小手を、しっかりとつかまえてしまいました。

「その事、その事なんでございます、実はが、ん、り、きもその事で、出し抜かれたんでございますからなあ」

何をか言いわけをしようとするのを、山崎は許すまじき色で手首を持つて引き寄せました。

が、ん、り、きの百蔵も、この人にとつつかまつては弱りきつてい
るのを、山崎はグングンと引張つて、

「が、ん、り、き、貴様はこの間、南条なにがしの案内をして相模野街道を南へ歩いていたそうだが、あれはどこへ行つたのだ」

「白状してしまいますから、どうか、そう強く手を引張らないようにしていただきたいものです、片一方しかないが、ん、り、きの手がもげてしまうと、かけがえがねえんでございます」

が、ん、り、きの痛そうな面かおを見て、山崎は引張つていた手をゆるめて、

「うむ、素直すなおに言つてしまえよ」

「素直に申し上げるまでもございません、あれは、たあいのねえことなんです、ほんの道連れになつただけのものでございます」

「まだトボけているな」

「お待ち下さい、私の方ではたあいのないことなんです、先方おもわく様の思惑のところはわかりません、ただちよつとした縁で道

づれになつて、その道筋の案内を少しばかりして上げたようなものでございます」

「その案内の道筋というのは、どっちの方角だった」

「それは……その、八王子から平塚街道を厚木の方へ出る道をたずねられたものですから、その案内をして上げました」

「いや、そうではあるまい、貴様は南条なにがしの手引をして、おぎのやまなか

荻野山中の大久保長門守の城下へ入り込んだのだろう」

「ええ、それは違います」

「違うはずはない、白を切ると承知せんぞ」

「違います、あの方は果して厚木へおいでになつたか、それとも荻野山中の大久保様の御城下とやらへおいでになつたか、そのことは一向存じませんが、かく申すが、んりきは途中からお暇乞いをして、八王子へ出て参つたに相違ございません」

「が、ん、り、き、貴様は、南条、五十嵐の一味が容易ならぬ陰謀を企てていることを知って彼等に加担かたんしているのか、知らずして働いているのか」

「どう致しまして、あの先生方が、どういう大望を企てて、どういう陰謀をめぐらしているのだから、私共にはそんなことはわかりません、出たとこ勝負で、頼まれるままにいい気になって、附いたり離れたりしているまででございます」

「そうすると貴様は、あの者共のダシに使われているだけだな」「そうでございますとも、ダシに使われているだけの罪のねえのでございますから、どうかお手柔らかに願いたいんでございます。いや、あの南条先生ときては、あれでけっこう人が悪いんだからな。さりとて、今度のことはあんまり人をダシに使い過ぎらあ」

「うむ、ダシに使われていると知ったら、それを出し抜いて、裏を搔^かいてやる気にはならないか」

「そういう芸当は、大好きなんですがね、何しろ、あちらとこちらとでは役者が違いますからなあ」

「といって、がんりき、がポカンと口をあいて見せたのは、かなり人を食った振舞です。山崎はなんと思つたかがんりきの手を放して、

「よし、それではがんりき、もし貴様が南条、五十嵐の方で買収されているなら、こつちでもう一割高く買つてやろうではないか。先方の後立てはたかの知れた大名、こつちは二百五十年來、日本を治めて來た八百萬石の將軍家のお味方だ。ともかくもこつちへ來い、人目のないところで、もう一応、貴様を吟味してみたり、また貴様の手を借りてみたいと思うこともあるのだ」

といつて山崎讓は、が、ん、り、き、の手から小柄を取り戻し、百蔵を促して、六所明神の森の方へ歩き出すと、が、ん、り、き、もいやいやながら、それに従わないわけにはゆきません。

十二

吉原の万字楼の東雲しののめの部屋に、夜明け方、宇津木兵馬はひとり起き直つて、蘭燈らんとうの下に、その小指の傷を巻き直しています。この傷が、妙にピリピリと痛んで眠られないのです。傷が痛むだけではない、良心が痛むのでしょうか。

「起きていらつしやるの」

障子を半ば開いて笑顔を見せた女。

「ああ、眠れないから」

兵馬は正直に答えました。そうすると女は、う、ち、か、け、を、引、い、て、中へ入つて来て、

「お怪我をなさったの」

「少しばかり」

「どこですか」

「この小指」

兵馬は巻きかけた右の手の小指を、女の眼の前に突き出すと、

「まあ」

と女は美しい眉根まゆねを寄せて、

「痛みますか、どうしてこんな怪我をなさいました」

「この間あるところで」

「お転びになつたのですか」

「いいえ」

「それでは戸の間へ、はさまれたのでしょうか、あれはあぶないものです」

「そうでもありません」

「巻いて上げましょう」

女——この兵馬の馴染なじみの馴染なじみになった万字楼の東雲は、兵馬の

手から繃帶の一端を受取つて、軟らかな手で結びはじめました。

「宇津木さん」

手際よく繃帶を巻きながら女は、やさしく問いかけますと、

「何です」

「あなたは、隠していらっしゃいますね」

「何を」

「何をとおっしゃつて、あなた、このお怪我は、ただのお怪我ではありません」

「ただの怪我でないとは？」

「よく存じておりますよ、あなた様のお連れの方々のお噂では、あなたはお若いけれども、たいそう武芸がお出来なさるそうではございませんか」

「なにも、出来はしないよ」

「いいえ、お出来になることはよくわかっています、そのあなた様が、たとい、これだけにしても、手傷をお負いになるのは、よくよくのことでございます」

「そういうわけではないのだ」

「ほほ、そういうわけとおっしゃっても、まだそのわけを言わないじゃありませんか、あたし、最初から、あなた様の御様子のおかしいことを、ちゃんと見ておりました」

「ふむ」

「あなたは斬合いをなすつておいでになつたのでしょうか、あたほどの方ですから、きつと先の人を斬つておしまいになつて、その時に受けた手傷がこれなんでしょう、わたしはそう思います」

「そうではない、ちよつとした怪我だ」

兵馬は極めて怪しい打消しをすると、女はこの怪我をした指先を、ちよつと握つて、

「にくらしい」

「ああ痛ッ」

兵馬はほんとうに痛かつたのです。

「弱い人ですね、そんなことでは仇は討てませんよ」
かたき

東雲はあやなすようにいったのを、兵馬はかえつて意味深く聞いて、

「全く……」

東雲はしげしげと兵馬の面を見直しました。この女は兵馬が仇を持つ身であることを、まだ知らないのです。

「それでは隠さずにいつてしまおう、いかにもこの傷は人から受けた傷なのだ、しかし、斬合いをして斬られた傷ではない、人から打たれた傷なのだ……傷は僅かながら、残念でたまらないのは、受けなくともよい傷を、無理に受けたようになる鍛練の未熟が恥かしいのじゃ」

兵馬は心から残念がつて、その時のことを眼に見るように思っています。

尺八を持って月下にさまようていた人。それを普通の虚無僧こむそうだと思つて、その右を通り抜けようとした時に、その虚無僧が尺八を振り上げて、風を切つて打ちこんで来たのを、かわすに

はかわしたが、充分にかわしきれないで、この指先を砕かれた。その不鍛練が今になっても恥かしい。相手の虚無僧の只者でないことが思われてならぬ。それ故に、この傷が一層痛んで寝られない。それともう一つ……兵馬は改めて女に向い、いとまじめに、

「今日は暇乞いのつもりで来ました。それについて、そなたへ打明けてのお願いがある、とりあえずここへ僅かながら金子きんすを持参致した、拙者わしの帰るまで、五日か長くて十日の間、これをそなたに預つておいてもらいたい、それと共に、その間はそなたの身に変りのないように、そなたはこの万字楼を動かないように起請きしやうをしてもらいたいのだ」

といつて兵馬は、蒲団ふとんの下に置いた一包の金子を取り出して、東雲の前に置きました。

「まあ、足もとから鳥の立つように。旅にお出かけなさるので
すか……そうしてこのお金を、わたしに預かれとおっしゃるの
は？」

「かねがね話してもおきました通り」

兵馬は思い切つて語り出でようとする時、廊下に人の歩む音
があつて、

「東雲さん、東雲さん」

「はい」

その声を聞くと女が、そわそわと立ち上り、

「少しの間、待っていて下さい」

に、つ、こりと愛嬌を見せて行つてしまいました。

その翌日、結束して江戸を離れて、例の甲州街道の真中に立つ

た宇津木兵馬。

今夜こそは、と思い切つて出かけてみたが、宵よいのうちには人に妨げられ、ようやく打解けて物語りにかかるうとする時、また人に呼ばれて女は行つてしまった。そのまま、ついに思いを遂げずして棲を出たのは昨夜のこと。

それがいかにも残り惜しいのである。とはいへ、もう自分があの女を人手に渡したくないという心は、よく通じているはずである。さればこそ女の手許に預けた一包の金、事情は語り残したけれども、それが何を意味しての金だか、女が充分に推量している、と兵馬は、それを自ら慰めつつ、歩くともなく歩いているのです。

その時、女に預けた金。どうして彼は今の浪々の少年の身でそれを得たか。それはまさしく南条力の手から出でたもの。

南条力は、絶えず自分の仕事の邪魔者である山崎讓を亡きものにしたいと思つてゐる。南条の心持では、あえて山崎一人を敵とするのではないけれど、この男あるがために、ややもすれば大事の裏をかかれようとする。それが苦手で、ついに宇津木兵馬を唆^{そその}かした。

兵馬とても、理由なしに唆かされて、それに応ずるほどの愚か者でなし、ことに山崎は京都にいた時分には、同じ壬生^{みぶ}の新撰組で、同じ釜の飯を食った人である。唆かされて討つ氣になるほど兵馬もう、つけ者ではないはずなのに、ついにそれを引受けてしまったのは、誰のためでもない女のためです。知らず識らず陥^{はま}り込んだ女が、他^{あた}し人の手に身受けされようとする噂を聞き込んで、矢も楯もたまらずに、彼は南条の勧誘に従いました。そうして彼は、四谷の大木戸に待受けて山崎を斬つたので

す……ところがそれは当の相手ではなくて、名もない、罪もない、飛脚の男であつた。兵馬は慚愧ざんきと煩悶はんもんとを重ねて、もはや南条に合わす面かおはないと思ひ込んでいたのに、南条の方は案外磊落らいらくで、兵馬に力をつけて、もう一遍やれという。山崎はいま甲州街道を上っている。多分駒木野の関以東のいずれかで彼の姿を見出すに違いない、といつて兵馬に一封の金を与えた。昨夜吉原へ携えて来たのはその金です。ここ数日の間に山崎を斬つてしまえば、かの女を自由の身にするだけの融通は、南条の手で保障がついていると見てよい。

兵馬はこうして、山崎讓を斬りに行く。彼を斬ることは必ずしも難事とは思つていないが、彼を斬るの理由を見出すことに苦しんでいるのです。意義のない仕事には必ず苦悶がある。いかに有利な条件も、その苦悶を救うに足らないことに悩まされ

ている。

頭を挙げて見ると、秋の武蔵野には大氣が爽やかに流れて、遙かに秩父の連山。その山々を数えて見ると、武州の御岳山。みたけさん

そこで流した兄の血潮はまだ乾いてはいないのに、その恨みは決して消えてはいないのに、それを差措さしおいて、自分は今、意趣も恨みもない人を斬ろうとして行くのだ。兵馬は浅ましく思つて、われと自分の胸を強く打ちました。

宇津木兵馬は、まだ日脚ひあしのあるのに府中の町へ入ると、そのまま六所明神の神主猿渡氏の邸を叩きます。さるわたりし

猿渡氏の家は、兵馬にとっては旧知の關係があつて、兵馬の不意の来訪を喜び、それからそれと話が尽きませんでした。

そのうちに、このごろは世の中が物騒で、この界限かいわいも穏かでないから、今この社務所でも、若い者だの、剣術の出来る人だの

を十余人も頼んであつて、警護を怠らないということもありました。六所明神は所領の高も少なくはない。猿渡氏もなかなか裕福を以て聞えた家ですから、その用心もつともと思います。

風呂に入り、夕飯も済み、いざ寝ようという場合に、兵馬はちよつと宿へ用足しに行つて来るといつて、邸を出て夜番の詰所になる社務所へ、下男に案内をしてもらいました。

なるほど、そこには火鉢を囲んで、七八人の人が集まつて雑談に耽ふけつています。下男の紹介で兵馬は一座に仲間入りをする。

一座の中の浪人者のようなのが得意になつて、

「いや、その前の晩じゃ、拙者が、陣街道を三千人まで来た時分に、河原のまん中に當つて異様の物の音がする、はて不思議と耳をすましていると、それが琵琶の音ねじゃ」

この浪人者は、むしろ新来の兵馬に聞かせるつもりで、兵馬

の横顔を見ながら語り出しました。

「へえ、河原で琵琶が聞えましたかね」

とそれにあいづちを打ったのは兵馬ではなく、力自慢で頼まれた若い者。

「たしかに琵琶が聞えたよ、聞ゆべからざるところで琵琶の音がしているから、拙者も不審に思つて、立ちどまつて耳を傾けている間に、例の人馬の音で、この町が物騒がしくなつたから急いで駆けつけたのだが、なんにしても、あの陣街道は鬼哭^{きこく}啾々^{しゅうしゅう}というところである」

「鬼哭啾々というのは何です」

誰かが抜からず反問したのを、浪人は無雑作に、

「それはお化けの出そうなものすごいところという意味だ。何しろ、分倍^{ふばい}河原^{がわら}はむかし軍配河原といつて、何十何万の兵士が

火花を散らして合戦をしたそのあとだ、陣街道の首塚と胴塚、それに三千人というのは、元弘より永享にかけて討死した三千人を葬ったところだから、今でもその魂魄こんぱくが残つて遊びに出る。あの琵琶の音も、たしかに魂魄の致すところに相違ない、こちらに不意の騒動が起つたため、よくその根原を見届けなかつたのが残念じゃ」

兵馬は、それを聞いてしまつてから、この座を立つて寝にくかと思うとそうではなく、まもなく番屋の門を出でた兵馬は、身には饅頭笠まんじゅうがさと赤合羽で、片手には「六所明神社務所」の提灯を持ち、片手には夜番の者が持つような六尺棒について、刀脇差は合羽の下に隠し、木馬もくばから御宮おんみや、本社を一廻りして、一の鳥居から甲州街道の本通りへ出で、両岸に賑わしい府中の宿の真中を悠々と通りましたが、誰も怪しむ者がありません。

兵馬が誰にも怪しまれなかつたのは、ひだりどもえ左巴の紋のついた六所明神の提灯のおかげです。

笠と合羽を用意して出たのは、空模様をもしやと氣遣つたのみでなく、それが身を隠すに都合がよかつたからで、ことに長い刀は見えないようにと苦心して、悠々と府中の宿を西へ一通り歩み抜けて裏へ出ました。

裏へ出るとまもなく、問題の分倍河原です。河原一面に離々りりとした草叢。くさむら月のあるべき空が曇つていて、地上はボーツとして水蒸氣が立てこめているから、さながら朧夜おぼろよの中を歩んで行く氣持です。

鬼哭啾々のところ、ここで前の晩、時ならぬ琵琶の音が聞えた、さいぜんの浪人者がいいました。兵馬は河原道を陣街道の方へ出ようとして、そぞろに進んで行くと、河原の中に一つ

の大きな塚がある。三千人の塚というのは多分これか知らと、兵馬は塚の下にたちどまつて、四方あたりを見廻すと、やはりブーツと立てこめた靄もやの中に、自分ひとりが茫々ぼうぼうと置き捨てられている光景です。

その時に兵馬は、自分が今までとはまるで別の世界へ持つて来られたように感じて、画中の人という気分ひたつてみると、なんだか知らないが、犇々ひしひしとして悠久なる物の哀れというようなものに身にせまつてくるのを覚えて、泣きたくなりました。

ここは武蔵の国府の地。東照公入国よりもずっと昔、平安朝、奈良朝を越えて、神代の時に遡さかのぼるほどの歴史を持った土地。江戸の都が、茫々として無人の原であつた時分に、このあたりは、のうしかりぎぬ直衣狩衣わかとのの若殿ばらが、さんざめかして通つたところである。

源頼朝はここへ二十万騎の兵を集めたそう。新田義貞と北条

勢とは、ここを先途と追いつ追われつしていた。足利尊氏が命からがら辛々逃げたあとなでしこもここを去ること遠くはない。英雄豪傑の汗馬かんばのあとを、撫子の咲く河原にながめて見ると、人は去り、山河は残るといふ懐おもいが、詩人ならぬ人をまでも、詩境に誘い易いのであります。

こういう弱い心を鞭打つには、こういう静かなところへ来てはいけない、と兵馬は、陣街道を真直ぐに、またも府中の宿へ足を向けました。

十三

兵馬はそこを引返して、車返くるまがえしから甲州街道筋へ出て、再び宮前まで来た時、おそろしく急ぎの乗物が一挺、西の方から飛ん

で来るのにでつくわせました。

もとよりここは、甲州街道の道筋では、一二を争う宿駅の一つ。まだ宵の口、幾多の人馬が往来することに、敢て不思議はありませんが、この乗物は、物々しい人数に囲まれ、乗物を囲んで急ぐ三四の人影が、皆さむらいであることが奇怪。そうして先手を払った一人は、これはさむらいさきて体ではないのが、棒を携えて、これが一行の差図ぶりで飛んで来たものだから、兵馬はどうしても、見逃すわけにはゆきません。で、眼前を過ぐる乗物に近寄ると、

「危ない」

棒を持ったのが、それを制止しようとした途端のことです、

「やあ」

これは、どちらが先に言ったのか、

「君は……」

棒を持ったのが踏み留まると、同時に乗物も、これを擁護した物々しい一行も、たじろいでしまいました。

「君は、宇津木兵馬ではないか」

「おお、山崎！」

そこで、おたがいが、やや離れて棒のように突立ったものです。

乗物を守った数名のさむらいたちが、早くも血氣を含む。

「宇津木、君は今頃、こんなところに何をしているのだ」

乗物の先を払って来たその人は、まさしく山崎讓でありました。

「山崎氏、君こそどこへ行かれるのだ、そうしてその乗物は？」
兵馬は反問しました。その時は、充分に足場をみはからつて

いたものらしい。

「どこへ行こうとも君の知ったことではないが、僕の方から、君には充分に聞いておきたいことがあるのだ、いいところで逢った」

といつて山崎は、乗物と、それを守る人々を見廻して、

「君たち、拙者はこの少年にぜひ聞いておきたいことがあるのだが……」

それから六所明神の鳥居の中に眼をつけ、

「暫く、あれで待つていてくれ給え」

山崎の差図通りに、乗物は、鳥居から明神の境内けいだいに昇かつぎ込まれて、鳥居の背後に置かれると、それを擁護しながら、一方には事のなりゆきを注視して、彼等はすわといわば山崎に加勢する身構え気込み充分です。

しかし、山崎は甚だ騒がぬ体^{てい}で、

「宇津木」

と言葉をかけて、一足近寄つて来ました。

「宇津木、君は何か非常に心得違いをしているらしい、ナゼ君は拙者を殺そうとしているのだから、その理由が一向にわからんので、僕は迷っている。考えても見給え、君と拙者とは、壬生の新撰組で同じ釜の飯を食った仲ではないか、それ以来、拙者はいか君に怨まれることをしたのかな」

こういわれてみると、兵馬は返すべき言葉がないので、ぜひなく、

「私の怨みではない……」

といいますと、すかさず山崎は、

「私の怨みでなければ何だ」

兵馬は、この場合、たしかにやや逆上していました。

「ある人に頼まれたのだ」

「人に頼まれた？　ばかな！」

山崎は、カラカラと笑うと、いつそう激昂した兵馬は、

「山崎氏、君にはなんらの怨みとてはないが、君が邪魔をするために、国家の大事を誤るといつて慨なげいている人がある、その人のために君を遠ざけねばならぬ。拙者はその人のために助けられている、その人は拙者の命の親である、余儀なき頼みを引受けて君を遠ざけようとするのも、一つには恩に酬むくゆるため、一つには君等が邪魔をするために、国家の大事を誤ると慨いている——それが気の毒で、頼みを引受けたまでじゃ」

「まあ、待て、待て。君を頼んだというその人も、こつちではちやんと見当がついている、その人たちがほんとうに国家を憂い

ている人か、あるいは乱を好む一種の野心家に過ぎないか、君にはそれがわかつているのか」

「わかつている」

「わかつている？　では、あの連中が本当の憂国者か」

「少なくとも、君等の見ているよりは、広く今の時勢を見ていることだけは確かだ」

「宇津木、君はいやしくもいったん新撰組に籍を置いた人として、この山崎讓の前で本心からそれをいうのか」

「無論のこと」

「そうになると、君は我々同志に縁のあるものを、残らず敵とするのだが、それでいいか。拙者だからいいようなものの、他の同志の中で、その一言を吐けば、君はその場で乱刀の下に、血祭りに上げられることを知っているだろうな」

「拙者は、壬生^{みぶ}の屯所の世話になつたことがあるけれど、新撰組に同志の誓いを立てたものではない。その新撰組とても、幾つにも仲間割れがして、おのおの意見も違つてゐるではないか。尊王攘夷の浪士とても、もとより無頼漢もあれば、真に尊敬すべき人もある。その尊敬すべき点を認めて、同情を寄せるには何の妨げもあるまいではないか。それがために、貴殿より恨まるるならば、恨まれても仕方がない」

「うむ、君が本心からそれを言うならば、我々は今後、君を待つのに裏切者を以てしなければならぬ」

「拙者はあえて裏切りをした覚えはない」

「昨日は我々の組の世話になり、今日はまた西国浪人どもの手先をつとめる卑怯者！」

「卑怯者とは聞捨てがならぬ」

兵馬はムツとして怒りました。その怒りは心頭より発したる怒りではなく、かんしゃく癪癢より出でた怒りでしたけれども、この場合怒ることのできたのは物怪もつけの幸いでした。しかしながら、兵馬の怒るより激しく怒っているのは、山崎讓ではなく、乗物を守護して来た数名の覆面のさむらいたちです。

さいぜんからの事の行きがかりを、彼等は焦じれきつて注視している。遽にわかに乗物の鼻を抑えたことさえあるに、まだ小二才の身分で、山崎讓に向つて、ちつとも譲らぬ談判つらにくぶりが、面憎くてたまらないのでありました。それをまた、かなりの緩慢な態度で応対している山崎の振舞を、はがゆく思つておりました。問答は無益、一蹴して血煙を立てて行けば差支えないものを、なぜ山崎が一目置いた応対ぶりをしているのだらうと、それが悶もどかしくて堪らなかつたから、この場合、火蓋を切らうとする

のを山崎が抑えました。

「まあ、待ち給え、諸君」

「山崎氏、緩慢至極で見てもらえぬ」

「待ち給え、これは僕の旧友で、宇津木兵馬……」

そこで改めて兵馬の方へ向き直り、

「宇津木君、まあ、そこへ掛け給え」

山崎讓は自分が先に社やしろの鳥居の台石へ腰を卸して、

「この間、四谷の大木戸で、君は罪のない者を斬つてしまったな、よく考えて見給え、あれは飛脚渡世の者で、家には養わねばならぬ妻も子もあるのだ、ああいう者を斬捨てて、君はいい心持でいるのか。いい心持ではあるまい、間違えられた僕でさえ、気の毒でたまらないから、通りがかりには、キットあの遺された家族の連中へ、見舞に立寄っているのだ。君の人となり

もたいていは知っている拙者だ、無意味に人間の命を取つて、それを興がる君でないことは、よく知っているつもりだ。それにもかかわらず、ああいうことをしでかした原因を推量してみると、宇津木君、君はこのごろ、女に迷うているのではないか。女に迷うと金に詰まる、これは切つてはめたような浮世の習いだ、君が、よしみ誼はあつても更に怨みというもののない拙者を討とうとするのも、多分、この辺から来ているのではないか、と僕は推量している。また、そうとしかほかに理由が考えられないのだ。じちよう自重してくれ給えよ……しかし、宇津木、それはどうあらうとも、正直のところは、拙者は君を敵に持つことを怖れているのだ。卑怯の意味で後ろを見せるというわけではないが、君が強^しいて事を好めば拙者も手を束^{つか}ねてはおられぬ、同行の諸君もそれを見てはおれまい。ここでおたがい火の出るような

斬合いをはじめて、どっちが勝つてみたところで、どっちが負けてみたところで、あるいは共倒れになつてみたところで、無名の戦いは畢竟無名の戦いで、空しく人の笑われ草となるに過ぎない。ここをよく考えてくれ給え、とかくの判断は後日として、宇津木君、今日は拙者を見のがしてくれ給え。さあ諸君」と言つて山崎は、棒を兵馬の前へ投げ出して、人数の中へハサまるが早いか、一団になつて走せ去りました。

宇津木兵馬は、過ぎ行く乗物の一行を、その提灯の影が見えなくなるまで、茫然として見送つておりました。

「少々物をお尋ね致しとうございますのですが」

呼びさまされて見ると、自分の前に、見慣れない旅人風の男が立っております。

「何事です」

「ただいま、これへ一挺の乗物が通りは致しませんでしたらうか、ええと、たしか、源氏車の紋のついた提灯を持っておりましたはずで、お附添のさむらい衆が四五人、もつともその中に一人、さむらい体でないお方が、棒を持つておいでなさいましたはずで」

「ははあ、そのことか」

「その乗物は黒塗りでございました」

「それぞれ」

兵馬はまだ、過ぎ去ったそのものあとをながめているのです。

「いかがでしょう、通りましたでしょうか、通りませんでしたらうか、通りましたとすれば、どのくらい前のことでございましたらう、ぜひひとつ」

「なに、何をいわれた？」

「じようだんではございません、ただいまこれへ、一挺の乗物が通りは致しませんでしたろうか、たしか源氏車の紋のついた提灯をつけて、お附添のさむらい衆が四五人、もつともその中の一人のお方が、さむらい姿でない棒を持ったお方と、こうお尋ね申しているんでございます」

「うむ、それか、それならば、たつた今、ここを通つた」

「有難うございます」

喜んで駆け出した旅人風の後ろ影を見送ると、その男の足の迅いこと、右の肩から腕へかけて、急にすべり過ぎている姿勢なまり恰好。かつこう

「はて……」

乗物が怪しい！ その瞬間に兵馬の頭脳あたまにひらめいたのがそ

れです。その途端に、鳥居の後ろからそろそろと人の姿が現われて、

「兵馬様、兵馬様」

と呼ぶ声。それは七兵衛の声です。

例によつて、笠をかぶつて合羽を着た旅装の七兵衛は、鳥居の裏から出て来て、

「兵馬様、私はさいぜんから残らずこつちで承つておりました、山崎先生のおっしゃることが、いちいち御尤もに聞えますると共に、あなた様の御身について、合点がてんの参らぬ節ふしが多いようでございます、それを少しばかり、七兵衛にお聞かせ下さいまし」といつて、兵馬とは向い合つた鳥居の台石に腰をかけると、兵馬は、

「ああ、自分で自分の心がわからぬ」

「いつたい、お前様は、ほんとうに山崎先生をお斬りになる御了見ごりようけんなんですか。それはたしかに山崎先生にもおわかりにならないように、私共にも一向解げせないことでございます。なお、山崎様のおつしやるところを聞いておりますと、お前様は、このごろ、吉原へしげしげおいでになるとやら、そこへ凶星を差した山崎先生のおめがねは、見上げたものだど七兵衛も感心致しました。悪所の金に詰よまつて、心にもない人の頼みをお受けになつて、由よしない人を討とうとなさるお前様とは存じませぬが、いかなる人も女に迷うと人間が変わります、もしお金がいりようでございましたら、失礼ながらいくらでも、私の手で都合して差上げますから、輕拳かるはずつみなこととはなさらぬように……と申し上げますと、口幅つたいようでございするが、ともかく、お金で済むようなことでしたら、いつでも御遠慮なく、御相談

を願いたいものでございます」

「いつもながら、そなたの親切は有難い。そういえば世間のことは、大抵は金で済むようなものじゃ、打明けていえば、拙者の迷うていることもその一つかも知れない、金があれば、ここまで深入りをせずともよからうものをとかわれないではないが……」

と兵馬はいいかけて、また打うち消しおれてしまいます。実際、今の兵馬の場合は金の問題で、怨みもない人を殺あやめようと決心を起したのも、せんじつめればそれです。七兵衛からそこへ水を向けられてみると、渡りに舟のようなものではあるが、なんといつでも相手がこの田舎いなか老爺おやじでは、お齒に合わないほどの金が必要と思うから、親切は有難く思っても、いつそう打消れるのが関の山です。ところが七兵衛は、存外に腹がいいと見えて、

「それは何よりです、金で思案がきまることでしたら、及ばず

ながら私が骨を折つてみようではございませんか。いったい差当りお前様は、どのくらいお金がおありになればよろしいのでございますか」

「いいや、それはいうまい、いうたとして詮せんのないことじゃ、今までもそなたには、随分世話になつてゐるのに——」

「まあ、おつしやつてみて下さい、七兵衛の手で出来ればよし、出来なければ出来ないと申し上げるまでですから——」

「正直にいつてみると、差当り三百両ばかりの金が必要です」

「三百両……」

七兵衛は、そこで、ちよつと黙つてしまつたのは、むろん後込しりごみをしてしまつたものと兵馬は諦めあきらめ、いつそんなことをいわない方がよかつたと思つてゐると、七兵衛は率直に、

「よろしうございます、私が、きつとその三百両をあなた様の

ために、三日のうちに調ととのえて差上げましょう。その代り私から、あなた様に一つの願いがございました」

そこで兵馬が意外の思いをしているのを、

「お願いというのはほかではありません、あのお松のことでございます。あの子は私が大菩薩峠の上で拾つて来た、かわいそうな孤みなしご児なんでございます、私だつて、いつまでもあの子の後立てになつてゐるわけには参りませんし、それに、私が後立てになつていたんでは、あの子のために末始終、よくないことが起るかも知れませんが……どうかあなた様に、行末永く、あの子の面倒を見てやつていただきたいのでございます」

こういつて改まつて、お松という女の子の身の上を頼みます。

「それはよく心得てはいますけれども、今の拙者の身では、人の力になつてやることができない」

「それは嘘でございます」

七兵衛は少しく膝を進ませて、

「人の力になつてやるのやらないのというのは、心持だけのも
のです、あなたの心を、お松の方に向けてやつていただきたい
のです、そうしませんと、あの子はいちばんかわいそうなもの
になつてしまいます」

「拙者の心持は、いつもあの人に親切であるつもりだが……」

「ところが、あの子の方では、わたしの親切が足りないから、兵
馬さんに苦勞をさせるのだと、この間も泣いておりました。私
はお若い方に立入つて、野暮やぼなことは申し上げるつもりはござ
いけません、あなた様が、第一にあのお松を可愛がつてやつてい
ただけば、それから後のことは、とやかくと申し上げるのでは
ございません」

といつて七兵衛は、何か思い出したように台石から立ち上り、社の木立から少しばかり街道筋へ出て天を見上げ、

「それでは、兵馬様、私はこれから三日の間に、あなた様のお望みだけのお金を調べて——そうですね、ドコへお届けしましょうか、ええと……浅草の観音の五重の塔の下でお目にかかりましょう、時刻は今時分、あの観音様の前までお越し下さいまし、その時に間違いなくお手渡し致します。今夜は雨が降るかも知れません、私はちよつと側道^{わきみち}へ外れる^そところがございますから、これで失礼を致します」

といつて七兵衛は、そのまま風のように姿を闇に隠してしまいました。

そこで兵馬は、社の木立の深い中をたどつて、社務所の方へ帰りながら、

「わかつたようでわからぬのはあの七兵衛という人だ、金を持っているのか、持っていないのか、トント判断がつかぬ。どこにか少なからぬ小^{こがね}金を貯えていて、表にああして飄^{ひよう}々^{ひよう}と飛び廻っているのか知ら。いつもと違って今宵は三百両というなかなかの大金である、それを事もなげに引受けて、三日の期限をきつたところには信用してよいのか悪いのか、とんと夢のようである。しかし、今まであの人の約束を信じて、ツイ間違つたことがない、それで、ここでも約束通りに信を置いて間違いないだろうか知らん」

と胸に問いつ答えつしていたが、やはり夢のようです。果して易^{やす}々とその要求するだけの金が入ったならば、自分の今の苦痛はたちどころに解放される。解放されるのは自分だけではない、苦^く界^{がい}に沈む女の身が一人救われる。そうして、金にあか

して、愛もなければ恋もない女を買い取ろうとする色好みの老人の手から、本当に愛し合っている人の手に取り戻すことができる。自分の本望、女の喜び、それを想像すると、兵馬はたまらない嬉しさにうっとりとする。

うっとりとして、自分の足も六所明神の社内を、冷たく歩いているのではなく、魂は宙を飛んで、温かい閨ねやの燃えるような夜具の中に、くるくると包まれてゆく心持になつてゆく時、ヒヤリとして胸を衝いたものは、

「あなたの心を、お松の方に向けていただきたいのです、そうしませんと、あの子はいちばんかわいそうなものになってしまう」

といまいい残して行つた七兵衛の一言ひとことがそれです。

十四

狭山さやまの岡というのは、武蔵野の叅村くめむらあたりから起つて、西の方、箱根ヶ崎で終る三里ほどの連岡れんこうであります。武蔵野の真中に、土の持ち上つただけのもので、その高さ二百歩以上のところはなく、秩父ちちぶから系統を引いているわけではなく、筑波根つくばねの根を引いているわけでもなく、いわば武蔵野の逃水にげみず同様に、なんの意味もなくむく、れ上つて、なんの表現もなく寝ているところに、狭山連岡の面白味があるのです。

狭山の尽くるところに、狭山の池があります。その中に小さな島があつて、ささやかな弁天ほくらの祠がまつられてある。府中の六所明神の社頭で兵馬と別れた七兵衛が、ひとり、こつそりとこの弁天の祠に詣でたのは、その翌日の真昼時であります。

七兵衛は弁天様にちよつと御挨拶をしてから、その縁の下を覗き込んで手を入れて探すと、蜘蛛の巣の中から引き出したのが、一挺の小鍬であります。この鍬を片手に提げると、池のまわりを一ぺん通り、西の方へまわつて、松の大樹の落々たる間へ進んで行きました。この辺、数里にわたつて、見渡す限りの武蔵野であります。

七兵衛は池尻の松の大樹の林の中を鍬を提げて歩いて行き、一幹の木ぶり面白い老樹の下に立つて、いきなり鍬を芝生の上へ投げ出すと、その松の根方に腰をおろしました。

そこで煙草入を取り出して、燧を切つて一ぷく吸いつけると、松風の響きが鼓のように頭上に鳴り渡ります。七兵衛は、松の木立の隙間から、晴れた空をながめやり、暫くその空の色に見惚れていたようでしたが、やがて、思い出したように煙管をハタ

ハタとはたとと、再び立ち上つて、例の小鍬を無雜作に拾い上げ、いま自分が坐つていたところから二尺ほど離れた大地の上へ、軽くその鍬先を当てたものです。

七兵衛はここへ、何物かを掘り出しに來たものに相違ない――

この男は改めて説明するまでもなく、極めて足の^{はや}迅い奇怪な盜賊であります。一夜に五十里を飛ぶにはなんの苦もない足を持つていて、郷里の青梅宿^{おうめじゆく}を中心に、その数十里四方を縄張りとし、その夜のうちに数十里を走^はせ戻つて、なにくわぬ面^{かお}をして百姓をしてゐるから、捕われる最後まで、誰もそれを知るものがかつた男であります。

甲所で盗んだ金は乙所へ隠して置き、乙所で掠^{かす}めたものは丙所へ埋めて置いて、自分は常に手ごしらえの絵図面を携帯し、それへいちいち朱点を打つておいて、時機に応じ、必要に従つ

て、その金を取り出す習いになつてゐるのだから、ここへこうして鍬を持つて来てみれば、もうその目的は問はずして明らかなのであります。昨夜、六所明神の社前で、宇津木兵馬に誓つておいただけの金子きんすを、この貯えのうちから引き出しに來たものと思えば間違ひはありますまい。

兵馬は、今日まで、ずいぶんこの男の世話にはなつていたけれども、ただ、こういった義侠的人人に出來てゐるのだらうと思うよりほかは、考えようがなかつたもので、果してこうと覺さとつたなら、その恩恵を受けられよう道理がなかつたのですが、このことは兵馬が知らないのみならず、誰も知つていないので、ただが、んり、きの百蔵というならず者だけが心得てはいるが、これとても最初からの同類でもなんでもなかつたのです。

果して七兵衛は、熱心に芝生の上を掘りはじめました。下は

軟らかい真土まつちで、掘るに大した労力があるわけでもなく、たちまちの間に一尺五寸ほど掘り下げると、鍬くわを抛ほうり出して両手を差し込み、土の中から取り出したのは、油紙包を縄でからげた箱のような一品で、土をふるって大切だいじそうに芝生の上へ移し、再び鍬を取って、以前のように地均じならしをはじめていると、またも晴れた嵐が松の枝を渡る時、

「兄貴、何をしているのだ」

悪い奴が来たもので、これはがんりきの百蔵が風のようにやつて来て、いつか後ろに立っているのです。

「百、何しに来たんだ」

悪いところへ悪い奴と思って、七兵衛が苦りきつていうと、百蔵は洒唼しやあとして、

「日光街道の大松原で、ふと兄貴の後ろ姿を見かけたものだか

ら、こうしてあとをつけてやつて参りましたよ」

「油断も隙もならねえ」

七兵衛が鍬をついてが、ん、きをながめていると、が、ん、きは、その鍬と七兵衛の掘り出した油紙包の箱と両方へ眼をくれながら、

「ひとつ折入つて兄貴にお聞き申したいことがあつて、それ故、おあとを慕つて参りました」

「それはいつたい、どういうことを聞きたいのだ」

「ほかでもありませんが、この道中筋を横と縦へ向つて、今が、ん、りきの百蔵がしきりに捜し物をして飛び廻つているという次第ですが、その捜し物というのは、兄貴の前だが……」

「わかつてる、わかつてる」

七兵衛は頭を振つて、

「手前が、そうしてのぼせ切つて東西南北を血眼ちまなこで馳け廻つて
いる有様を見ると、おれは不憫ふびんで涙がこぼれる、仕舞しまいの果てに
はなけなしの、もう一本の片腕をぶち落されるくらいが落ちだ
ろう……色狂いろきちがい！」

「その御意見は有難えが、時のいきはりで、つい引くに引かれ
ねえ場合なんだから、どうか友達甲斐に、このがんりきの男を
立ててやつておくんなさいまし」

「馬鹿野郎！」

「まあ、そうおつしやらずに……ときに兄貴、いつたいこれか
らがんりきはどっちへ振向いたら目が出るんでございましょう、
そここのところをひとつ」

「おれは易者ではないから、そんなことは知らねえ」

「それが兄貴の悪い癖なんだ、目下めしたの者をあわれむという心が

無えんだから」

「よし、それじゃ、お情けに一つ言つて聞かそう。およそ、甲州の裏表、日光の道中筋で、この間中から、俺は三つの怪しい乗物を見たんだ、その一つは高尾の山の蛇滝じやだきの参籠堂から出て、飯綱権現いづなごんげんの広前ひろまえから、大見晴らしを五十丁峠へかかった一つの山駕籠と、それからもう一つは、府中の六所明神の前を五六人のさむらいに囲まれて、一散に東へ向つて急いだ黒い乗物と、もう一つは……ほぼそれと同じ時刻に、八王子の大横町から日光街道を北へ走つた、やはり黒い一挺の乗物だ、この三つがどうも合点がてんのゆかねえ乗物だと思つてゐるが、がんりき、お前の捜している見当はどれかそのうちの一つだろう」

「違えねえ」

「がんりき、額は丁ちようと打つて、

「この間の晩、小名路こなじの宿を通ると、雲助連中が、小仏へ天狗が出た、天狗が出たというから、よく聞いてみると、なんのこ
とだ、天狗というのは、おおかた兄貴のことだろうと俺だけに
察しがつくと、おかしくつてたまらなかつた。ところで、兄貴、
その三つのうちのドレが本物だか、そこんところをひとつ後生
だから！」

「三つとも見ようによれば、みんな本物だろうじゃねえか」

「世話が焼けるなあ、が、ん、り、きはなにも親の敵かたきをたずねてるん
じゃありませんぜ」

「俺の知ったことじゃねえ、爪先の向いた方へ勝手に行つてみ
ろ」

七兵衛が取合わないで、再び鋏の柄を取つて地均じならしにかかる
と、が、ん、り、きはそれを黙つて暫く見ていたが、

「なるほど、こりや聞く方が野暮^{やぼ}だった、おつしやる通り、爪先の向いた方へ行つてみることにしよう、兄貴、さよなら」といつて、さつさと松の木の間へ姿を隠してしまつたから、七兵衛はその後ろ影を見送つて、

「野郎、気味の悪いほど素直に行つちまやがつた」

本来なら、掘り出した一品に何か因縁^{いんねん}をつけて行くべき男が、一言^{ひと言}もそれに及ばずして行つてしまつたから、かえつて七兵衛が手持無沙汰^{てい}の体です。

十五

宇津木兵馬は、七兵衛の約束を半信半疑のうちに、浅草の観音に参詣して見ると、堂内の巽^{たつみ}に当る柱で噪^{さわ}いでいる一かたま

りの人の声。

「ははあ、あれが安達あだちヶ原はらの鬼婆おにばばだ、よく見ておけよ、孫八」

一勇齋国芳の描いた額面を見上げている。今に始まったことではない。「安政二年乙卯仲春きのとう、為岡本楼主人おかもとろうしゅじん之嘱のしよくのため、一勇齋国芳写」と銘を打った一ツ家ひとやの額面。それを異の柱の下に群がった一かたまりが熱心にうちながめて、

「あの鬼婆の憎い面つらを見ろ、あの出刃庖丁で女の腹を割さいて、孕児はらみこを食い物にするとところだあ、孫八」

「憎い婆！」

褐色かちいろの着物に黒い帯をして、尻端折しりはしよりをし、出刃をかざした形相ぎようそくものすごい老婆の姿に、憎しみの眼を投げると共に、その腰にすがっている振袖を着た可憐な乙女に、痛々しい同情の眼を向けない者はない。

「あの、眼をつぶっているお稚児ちごさんは、ありや何だろう」

といったが、急にそれに返答を与えるものがありません。

つまり、女の腹を割いて、その孕児はらみごを見るといふ安達ヶ原の

鬼婆は、今その携えた出刃庖丁で、あの可憐な振袖を着た乙女

を、犠牲いけにえの俎板まないたに載せようとしている瞬間と見ていると、自然

その左手に気高くほおづえついて眠っている稚児ちご髻むすの美少年が、

よけいな物になって、説明に行詰つまってしまう。それでも

一同は額面たんのうそのものに堪能して、一心にながめていると、

「あれは安達ヶ原の鬼婆の絵ではありませんよ」

従来の説明を一拳くつがえに覆くしたのは、宗匠頭巾そうしょうずきんをかぶって、十徳じつとく

を着た背の高い老人。やや離れたところに立っておりまして。

「え、あの憎らしいのが、安達ヶ原の鬼婆ではありませんので
すか」

「ええ、安達ヶ原の鬼婆とは違います、よくあれを見て、間違えてお帰んなさる人がありますよ」

「へえ、そうですか、ありや鬼婆じゃねえのだとさ」

「そうですか」

十徳の老人は、氣の毒に思つて、

「あれはねえ、石の枕の故事をうつしたもので。昔、この^{かいわい}界隈がまだ草茫々としていた時分に、この近所にあの婆さんが住んでいたものです。こつちにいるのは婆さんの一人娘なんです。この娘が容貌^{きりよう}よしだもんですから、往来の人を連れ込んで泊らせ、石の枕へ寝かしておいて、寝ついた時分に、その旅人の頭を、あの鉋^{なた}で砕いて……出刃ではありません、鉋でしよう、そうして持物を奪い取ることを商売にしていたのです。娘がそれをあさましいことに思つて、自分が旅人の装^{なり}をして身代

りに立ち、婆さんの手で殺されてしまったのです。さすがの鬼婆も、間違つて自分の最愛の娘をころしてしまったものですか、遽にわかに発心ほっしんして、ついに仏道に入つたというところをかいたもので、あのお稚児ちごさんは、その晩泊つた旅人、実は觀世音菩薩の御化身ごけしんが、強慾じやうよくな老婆をいましめの方便ということになつてゐるのです」

人だかりは崩れて、どやどやとお神籤場みくじばの方へ行つてしまつたあとに、兵馬は、十徳の老人の後ろに、まだ額面をながめています。

十徳の老人が、額面を、それからそれと見て歩いているから、兵馬とは後になり、先になり、重なり合つて立ちどまることもあります。

二人が、また重なり合つて立ちどまつたのは、以前の柱より

は少し右の方、菊池容斎の描いた武人の大額の下。

「卒爾そつじながら、これは何をかいたものですか」

と兵馬は突然にたずねてみますと、老人は、ちよつと驚かされ
て振返つたが愛想よく、

「これは、御廐おんまやの喜三太きさんだを描いたものですな」

「ははあ」

「鎮西八郎、鎮西八郎」

そこへ、また押しかけて来た二三の若い者。

「やあ、鎮西八郎、豪勢ごうせいだな。あの弓でもつて、伊豆の大島で、
軍船いくさふねを一つひっくり返したんだから豪勢だ」

「何しろ、鎮西八郎ときちやあ、日本一の弓の名人なんだから」
この連中は、額面の前で、しきりに勇み足を踏んで立去りま
したが、その後で、例の十徳の老人は笑いながら兵馬を顧みて、

「あの国芳の額を安達ヶ原と納まつて見る人と、これを鎮西八郎に見立てて帰る者が多いのですよ……どうです、この筆力の^{しゅうけい}適勁なことは。容齋は豪い^{えら}です。国芳の石枕も出色な出来ですが、こうして並べて見ると格段の違いがありますね」

ちようど、延宝年間に納めた魚河岸^{うおがし}の大提灯を斜めにして、以前の国芳が全体を現わしているところ。老人の説明半ばで、兵馬は内陣の前に手を合わせている吉原芸者らしい女の姿へ眼を奪われてしまいました。濡羽^{ぬれば}のような島田に、こつてりと白粉の濃い襟足を見ると、ゾツとして、あこがれている脂粉^{しふん}の里に、魂が飛び、心が悶^{もだ}えてきました。

七兵衛が遅い——遅いのではない、自分が早過ぎるのだと思ひ返してみると、いつのまにか十徳の老人は額面の前を去つて在らず。自分は空しくその額面を仰いで見たが、早過ぎたといつ

ても、もう日は廻つて、薄暗い堂内の空気は糢糊^{もこ}として画面を塗りつぶしています。

そこで兵馬は、やはり渦巻く参詣人の中を泳いで、堂の外へ出てみました。それにしてもまだ早い、どこで暇をつぶそうか知らん。本堂を経て三社権現をめぐり、知らず識らず念仏堂の方へ歩みをうつすと、松井源水が黒山のように人を集めて居合^{いあい}を抜いている。それにもあまり興が乗らず、去つて豆蔵^{まめぞう}を覗^{のぞ}いたり、奥山の楊弓^{ようきゆう}を素通りしたりしているうちに、日が全く暮れて、兵馬は約束の五重塔の下へ来てみると、

「宇津木様、お待ち申しておりました」

その声を聞くと兵馬は、飛び出つ思いです。

今日は七兵衛が笠もかぶらず、合羽も着ず、着流しに下駄穿きで、近在の世話人が、公事^{くじ}で江戸へ出向いて来たような風采^{ふうさい}。

「お約束のお金を、ここへ持つて参りました」

といつて、懷ろから風呂敷包を取り出す。

「これはありがとう、なんともお礼の申しようがありません」

實際、兵馬は夢のように喜びました。今まで半信半疑とはいうものの、疑いの方が先に立つもどかしさが一時にとれてしまつたので、その包を受取ると、もう足がこおど小躍りして、じつとしていられない思ひです。

「御自由にお使い下さいまし。しかし、申し上げておきませんければならないことは、もし、そのお金の出所を人から問われるようなことがあります、七兵衛の手から出たということとは、決しておつしやらないように……それと、もう一つは、先日申し上げました通り、お松というもののことをお忘れ下さらないように——」

「万事、心得ています」

兵馬は七兵衛の言葉もろくろく耳には入らない。

「それでは、私も急ぎの用事がございますから、これでお暇を致します……」

「拙者わしもこうなつた上は一時も早く……」

「お待ち下さいまし」

七兵衛はなお念を入れて、

「それから兵馬様、もし何かまた御相談事が出来ましたらば、私あさつて

は明後日まで馬喰町の大城屋というのに逗留とまりゆうをしておりますか

ら、甲州谷村やむらのおやじとでもおつしやつておたずね下さいまし」

兵馬は、それも耳へは入らないで、ついにこの場で七兵衛と

袂たもとを別つてしまいました。七兵衛は、なお暫くとどまつて、兵

馬の去り行くあとを見送っていましたが、

「どうも、若い者のすることは、危なくって見ていられねえ、間違いがなければいいが」

と呟つぶやきながら、どこかへ消えてしまいました。

七兵衛に別れた兵馬は、まことに宙を飛ぶ勢いで、吉原の火の中へ身を投げると、茶屋の暖簾のれんをくぐって、乾く舌をうるおしながら、東雲しのめの名を呼んだのは間もないことであります。

「ナニ、東雲は病氣？」

逸はやりきった兵馬の胸に、大石が置かれたようです。

「そうして、どこに休んでいます」

彼は病室まで、とんで行きかねまじき様子を、茶屋ではさりげなくあしらって、

「東雲さんは病気で休んでおいでなさいます、まあ、よろしい

ではごさいませんか、御名代を……」

兵馬は、そんなことは聞いておられない。

「東雲の宿というのはどこです」

「いいえ、そのうちにはお帰りになりますから、まあ、ごゆつくりと……」

「その宿というのを教えてもらいたい」

「さあ、それでは内所ないしょでたずねて参りますから、ともかくお上りくださいまし」

「いいえ、拙者は別な人のところへ行きたくもなければ、行く必要もない、東雲がいなければ、このまま帰ります、帰って、その宿所をたずねて、病氣を見舞わねばならぬ、また話しておいた大事な話の残りがあゝる」

「それはずいぶん、御執念なことでごさいます、では内所へ行つ

てたずねて参りますから」

暫くしてから、また戻つて来た茶屋のおかみさんは、

「あの——主人が留守だものですから、東雲さんのお家がどうしても只今わかりません」

兵馬は熱鉄を吞ませられたように思ったが、このうえ押すと佐野次郎左衛門にされてしまう。

十六

その夜のうちに宇津木兵馬は、ジリジリした心持で、本所の相生町の老女の屋敷へ帰つて来ました。この老女の屋敷というのは、一人のけんしきの高い老女を主人として、勤王系の浪人らしい豪傑が出入りする大名の下屋敷のようなところ。

そこで彼は自分の部屋へ来ると、どつかと坐り込んで、懷中から畳の上へ投げ出したのが、宵のうち浅草の五重の塔下で、七兵衛から与えられた金包です。

「兵馬さん、お帰りになりました？」

とそこへ訪れたのはお松であります。

「いま帰りました」

「お茶を一つお上りなさいまし」

「有難う」

お松は丁寧**に**兵馬にお茶をすすめたが、兵馬の浮かぬ**かおいろ**面色をそつとながめて、

「どちらへおいでになりました」

「エエ、あの……」

なにげないことでも、お松にたずねられると針の**むしろ**薙にいるよ

うな心持がします。

「直ぐにお休みになりますか、それとも何か召し上りますか」

「いいえ、何も要りません……あの、お松どの、そこへ坐つて下さい。あなたにはこの頃中、絶えず心配をかけていた上に、少なからぬ借金までしておりました。今日はこれを預かっておいて下さい」

といつて、兵馬が改めてお松の前に置いたのは、例の金包です。

「ええ？　これを、わたしがお預かりするのですか？」

お松は、その金包をながめて合点がゆかない様子。それは、この頃中の兵馬は、ずいぶん金に飢えているように見えるのに、今ここで突然に投げ出した金は、どう見ても今のこの人の手には余りそうな重味があります。

「預かっておいて下さい」

「お預かり申してよろしうございますが……数をお改め下さいまし」

「数をあらためる必要はありません、そのまま、あなたにお預け申します」

「いいえ、どうぞ、わたしの前で数をおあらため下さいまし」

「それには及びません」

「兵馬様」

お松は、あらたまつて兵馬の名を呼びました。兵馬は答えな
いで、火鉢の前にじつと俯うつむいている様子。

「夜分、こんなに遅く、これだけのお金をただ預かれとおっしゃ
られたのでは、わたくしには預かりきれないのでございます、
そう申し上げてはお気にさわるかも知れませんが、このごろは
何かの入目いりめで、わたくしたちの目にさえお困りの様子がありあ

りわかりますのに、今晚に限って、これだけのお金を持っておいでになったのが、わたくしにはかえって心配の種でございませう」

「いや、この金は決して心配すべき性質の金ではありません、ちと入用いりようがあつて、人から融通してもらつたところ、急にそれが不用になつたから、あなたに預かつておいてもらいたいです、金高は三百両ほどあると思います」

「どなたが、その三百両のお金を、あなたに御融通になりましたのですか」

自分の貯えも、お君の貯えも、一緒にして融通してしまつたほどの兵馬の身に、忽ちたちま三百両の金を融通してくれるほどの人がどこにあるだろう。それを考えると、お松は兵馬の心持が、怖ろしいもののように思われてなりません。

「誰でもいいではないか、わしを信用して融通してくれた人の金、それを、あなたに預かってもらうのに、誰へも憚はばかることはありませんまい。拙者は、その金をあなたに預けるばかりではない、あなたのいいように処分して使ってもらいたい、お君さんへの借りもその中から返して下さい……遠慮はいりません。それでもなお納得なっとくがゆかないならば、わしにその金を融通してくれた人の名をいいますよう。それは、そなたのおじさんの七兵衛の手から出たものじゃ、わしはこれからあの人を訪ねて、相談をして来ようと思うことがあります」

宇津木兵馬は金包をお松に託しておいて、もうかなり夜も遅いの、またも外出してしまいました。多分、じつとしてはいられないことがあるのでしよう。あるはずです。

お松やお君の金さえも融通してもらい、自分の差料さしりょうをさえ売

ろうとした身が、忽ち三百両の金を不用として投げ出して行つてしまつたのは、それと共に、絶望に帰するものがあればこそです。

東雲が病氣で親許しのめへ戻つていゝといふのは嘘だ、身請みやうけをさ

ねばならぬことです。この絶望と、今までの自分の血迷いかげん。相手は、情を売るのが商売の女で、請け出す人は、金に糸目をつけることを知らない楽隠居である。部屋住みの、修行中の自分が、その中に入つて齒が立つものではない——それをいま悟つても、人には相当に未練というものがある。兵馬は多分、これから思い起した七兵衛の言葉の端をたどつて、馬喰町ばくろちやうの古城屋というのへ相談に行くのかも知れない。

しかし、気の毒なのは出て行つた兵馬よりも、残されたお松

であります。

大菩薩峠の上で、祖父は殺され、自分は知らぬ旅の人に助けられて、箱根の湯本で湯治とうじしている時に蒔まかれた二人の縁が、本郷の妻恋坂の雨やどりで芽ぐみ、その後、自分は京の島原の生活から花園のわび住居ずまい、京都、大和路の間でも絶えず頼りつ頼られつして来たその人は、親しみが余りあるのに、情わきめというもの知らない人であつた。いちずに目的に向つて他目わきめも振らないのが物足りないだけ、それだけ頼もしいと思つていたのに

今となつて、こういうことにしてしまつたのは自分が至らないからだ、お松は残念でたまりません。お松はまたこんなことも、内々けど気取りもし、聞いてもいたのです。それは自分を養女として仕込んでくれたお師匠様のお絹が、兵馬を誘惑したこ

とも一度や二度ではなかったこと。お君でさえが、一時は兵馬にぼーつとしていたこともある。そういう誘惑が数々あるのに、それを受けつけなかった兵馬の一徹なところは、自分としても暗に勝利のほほえみを以て迎えていたのに、今となつて、色あをおんなふぜい売る女風情に、あの人の心全部を奪われてしまったとなると、お松の気象では、泣いても泣き足りないほどの口惜くしさがあるのも無理がありません。

果して誰の力でも、兵馬さんを、もとの人にすることはできないのか知らん。七兵衛のおじさんは旅にばかりいて落着かないし、今、兵馬さんが、先輩として敬服しているのはこの南条先生であるが、あの先生もあんまりたよ、り、ない。兵馬さんを指導する恩人として見てよいのか、或いは兵馬さんをダシそに使そのつてか睨なめておられるのか、もう少し手強てい意見ごをして下されたら……

お松はあまりの残念さに、つい人を怨んでみる気にもなりましてが、どう考えても口惜涙くやしなみだを抑えることができません。

ぜひなく、その金包を抱いて、泣く泣く廊下を伝つて自分の部屋へ歩いて来ると、途中で後ろからその肩を叩いたものがあります。

「お松どの、宇津木にも困つたものだな」

それは南条力の声であります。

「はい」

お松は返事をしながら、しゃくり上げてしまいました。

「しかし、あれも馬鹿でないから醒さめる時があるだろう、偽いつわりの情から醒めてみねば、真実の旨味うまみがわからん、どのみち、真実なものが勝つのだから、あまり心配せんがよい」

「有難うございます」

とはいったが、それもお松には、一時の気休め言葉のように思われて、自分の部屋へ転げこむと、金包を抱いて散々に泣きました。

まもなく庭を隔てた一間の障子にうつる影法師は、今の南条力。

秀ひいでは不二ふじの岳たけとなり

巍々ぎぎ千秋そびに聳え

注そそいでは大瀛たいえいの水となり

洋々八州をめぐる……

案つくえによつて微吟し、そぞろに鬱懷うつかいをやるの体てい。

興に乗じて微吟が朗吟に変わつてゆく。

この人は、会心の詩を朗吟して、よく深夜人をおどろかす癖があります。

志賀、月明の夜

陽あらはに鳳輦ほうれんの巡じゆんを為す

芳野の戦たけなはひ酣たむろなるの日

また帝子てんしの屯たむろに代る

或は鎌倉いはやの窟いほやに投じ

憂憤えんえんまさに悵々

或は桜井の駅に伴ひ

遺訓何ぞ慇懃いんぎんなる……

歌いゆくと興がいよいよ湧き、

昇平二百歳

この氣、常に伸ぶることを得

然しかしてその鬱屈あたに方つてや

四十七人を生ず

すなは
乃ち知る、人亡ぶと雖も

この靈未だ嘗てほろびず……

我もまた詩中の人となつて、声涙共に下るの慨を生じ来るの時、廊下にドヤドヤと人の足音。

その吟声がやむと暫くあつて、南条の影法師と向い合つて、新たに幾頭の影法師。

「南条君、いま戻つた」

「やあ諸君」

たちま
忽ちに主客の影法師が寛いで、室内が遽かにあわただしい気分になる。

そこで、おたがいの舌頭から火花が散るように、壮快な話題が湧き上る。

察するところ、南条を的にして数名の壮士が、いま旅から帰つ

たばかりで、やにわにここへ押しかけて来たものと見える。

筑波、日光、今市——大平山等の地名が交々こもごもその話題の間に
はさまれるところを以て見れば、この連中は常野じょうやの間かんを横行し
て戻つて来たものと思われる。

しかし、ある時は、その話題がとうてい間を隔てては聞き取
れないほどの低声になつて続くことがある。そうかと思えば忽
ちに崩れて、快哉かいさいを叫ぶようなこともある。

そうして一通り、重要な復命か、相談かが済んだと思われる
時分に、

「日光街道で、変な奴に逢つたよ」

これは余談として、一座の中の五十嵐甲子雄が発言でありま
す。

「誰に？」

南条力が受取ると、

「あの、ならず者のが、んりきの百蔵」

「ははあ、あいつに日光街道で……」

「何か知らんが日光街道を、血眼ちまなこで飛んで歩いていたから、呼び留めて聞くと、奴なんともいえないイヤな苦笑いをして、お帰りになったら南条先生に、先生ではあんまり人が悪過ぎますぜと、そうおつしやつて下さいといったまま、逃げるように行ってしまったかつこう恰好が、笑止しょうしせんぼん千万であつた」

「ふふむ」

南条力も何を思い出したか、吹き出しそうな気色です。

「しかし、山崎讓にであわなかつたのを何よりとする。時に、宇津木兵馬はいるか知らん」

五十嵐がたずねると南条が、

「あれも、血眼になつて、たつた今、どこかへ出て行つた」

「例のだな——困りものだ」

「天下を挙げて血眼になつてゐるのだ、達人の目から見ただ日は、権勢に飢えて血眼になつてゐる奴等と、たいして拵えらぶところはあるまいじゃないか、我々もまた御多分には洩れまいじゃないか。しかし諸君、時勢の展開のために、おたがいは、もう少し血眼にならなければ嘘だ、少なくとも色に心中するほどの真剣さを以て、国家の大事に当らねばこの民が亡びる……」

南条力は、慷慨こうがいの意気を色に現わしました。

十七

両国の女輕業の親方お角は、

「ああもしようか、こうもしようか」

と次興行の膳立てに、苦心慘憺の体ていです。

というのは、肝腎の呼び物、清澄の茂太郎に逃げられて、三日間病氣休業の張出しをして、その間に連れ戻そうとしたが、とうとう発見することができず、やむを得ず熊の曲芸と、春雨踊りというのでお茶を濁していたが、この次に何を掛けよう。これがためにお角は、火鉢によりかかつて、長い煙管きせるで煙草を吹かしてみたり、置いてみたり、苦心慘憺のところですよ。

しかし、絶えず行詰まって展開を求めることがこの女の苦心でもあれば、そこにはまた言うにいわれぬ楽しみがあるらしく、目先を変えて同業者をあつといわせ、江戸の人気の幾部分を両国橋の自分の小屋へ吸いとることに、この女の功名心が集まつて、それがためこの女は、興行師の味を忘れることができない

のであります。

けれども、今度という今度はかなり行詰まつて、さすがの女策士も展開の道に窮してしまつて、「ああもしようか、こうもしようか」の決着が容易につかない。それというのも、不意に清澄の茂太郎を奪われたからです。はるばる安房の国まで生命いのちがけで行つて、不思議な縁で茂太郎を連れて来て、「山神奇童」の売り物で呼んでみると、案あんの定大じやう当りで、この分ならば、趣向を変えて二月や三月は、この人気をつなぐこともできよう、そのうちに、またまた奇策をめぐらして、満都といわないまでも、満両国橋をあつといわせることはお手の物だという得意があつただけに、途中で茂太郎を奪われたことが痛手です。

いったい、この女が最近において当てた二ツのレコードは、印度の黒ん坊の槍使いと、それから山神奇童の清澄の茂太郎に

越すものはないのに、二つとも大当りに当りながら、どちらも途中で邪魔の入ったのが癩しやくです。

「ちえッ、どこかで見たつけ、あのちんちくりんの黒ん坊を。もう一ぺん引張つて来ようか知ら」

と、お角がいまいますように未練を残してみたのは、例の宇治山田の米友のことであります。

「あれならば、まだまだけっこう人氣が取れるんだけれど、あいつは、馬鹿正直で、まるつきり商売気というものが無いんだからやりきれない」

お角は、米友に未練を残しながら、煙管きせるをやけにはたいて、それからそれと問わず語りをはじめている。

「お祖師様の一代記を菊人形に仕組んでみたら、という者もあるが、あれはいけないねえ、人々にんにんに相当したことをやらなけりや

物笑いだからねえ……いつそ、上方から女浄瑠璃の大一座でも招よんで来ようか知ら。それも大がかりだし、第一それじゃ今の一座が納まるまいし……」

とつおいつの末が、朱羅宇しゅらうの煙管へ、やけに煙草を詰め込むのが落ちで、むやみに焦じれったがつているところへ、二階で物音がしましたから、吸いかけた煙管をはなして天井を見上げている。

「お起きなすつたのか知ら」

ここは、両国橋ぎやうこくの雑沓ざつさうが聞えない程度の距離のしもたやで、大抵のお客は断わつて、次興行の秘策をめぐらすお角の唯一の控所であるのに、二階でまだ寝込んでいた人があるとすれば、それは誰だろう。お角も相当に腹のある女だから、まさかがんり、きの百蔵のような男を、ここへ引張り込んで寝泊りをさせるよ

うなこともあるまいに。

お角が、天井を見上げている間に、二階で物音をさせていたのが静かに歩いて来て、やがて梯子段の上がミシリミシリと音を立てはじめる。そこでお角はやや居ずまいを直して、

「お嬢様、お危のうございますよ」

煙管を片手に梯子段を見上げていると、だまつて下りて来る人があります。ほどなくお角の前へ姿を現わしたのは、ねまきに羽織を引っかけた女の姿に違いはないけれど、どうしたものか、頭からすつぽりとお高祖こそずきん頭巾をかぶったままです。

「おかみさん」

「お嬢様、もうおよろしうございますか」

「ええ、もう癒なおつてしまいました」

お角が、ていねいであるのに、女はなかなか鷹揚おうようです。それ

に、いくらなんでも、人の前に出て頭巾をかぶつたなりに挨拶をするのは、みようによつては甚だしい横柄おうへいなもので、それをお角ほどの女が、一目置いて応対しているのは、よほどの奇観といわなければならないことです。

「まあ、お話し下さいまし、わたしも退屈して困っていますから、どうぞ」

といつて、お角は、さながら主筋にでも仕えるように、至つて、いねいに座蒲団をすすめると、女は、その上へ坐つても、いっこう頭巾を取ろうとしないし、お角も一向、それを気にしないのがおかしいほどです。

それからお角が、お茶をすすめたり、羊羹ようかんをすすめたりしていると、

「おかみさん」

「はい」

「わたしは、もうすっかり癒なおりましたから、どうぞ、わたしの頼みを聞いて下さい」

「ですけども」

「いいえ、かまいませんから」

お高祖頭巾の女は、何かを頼みに来たのです。けれども、頼むというよりは圧迫するような態度で、それをお角ほどの女が、あしらい兼ねているあんばいがいよいよ変です。

「ですけども、お嬢様……」

と、お角がようやく立て直して、

「そう申してはなんですけれども、わたしは、あなたが、もうあの方にお目にかからないのがおためになると存じます」

「それはどうしてですか」

「あなたは、御存じになつておりますか知ら」

「何を」

「あの方の本当のお名前を」

「エエ、あれは机竜之助と申します、吉田竜太郎というのは仮りの名前です」

「そうしてお嬢様、あなたのごらんになつたのでは、あの方は善い人ですか、それとも悪い人ですか」

「どちらだか知りませんが、わたしは、あの方が大好きなのです」

「もし、悪い人であつても？」

「ええ、あの方がほんとうに、わたしを可愛がつてくれるから、それでわたしはあの方が忘れられません、あの人だけがほんとうに、わたしを可愛がつてくれるのです。それは、あの方が眼

が見えないからです、眼が見える人は一人でも、わたしを可愛がる人はこの世にありません」

「けれども、お嬢様、あの方は悪人ですよ、あの方の傍にいと、いつか、あなたも殺されてしまうことを、お忘れになつてはいけません」

「いいえ、あの方は、決してわたしを殺しはしません……わたしを殺さないだけではなく、わたしが傍にいれば、あの方はほかの人を殺さなくなるのです。わたしとあの人とは、しつくりと合います、わたしの醜いところが全く見えないで、わたしの良いところだけが、この肉体からだも心も、みんなあの人のもものになつてしまうのですから。わたしは、天にも地にも、あの人よりほかに可愛がつてくれる人もなければ、可愛がつて上げる人もないので……ごしよう後生ですから、あの人に会わせて下さい、いく

らお金がかかってもかまいませんから、あの人の行方を探してみて下さい」

この女はお銀様——甲州有野村の富豪藤原家の一人娘。花のような面を、鬼のように焼き毀たれてから、呪われた心^{こゝろ}が宿つたのはぜひありません。スラリとした娘盛りの姿に、寝るから起きるまでお高祖頭巾の裡^{うち}につつまれた秘密、それに触るるものは呪われ、これに触れずしてその心だけを取るもののみが、溶鉋のように溶けた熱い肉に抱かれる。

お角はお銀様だけがどうも苦手^{にがて}です。この人に向うとなんだか圧^おされ気味でいけない。なんという負い目があるわけではないが、この人には、先^{せん}を制されてしまいます。そこで申しわけをするように、

「よろしうございます、そういうことを頼むには慣れた人を知つ

ていますから、近いうちに、キツとお嬢様のお望みの叶うようにして上げましょう」

「どうぞ、お頼み申します」

といつてお銀様は、お辞儀をして立つて行きました。

二階へ上つて行く後形うしろすがたを見ると、スラリとしていい姿です。

品といい、物いいといい、立派な大家のお嬢様として通るのを、あのお高祖頭中の中の秘密が、めちやくちやに、一つの人生を塗りつぶしてしまうかと思うと、さすがに不憫ふびんですが、鉛色に黒く焼けただれた顔面の中には、白味の勝った、いつも睨にらむような眼差まなざしし。お角でさえも、その眼で見られた時は、ゾツおもてそとして面を外らさないことはありません。

お銀様が二階へ上つてしまうと、ホツと息をついたお角は、急に何かの重しから取られたような気持になつてみると、今の

不憫さが、腹立たしいような、嫉^{ねた}ましいような氣持に變つてゆきます。巢鴨の化物屋敷の土蔵の二階で、あの人と机竜之助とが、うんきの中で、夜も昼も水綿^{みずわた}のように暮らしていた時のことを思うと、お角は憎らしい心持になつて、よくも図々しく、人にあんなことが頼まれたものだ、と、やけ氣味で煙管を取り上げると、その時、表の格子戸がガラリとあいて、

「こんにちは、御免下さいまし」

「おや、誰だい」

「按摩^{あんま}でございます」

「按摩さんかえ、さあお上り」

「どうもお待遠さまでございました、毎度御^ご鼻^ひ肩^いに有難うございます」

按摩は、こくめい、に下駄へ杖を通して上へあがつて来ると、

お角はクルリと向きをかえて、肩腰を揉もませにかかる。

「なんだか雨もよいでございますね」

「降るといいんだがね」

「左様でございますよ」

按摩は臂ひじでお角の肩をグリグリさせながら、お天気のお世辞をいつているとお角は、その腕たくまの逞たくましいところを見て、

「按摩さん、お前は幾つだえ」

「え、私の年でございますか、まだ若うございますよ」

「若いのは知れているが、幾つにおなりだえ」

「エエ、十三七ツでございます」

「ちようど？」

「左様でございます」

「おかみさんはありますか、それともまだ一人ですか」

「へへえ……」

「なんだね、その返事は。あるのですか、ないのですか」

「あるですよ、一人ありますのですよ」

「一人ありやたくさんじゃないか」

「おかげさまでどうも……相済みません」

「おかみさんがあつたつて、済まないことはないじゃないか」

「なかなか親切にしてくれますから、それで私も助かります」

「おやおや。そうして何かえ、そのおかみさんは容貌きりようよしかね」

「へえ、容貌きりようのところは私にはわかりませんが、皆さんが、私

には過ぎ者だとおっしゃって下さいます」

「やりきれないね」

「ところが、ごしんさま、容貌かたわものがよくて、氣立ての親切な申し
分のない女が、私共みたような不具者のところへ来てくれるか

らには、どのみち、ただ者じゃありますまい」

「前はどうかだっていいじゃないか、今さえよければ」

「ところが、今だって本当のところはどうだかわかりやあしません、わからないけれども、私は最初から眼をつぶっていますからね」

按摩の言葉は、妙にからんで来ました。

按摩を相手に話しているところへ、勝手口から静かに入つて来て、

「お母さん、ただいま戻りました」

「梅ちゃんかえ」

そこへ、手をついたのは十四五になる小娘であります。

「帰りに、楽屋の方へ廻つて来たものですから、ツイ遅くなりました」

「楽屋では変ったこともなかったかエ」

「あの、力持のお勢せいさんが、少しお腹が悪いと言つて寝ていました」

「勢ちゃんがかい」

「ええ、それでもたいしたことはないのでしょう、寝ながらみんなと笑い話をしていましたから」

「鬼のかく、ら、ん、だ、ろ、う」

「あ、そうそう、福兄ふくにいさんが来て待つていました、今日はどうしても親方にお目にかかりたいが、いつ帰るだろう、帰るまでまつているとおっしゃいました」

「ここを言やあしないだろうね」

「エエ、誰も言いませんでした。多分、晩方までには帰るでしょうと、お勢さんが言いましたら、福兄さんが、それじゃ晩方ま

で待っていていようとお言いでした」

「何だろう」

お角が、ちよつと首を傾かしげた時に、按摩あんまは一通り療治を終つて、

「どうも御窮屈さまでございました」

「御苦労さま」

そこで按摩にお鳥目ちやうもくをやつて歸してしまつてから、お角はま

だ思案の体ていで、

「福兄さん一人で来たのかエ、誰もお連れはなかつたかエ」

「ええ、どなたもお連衆つれしゅうはありませんようでした」

「あつてみようか知ら」

小娘は唄の本を箆たんす筒へ載せて、勝手元を働こうとするのを、

お角が呼び留めて、

「そつちはあとにして、二階のお嬢様に御膳ごぜんを上げて下さい」
「承知いたしました」

この小娘は、お角が掘り出して貰い受け、今、仕込み最中の、ちよつといい子で、お母さん呼ばわりをして懐なついています。膳ごしらえをして二階へ上ったあとで、お角は巻帯をズルズルと解いて、着物をきがえにかかりました。

藍の小弁慶のお召の半纏はんてんを着て、鏡に向つて立膝をしながら、洗ひようごい髪かみの兵庫ひょうごに、黄楊つげの櫛くしを無雑作むぞうさに横にさして立ち上るところへ、二階から小娘が下りて来ました。

「梅ちゃん、わたしは、これから行つて来るから、お留守を頼みますよ」

「行つていらつしやいまし」

「もし留守の間に、誰か尋ねて来ても、わからないと言って帰

しておくれ」

「よろしうございます。それでもお母さん、いつかのように、わからなければ旦那のお帰りまで待っていると云つて、坐り込むような人が来たらどうしましょう」

「そうね。では、面倒だから鍵をかけておしまい」

「はい」

「そんなに遅くならないうち帰つて来るつもりだけど、福兄さんとの話の都合で、もし遅くなるようだったら、誰かをお相手によこすから」

「承知いたしました」

「それからね、二階のお嬢様がモシどこかへ出たがつても、お出し申さないように。そうそう、勢ちゃんが病氣なら、勢ちゃんをお伽ときによこそう」

「お勢さんが来てくれれば、本当の百人力ですけれど、わたし一人でも大丈夫ですよ」

「勢ちゃんをよこしましょう」

と言つてお角は、この家を出て行きました。

十八

両国の女輕業師の樂屋へ来て、お角を待つてゐる福兄ふくにいなるものは、御家人崩れの福村のことで、巢鴨の化物屋敷では、天晴あつぱれ神尾主膳の片腕でありました。

今、樂屋の美人連中（あまり美人でないものもある）を相手に、しきりに無駄口を叩いてゐる。歳はまだ若いが、でつぷり太つて、素肌に羽二重の袷あわせ、一つ印籠いんろうというこしらえで、

「そいつあ乙だ、一番その朝比奈あさひなの口上言いというのを買つて出ようかな」

「福兄さんが朝比奈をやつて下されば、巴御前ともえごぜんはわたしのものでしょう」

と、腹が痛いと言つて寝込んでいた力持のお勢が乗り出して来ると、はたにいた美人連が、

「お勢さんの巴御前に、福兄さんの朝比奈は動かないところだわ。それでは、わたしは何を買つて出ようか知ら」

「わたし、おちやつぴいになるわよ」

「わたしも、おちやつぴい」

「では、わたしもおちやつぴいになりましょう」

「あなたお米屋のおちやつぴいになりなさい、わたし酒屋のおちやつぴいになるわ」

「そう、それじゃ、わたしお肴屋さかなやのおち、や、つ、ぴ、いになるから、あなた薪屋のおち、や、つ、ぴ、いにおなりなさい」

「それから、わたしと組ちゃんとは、質屋と古手屋のおち、や、つ、ぴ、いになって、表口から乗込むことにしましょう」

「嬉しいわ、そうして、おち、や、つ、ぴ、い、が揃って、万夫不当の朝比奈をぎゅうぎゅう言わせてやれば、ほんとに儲もうかるわねえ」

「そこへ、裏手から、こつそりと巴御前が現われて、窓口からお金を投げ込んで行くところは浚さらわれても仕方がない、何でもおち、や、つ、ぴ、い、になって、朝比奈をギュウと言わせてやりさえすれば胸すが透くわ」

美人連がは、し、や、ぐ、の、に、福兄は多少の不服で、

「そうおち、や、つ、ぴ、い、ばかり出来たって、梶原かじわらがいなけりやお芝居にならねえ」

「そうですね、梶原は誰のものでしょう」

「水芸のお政さんじゃ、少し年功が足りないわねえ」
みずげい

「いやよ、わたし、梶原なんか大嫌い。同じ梶原でも、梅ヶ枝の源太なら附合つてもいいけれど、敵役かたきやくの梶原なんて、第一、わたしの柄にないわ」

「人魚のお作さんでも、憎みが利きかないかねえ」

「あれじゃ、あんまり温和おとなし過ぎるわ。と言つて、蛇使いのお

金さんは柄が小さいし」

「そうそう、あるわよ、あるわよ」

「誰？」

「怒られると悪いから」

「かまわないからお言いな」

「でも叱られるといやよ」

「誰も叱るものはいやしない、ねえ、福兄さん」

「ああ、どうして、梶原という役は、あれで色悪いろあくにはなっているが、ほんとうはなかなか腹のある奴だから、わりふられたつて怒るがものはねえや」

「それじゃ言いましょうか」

「お言い、お言い」

「う、ちの親方」

「なるほど、まあ、その辺だろう」

「そこで錦絵姫が一枚欲しいのだが、おちや、つ、ぴい、を外はずしてお姫様をふるわけにもいかず、これも難役だろうじゃないか」

「お姫様なら、わたし代って上げてでもいいわ」

「わたしも、おちや、つ、ぴい、をやめて、お姫様の方へ廻ろうか知ら」

「わたしは、おちやつぴいはおちやつぴいとして、お姫様と二役やつてみたい」

「まあ、慾張り……」

「静かにおし、梶原様のお入り」

力持のお勢が眼面めがおで知らせたところへ、親方のお角がやつて来ました。

お角が現われると、美人連も急に引締まつて、どてらを被かぶつて寝ていた力持のお勢でさえも、起きて迎えに出ました。

「勢ちゃん、あんばいはどうです」

「有難う、格別のこともございません、よくなりました」

「大切だいじにおしよ」

美人連は、そわそわとして持場持場についたり、控ひかえへ出て行ったりして、そこに残るものは福兄とお角の二人だけです。

「福兄さん、よく無事でながらえておいでになりましたね」

「恐れ入りやした」

福兄は明荷あけにのところへ背をもたせて、ちよつとばかり頭を下

げて、

「拙者の方でも一別以来、ずいぶんの御無沙汰だが、親方、お前の方でもずいぶん薄情なものだ、化物屋敷が焼けて、御大おんたいはあの通り苦しんでいる、我々はみな散々ちりぢりバラバラになっているのに、ツイぞ今まで、福はどうしているかと、お見舞にあずかつた例ためしがない」

「その恨みなら、こつちに言い分が大有りさ。立退き先をあれほど探して歩いたのに、わからないばかりか、わかりきっている行先をさえ、わたしにまで隠そうとなさるなんぞは、水臭いにも程のあつたもの、癩しやくにさわつてたまらなかつたのさ」

「それにはまたそれだけの理窟があつて、あの当座は、あんまりいどころを人に知られなくなつたのさ。その点は喧嘩両成敗として、御大も実は苦しみ抜いている、一度、見舞に行つてくれないか」

「上りますとも。上つてよければ今日にでもあがりますけれど、そんなわけだから遠慮をしていました」

「もう遠慮は御無用」

「神尾の御前のお怪我はどうですか」

「創きずは癒着するにはしたが、なにぶん、眉間みけんの真中を牡丹餅ぼたんもち大だ

け剝くり取られたのだから、その痕あとがありありと残つて、まあ出

来損あないの愛染明王あいぜんみょうおうといった形だ、とても、あの人相では、世

間へ出る気にはなれないとあつて、大将当分は引込んでゐるはずだ」

「怖ろしいことでしたね。何しろ、あの時に釣瓶つるべへ肉がパツクリと喰付くつついた有様は、眼の前に物の祟りたたを見るようで、ゾツとしてしまいました」

「御大も、あの時のことを思い出すと癪にさわると見え、身ぶるいをして、憎いおしやべり坊主！ と口惜くやしがっている」

「全く、あの小坊主は変な坊主でした、うちの茂太郎の友達だと言つて来たこともありましたが、怖いほど勘のいい——」

「全くあの時分の化物屋敷は、名実共に化物屋敷であつたが、御大があぎようその形相では、今後の化物ぶりが一層思い合あわされるのだが、当分、田舎いなかに引込んで此方こちへは出て来まい」

「どこへ引込んでおいでになつていますか」

「栃木の大中寺だいちゅうじというところに、もとの知行所があつて、そこへ隠れている」

「栃木の大中寺、たいへん遠いところへお越しになつたものですね」

「なに、遠いといつても日光より近いのさ。一度、日光参詣をついでに、一緒に見舞に行かないか」

「ぜひお供を致しましょう」

「ところで、今日ワザワザやつて来たのはほかではない、君にちよつと金儲けの口を授けようとして来たのだ。というのは、ながらく西洋へ売られて行つて、あつちで珍しい手品を覚えて来た奴がある、それをうまく売り込みたがっている口を聞き込んだから、頼まれもしないのに持ち込んで来たものさ」

「それは耳よりの話ですねえ」

お角は乗氣になつてしまいました。

「詳しい話は拙者のところへやつて来給え、小石川の茗荷谷で、

みようがだに

きりしたんざか
切支丹坂を上つて、また少し下りると、長屋門のイヤに傾いだ
のが目安だ……」

十九

両国橋の女軽業の小屋を出た御家人くずれの福村は、帰りが
けに通油町とおりのまちの鶴屋そうしどんやという草紙問屋へ寄つて、誰へのみやげか、
新版の錦絵を買い求めながら、ふと傍かたえを見ると、お屋敷風の小
娘が一人、十冊ばかりの中本ちゅうほんの草紙を買い求めて、それを小風
呂敷に包んでいるところであります。

まず、その小風呂敷に目がつくと、紫縮緬むらさぎちりめんのまだ巳みの刻こくなの
に、五七の桐が鮮かに染め抜いてあります。はて、物々しい、と
福村はそれに目を奪われて、いま包もうとする草紙を覗のぞいて見

ると、上の一揃いは「常夏草紙」、下のは「薄雪物語」、どちらも馬琴物と見て取りました。

「さようなら」

代を払って、娘が店頭みせさきを去ると、

「毎度、御贔屓ごひいきさまに有難う存じまする」

大切なお得意先と見えて、番頭は特別に丁寧に、この小娘のお使に頭を下げて送ったから、福村がはじめてこの娘を見直すと、

「お松どのではないか」

娘が振り返って見て、

「まあ、福村様」

二人は鶴屋の店頭で、意外の邂逅かいこうに驚いた体ていです。

娘は申すまでもなく、本所の相生町の老女の邸のお松であつ

て、この男を知っているのは、ずっと以前、神尾主膳の伝馬町の屋敷に仕えていた時分のことで、その時分から、この福村は神尾の屋敷へ出入りしていた道楽友達であります。

あの時分にはなんといっても、神尾は由緒ゆいしよある旗本の株を失わなかつたし、福村も今ほどくずれてはいなかつたから、お松は主人筋のお友達に出逢つた氣持で、福村様といいました。ところが、今では輕業小屋の美人連からさえも、福兄さんで通っている福村は、お松にかく慇懃いんぎんに福村様と呼びかけられて、多過ぎまりの悪い形です。

「いかさま珍しいことじゃ、いったいお松どの、君は今どこにいるのだね」

「本所の方におります」

「本所——本所はどこだね」

「本所は相生町でございます」

「相生町——」

といつて福村は、お松の姿と、抱えている風呂敷包とを、事新しくながめます。お松の姿はお屋敷風で、その胸にかかえているのは、今もたしかに見ておいた通り、五七の桐を白抜きにした紫縮緬の風呂敷であります。そこで、ちよつと福村が、胸の中で、相生町へ当りをつけてみました。相生町辺でしかるべきお屋敷——それも格式の軽くない五七の桐を用いているお屋敷。福村は地廻り同様にしていた土地だから、ちよつと当りをつけようとしてみました。

エート、相生町の一丁目から五丁目までの間には、しかるべき大名旗本の屋敷はないはずだが、お台所町へ出ると、土屋相模守と本多内蔵助がある。土屋は九曜くようで、本多は丸に立葵たてあおい。緑

町へ行つて藤堂佐渡守の下屋敷、あれは蔦つたの葉、津輕越中守は牡丹丸。こう考えてくると、あの辺で五七の桐を用うる屋敷は思い当らないのであります。そこで、

「相生町は、誰のお屋敷？」

とたずねると、お松も、ちよつと返事に困つたらしく、

「御老女様のお屋敷に、お世話になつておりまする」

「御老女様？」

これも福村には頓とみに合点がてんがゆきません。しかし、店頭を離れてから、福村が、

「ともかく珍しい、ぜひ遊びにやつて来給え——ええと、拙者のところは小石川の茗荷谷、切支丹屋敷に近いところで、いやに傾かしいだ長屋門を目安に置いてたずねれば直ぐ知れる。君のお師匠様も一緒にいるよ」

「え、お師匠様が？」

お松はギョツとしました。

やがて夕方になると福村は、しばしば標榜ひょうぼうしていた通り、茗荷谷の切支丹屋敷に近い長屋門のイヤに傾いだ一方に、福村の名を打つてある、己おのれの屋敷へ戻つて来ました。

帰つて見ると、お絹は火鉢にもたれながら、しきりに絵本に読み耽つているところであります。丸髻まるまげに結ゆつた、いかにも色つぽい後家さんといった風情ふうせい。

「やれやれくたびれた」

その前へ無遠慮あぐらに胡坐をかいた福村。

「お帰りなさい」

お絹は絵本を畳の上へ伏せて、乳色をした頬に、火鉢のかけ

んでぼーつと紅味あかみのさした面おもてを向けて、にっ、こりと笑う。

「おみやげ」

「なあに？」

福村は懷ろからふくさ、包を取り出して、

「通油町の鶴屋で、それ御所望の六歌仙、次に京橋へ廻つてわざわざ求めて来た仙女香」

「まあ嬉しい」

「まだあるよ……黒油の美玄香」

「それがいけない、いつも落ちが悪いから」

「あんまりいまいまいから、ついこんなものを求めて来る氣になったのさ」

「何が、そんなにいまいまいの」

「いつになったら浮氣がやむのか、氣が揉めてたまらないから、」

せめてこんなものでも見せつけたら、少しは身にこたえるかと思つて買つて来た」

「かわいいそうに」

「ちえッ、いやになつちまうなあ」

福田は、じれつたい様子をして見せる。

こうして見ると二人は、まるつきり夫婦気取りです。先代の神尾主膳に可愛がられて妾めかけとなり、今の神尾主膳の御機嫌とり、そのほかに肌合いの面白そうな男と見れば、相手を嫌わぬ素振そぶりを見せる女だから、時の拍子で、もうこの男とも出来合つてしまったのか知ら。そうでなければ、何かに利用するつもりで、いいかげんに綾なしているのかも知れない。

「どうも有難う、これだけはこつちへいただいておきます、これはそつちへ」

といつてお絹は、錦絵と仙女香とを受取つて、美玄香だけを、わざと福村の方へ押しつけると、福村は、

「そんなものはいりません、早く飯が食まべたいのです」

「いま、食べさせて上げるから、おとなしくしておいで」

「あい、さむらいの子というものは、腹が減つてもひもじうない……それよ、今日はまた珍しい人に、二人までぶつつかつて来ましたよ」

「珍しい人……誰？」

「一人は両国の女軽業の太夫元のお角さん……」

「いやな奴」

お絹は心からお角を好いていない。お角の方も御同様でしよう。

「そのうち、日光へ参詣を兼ねて、一緒に大だい中ちゆう寺うじの御大おんたいをたず

ねる約束をして来たから、近いうちここへやって来ると思う、
やって来ましたら、どうぞお手柔らかに」

「知らない」

お絹が横を向くと、福村は改めて、

「御機嫌を直して下さい、もう一人は、決してあなたの嫌いな
人ではありません、あのあなたの娘分のお松どのに逢つて来ま
したよ」

「お松に、どこで？」

「通油町の鶴屋で」

「あの子はこつちへ来ていたのか知ら。来ていたんなら、わた
しのところへ面^{かお}を出しそうなもの。薄情な娘^こ。何をしていまし
た」

「お屋敷奉公なんだろうが、そのお屋敷というのが……」

そこで福村が邂逅かいこうの顛末てんまつと、五七の桐の疑点とを物語ると、聞いていたお絹の面に、安からぬ色が浮びます。

二人がお取膳で御飯を食べてしまつてから、福村は、
「御大もこつちへ、出て来たいには来たいだろうがな」

といいますと、お絹が、

「出て来たつて仕方がありませんよ」

「かわいそうに、そんな薄情なことを言うもんじゃない、当人は島流し同様な境遇にいるのだから、あの氣象ではたまるまい」

「なあーに、向うで、我儘わがままいっぱいわがままにしているでしょう」

「そうはいくまいテ、誰しんみといつて親身かしずになつて侍くものはあるまいし」

「いいえ、旧領地の人たちが、有難がつて大騒ぎしているといふことです」

「だって、旧領地の人じゃあ仕方がない、誰かこつちから行ってやりたい親切な人はないかなあ」

「そりやあるでしょう」

「あるならば、遠慮なく行っておやりなさい」

「知らない……」

お絹は横を向いて、絵本を取り上げてしまいました。

「怒ったのかね」

福村は御機嫌をとると、お絹はやつぱり横を向いたまま。

「お気にさわったら御免下さいよ」

それでもお絹は、つんとして、絵本に見入っている。そこで福村は、

「お気を直して下さいよ」

それでもお絹は、つんとして口を利こうとはしません。

その時、急に次の間から、はした女めの声で、

「あの——出羽様のお屋敷からお使の衆がお見えになりました、今晚集まりがございまして、皆さんが大抵お揃いになりましたから、どうぞ御主人様にも、早速おいで下さるようにとのことでございます」

「あ、そうだ、忘れていた、今日は例の集まりの日であつた」
福村は、急にそわそわとして、何かと用意をし、

「それじや行つて参りますから、後のところをよろしく。なに、ちよつと面かおを出してすぐに戻つて参りますよ、どうか御機嫌を直してお待ち下さるように」

刀をたばさんで出かけようとするから、お絹もだまつてはおれず、

「行つておいでなさい」

無愛想に言つた。その言葉に福村は、甘つたるい思いをしな
がら、ほく、ほくと出かけて行きました。集まりというのは、何
かの賭事かけごとを意味しているこの一連の、どうらく者の集まりに相
違ない。

残されたお絹は絵の本を置いて、この時はじめて、福村が買つ
て来てくれた錦絵を一枚ずつ念入りにながめていましたが、そ
れも見えてしまうと、暫くぼんやりと物を考えているようでした
が、何か急にイヤな気がさして来た様子で、

「おとうや——」

女中を呼んだけれども返事がありません。

「いないのかえ」

だだっ広い屋敷のうちが、ひときわひつそりして、滅め入りそ
うな心持です。

「どこへ行つたんだろう」

お絹は、だらしなく立つて廊下へ出て行きました。こんな時には早く寝てしまった方がと……かわや 廁から出て手水鉢ちようずばちの雨戸を一尺ばかりあけて見ると、外は闇の夜です。

お絹が手水をつかつていると、植込の南天がガサリとして、

「御新造ごしんぞ」

「おや！」

お絹がびつくりしました。

「誰？」

あわや戸を立てきつて、人を呼ぼうという時、

「わたくしでございます、が、ん、り、きの百蔵でございます」

「百蔵さん——なんだって今時分、こんなところから」

お絹が呆あきれて、立ち尽していると、

「ようやく尋ね当てて参りました」

外に立っている男は、唐棧とうざんの襟のついた半纏はんてんを着て、玄治店げんやだなの与三よさもどきに、手拭で頬かむりをしたが、んりきの百蔵であります。こうして不意に忍んで来ても、前以て相当の理解があればこそ、お絹もさほどには驚かないものと見えて、

「どうしてここがわかつたの」

「昼のうち、あるところで、福兄さんの姿を見かけたものだから、あとをつけて漸ようやくわかりました」

「あんまり突然だしぬけだから、こんなにびっくりにしてしまった」
お絹は胸へ手をさし込んでみる。

「……それでも笹子峠の時ほどびっくりはなさるまい」

「あの時は命がけだったよ」

「こつちも命がけでしたよ。どうです、徳間峠の時と比べたら」

「あの時は怖かった、あんな怖い思いをしたことはありません」
「この通り右の片腕を打ち落されて、生れもつかぬ片輪にされ
ちまったのは誰故でしょう」

「誰も頼みはしないのに」

「頼まれちゃやれません。時に御新造ごしんぞ、私はもう一ぺん危ない
剣つるぎの刃渡りをしてみようと思うんで。これはさる人から頼まれ
て、慾と二人づれなんだが——」

「まあ、ともかくもお上り」

といった時、表でガラリと戸のあく音がします。ハッと離れた
二人。が、ん、り、きは早くも庭の木立の蔭へかくれると、

お絹は廊下を二足三足、

「福村が帰って来たようです」

「ちえッ」

が、ん、り、き、の、百、蔵、は、木、蔭、で、い、ま、い、ま、し、が、る、。

「奥様、奥様」

「おとうかい」

暗いところを^{すりあし}摺足して歩いて来るのは、女中のおとうに違いありません。

「はい」

「お前、どこへ行っていたの」

「ちよつと、表までお使に行つて参りました」

「だまつて行つては困るじゃないか」

「どうも済みませんでした。あの、奥様……さつき、わたしが
出かける時に、お家の裏の方にうろうろしている人影がありましたから、
気味が悪うございました」

「だから、なおさらのことじゃないか……勝手元の締りをよくしてお置き」

「はい」

「それから、玄関の戸も、しつかり錠をおろしておしまい」

「それでも、まだ旦那様がお帰りになりませんのに」

「多分お泊りだろう」

「左様でございますか」

「そうしてお前、もう休んでもいいよ、旦那様がお帰りになったら起すから」

「有難うございます」

女中が行ってしまったてから、小戻りして来たお絹は、

「百蔵さん、お入り」

それとは別に、その晩、江戸の市中の一角を騒がすの事件がありました。

とある幕府の重い役、老中の一人をつとめていたことのあるお屋敷の中の一隅で、かねがね賭博を開いていたものがある。もちろん、集まるほどの者は、邸外のやくざ者であつたが、それを張番しているのが邸内の馬丁ども（べつとう厩仲間）であつたがために、そのお屋敷の威光をかさに着て、だんだん増長してきたために、見のがせなくなつて、その門外でお手入れがあつたということで、その界限は容易ならぬ騒ぎとなりました。そこで上げられた者は誰だか知らないが、風聞だけはかなりに喧しく、やかまなかには歴々の旗本さえあつて、上げられた以外の者に、慌てあわふためいて逃げのびたしかるべき士分の者もあつたという。洗つてみれば、さほどの事件でもなかつたろうが、その当座、

事が秘密にされていたものだから、それをなかなか重大に考えたものがあつて、江戸人の頑固な方面を代表する老人はなげきしました。

「権現様が旗本をつれて江戸をお開きになつた根元というものは、そういったものではなかつたのだ、権現様は大きなお庄屋さん気取り、旗本は三河の田舎いなかざむらいを恥としなかつたものだが、世が末になればといつて、今日このごろの有様は、ほんとうに浅ましくつて涙もこぼれない、色里や歌舞伎者かぶぎものにチャホヤされるのが江戸ッ児だと心得ているくらいだから、刀のさしようは知らなくつても、花札の引きようは心得て、町浄瑠璃まちじようりのいくさりも唸うなれなければ、さむらいではないと思つてゐる、心中者が出来れば羽目はめを外はずして大騒ぎをやる、かりにも老中のお屋敷がバクチの宿となつて、旗本がお手入れを食つて逃げ出し

たとは、なんというみじめな有様だ、これで世が亡びなければ亡びないのが不思議だが、しかし、さすがに権現様の御威光は大したもので、これほどに腐りきった屋台骨が、ともかくも無事で持ちこたえられているというのは、一に東照権現いっの御威光のしからしむるところだ」

しかし、また一方には、それをせせら笑う若いものもあつて申します。

「それじゃ何かえ、せつかくここまで進んで来た江戸の文化を、昔の田舎気分に引き戻せとおっしゃるのかい。権現様だつてなにも、人間を窮屈にしようと思つて江戸をお開きになつたわけじゃありませんまい。そりや戦争の時分は玄米飯をかじるもよかろうが、平常ふだん、玄米ばかりかじつてもいられまいじゃないか。

第一権現様の時代と今日とは時代が違いますぜ、今時いまどき、江戸に

生れて清元の一つも唸^{うな}れねえようなのは人間とは言われませんや。京都へ行つて見さつし、長州だといったところで、薩摩だといったところで、江戸のさむらい、ほど京女に持てるのはありやしませんぜ、京女に鼠なきをさせるのは、東男に限ったもので
ゲス」

それとは趣^{こと}を異にした本所の相生町の老女の家では、南条力が壮士を相手にして、

「当時、江戸幕下に人物がないとは言えないのだ、小栗上野^{おぐりこうずけ}がある、勝安房^{かつあわ}がある、永井玄蕃^{げんぱ}も、水野痴雲^{ちうん}も、向山黄村^{むこうやまこうそん}、川路聖謨^{かわじせいば}、その他誰々、当時天下の人物としても恥かしい人物ではないが……なにぶん大廈^{たいか}の覆^{くつ}える時じゃ、徒^{いたず}らに近藤勇、土方歳三輩の蛮勇をして名を成さしむるに至ったのも、天運のめぐる時でぜひもない……それにつけても我々は、亡ぶべきも

のを亡ぼすと共に、生れ出づべき生命を、永久に意義あるものとしなければならぬ」

二十

さてまた、長者町の道庵先生の屋敷の門前では、子供たちがしきりに砂いじりをして遊んでいます。

「桑ちゃん、そんなことをしてもつまらないから、もつと高級な芸術をこしらえて遊ぼうや」

「ああ、そうしよう、みんなおいでよ、良ちゃんもおいでよ、広ちゃんも。みんなして高級な芸術をこしらえて遊ぶんだから」

「ああ、あたいも入れておくれ」

「あんまり大勢呼ぶのはおよし」

「高級な芸術ってどんなの」

「今、あたいたちがこしらえるから、こしらえたら上手じょうずでも下手へたでもいいから、みんなして手を叩いて賞ほめるのよ」

「それが高級な芸術なの？」

「ああ、君たちも少し手伝っておくれよ」

「あたいもね」

子供たちが集まって、しきりに砂を集めて塔をこしらえているところへ、ヒョッコリと首を出したのが主人の道庵先生です。先生は子供たちの挙動をしきりにながめていたが、（無論、先生は酔っぱらっているのです）やがて突然、口を出して、

「みんな、そこで何をこしらえているんだい」

「何でもいから黙って見ておいでよ」

「教えたつていいじゃないか」

涎よだれを垂らさんばかりにして、子供の砂いじりをながめていた道庵を、子供たちは相手にしないから、道庵がまた首を突込んで、

「何をこしらえてるんだよう」

「だまって見ておいでつてば」

「わかつてらあ、胃袋をこしらえるんだろう」

「ははあだ、胃袋だつてやがら。先生はお医者だもんだから、胃袋だなんていつてやがら。胃袋なんかこしらえるんじやねえやい、高級な芸術をこしらえてるんだい」

「高級な芸術？」

「そうだよ」

「それが高級な芸術てのかい」

道庵先生が、やかましくいうもんだから、子供がうるさがつ

て、

「先生、あっちへ行つておいでよ」

「それでも、おれが見ると胃袋にしきや見えねえ」

「先生には、芸術がわからねえんだよ」

「ああ、芸術がわからないんだから、あっちへ行つておいでよ」

「だつてお前たち、胃袋をこしらえて高級な芸術だつたつて仕方がないよ、それ胃袋じゃないか、胃袋の形をしているじゃないか」

といいながら、酔っぱらっている道庵先生は、子供たちが一生懸命でこしらえた砂の塔を、ひょいと突つくと、たちまちその塔がひっくり返ってしまったから、子供がムキになって怒り出しました。これは道庵先生、少々おとなげないことで、子供たちの怒り出したのにも無理のないところがあります。

「あ、先生が高級な芸術をひっくり返してしまった、悪い奴！」
「みんなして、先生を叩いてやろうよ」

子供たちが総立ちになって、道庵先生をとりまいて、

「ペチャ、ペチャ、ペチャ、ペチャ」

盛んに叩き立てましたから、道庵先生は羽織を頭からかぶつて、

「こいつはかなわねえ」

人を殺すことにかけては、当時、道庵の右に出でるものはあるめえ、新撰組の近藤勇といえどもおれには敵かなわねえ、道庵の匙さじにかかつて命を落したものが二千人からあると、日頃勇氣凜々りんりんたる道庵先生も、この子供たちに逢つては一たまりもなく、ほうほうの体ていで門内へ逃げ込んでしまうと、やや離れてお手玉をとつて遊んでいた女の子供たちまでが飛んで来て、

「先生を叩いてやりましょうよ」

「お土産みやげ三つに舐たこ三つ」

そこで、道庵先生をまたペチャ、ペチャと叩きました。

子供に叩かれて、ほうほうの体ていで家の中へ逃げ込んだ道庵先生は、座敷へ入ると、ケロリとして道中記をながめています。

道庵先生にとっては、今がその小康時代ともいうべきものでしょう。ナゼならば、先生の唯一の好敵手たる隣りの鰯ぼらはちごてん八御殿の主人公が、洋行から戻つて来た暁には、またぞろ百五十万両もかけて、大盤振舞おおばんぶるまいをするにきまっていますから、それを見せつけられた日には、先生もまた相当の手段方法を講じなければならぬはずですから。

ところがその鰯八大尽は洋行の留守中であり、江戸の武家は長州征伐というわけで、風雲の気はおのずから西に走はせてしまつ

たようなあんばいだから、先生もいささか張合^{てい}抜けの体です。

そこで先生は、この余った力と機会とを利用して、五十日間の予定で、名古屋から京大阪を遊覧して来ようとの案を立てました。

先生が今度の旅程のうちに、特に名古屋を加えたというのは、先生独得の見識の存するところで、その意見を聞いてみると、先輩の弥次郎兵衛と喜多八が、東海道を旅行中に、名古屋を除外したというのが不平なのだ。

「べらぼうめ、太閤秀吉の生れた国と、金のしやちほこを見落して、東海道^{ひざくりげ}膝栗毛もすさまじいや、尾張名古屋は城で持つと、雲助までも唄^みっているあな、宮重^{みやしげ}大根がどのくらい甘え^{うめ}か、尾州味噌がどのくらいからいか、それを噛みわけてみねえことにや、東海道の神様に申しわけがねえ」

特に東海道の神様という神様があろうとも思われないが、これが先生の名古屋へ立寄る一つの理由となつていたのであります。しかし、弥次郎兵衛と喜多八が名古屋を除外したからといって、故意にやったわけではなく、宮の宿から一番船で、七里の渡しを渡つて、伊勢の桑名へ上陸の普通の順路を取つたまでだから、それをいまさらいい立てるのは、少し酷こくだと思われます。それよりもこの際、京、上方の空気というものは、道庵先生などの近寄るべき空気ではないのですが、この先生のことだから、それをいえば、例のおれの匙にかかつて、命を落したものが二千人からあるを持ち出して、始末におえないから、まあほうっておいて、気ままにさせるよりほかはないのです。

「道六や」

そこで代診の道六というのを膝近く呼び寄せて、留守中万端ばんたん

の心得をいつて聞かせ、今や、その旅行の日程に苦心中であるが、東海道筋は先年、伊勢参りの時に往復しているから、今度はひとつ趣を変えて、甲州街道を取ろうか、或いは木曾街道を選ぼうかと、道中記と首ッ引きの結果、距離と日数に多少の費えはあるが、変化の面白味からいつて、木曾街道を取り、途中から名古屋へ廻るということに決定しました。

それがきまると、次の問題は道連れの一件であります。これにはさすがの先生も、ハタと当惑しました。

一人旅はいけない。そうかといつて、野幫間の仙公には懲り

ている。薬籠持の国公は律義なだけで気が利かず、子分のデモ

倉あたりは、気が早くつて腰が弱いからいけない。知己友人に当

りをつけてみたところで、オイソレと同行に加わるような閑人

は見つからない。旅の話相手にもなり、相当に気も利いて、慾

をいえばこの際のことだから、武芸の片端^{かたはし}を心得て、用心棒を兼ねてくれるような男でもあれば申し分ないが、そうは問屋で卸さない。さすがの道庵先生も、この人選にはことごとく頭を痛めているところへ、

「先生、お客様でございます」

「誰だ」

「玄関へ米友さんとおつしやる方がおいでになりました」

「ナニ、米友が来た！ 鎌倉の右大将米友公の御入り！ 占め
た」

この際、天来の福音に打たれたように、道庵先生が躍り上りました。

甲州上野原の報福寺、これを月見寺となえるのは、月を見るの趣が變つてゐるからです。

上野原の土地そのものは、盆地ともいえないし、高原ともいにくい山間やまあいの迫つたところに、おのずから小規模のハイランドを形づくつてゐるだけに、そこではまた何ともいえない荒涼たる月の光を見ることがあります。

今宵、寺の縁側へ出て見ると、周囲をめぐる山巒さんらん、前面を圧する道志脈の右へ寄つたところに、富士が半身を現わしている。月はそれより左、青根の山の上へ高く鏡をかけているのであります。

かとうぐち火燈口の下に座を構えた盲法師めくらほうしの弁信は、物を言いはじめました。

「今晚はまた大へん月がよろしいそうでございますね。月が澄みわたりまして、私共には闇夜と同じことでございます。明月や座頭ざとうの妻の泣く夜かな、と古えいにしの人が咏よみましたそうでございませうが、人様の世にこそ月、雪、花の差別はあれ、私共にとりましては、この世が一味平等の無明むみようの世界なのでございます。無明がそもそも十二因縁の起りだとか承ったことがございます。いつの世に長き眠りの夢さめて、驚くことのあらんとすらん、と西行法師が歌に咏みましたということをも、承っておりますのでございます。悲しいことに皆様はいつかこの無明長夜むみようちやうやの夢からお醒さめになる時がありまして、私共にはこの生涯において、そのことがあるまいと思われまのでございます。夢に始まって夢に終るの生涯が、この上もなく悲しうございますので、西行法師が、驚くことのあらんとすらんとお咏よみになった心を

承^うけて、数ならぬ私共もまた、何物にか驚かされたいと常に念じている次第でございます。けれども、浅ましいことに、何物も一つとして、この私の悲しい心の底を驚かせてくれるものがございます。泣ける時に泣けない人、笑える時に笑えない人、驚く時に驚けない人は、恵まれない人でございます……衆^{しゆじよう}生病^{しやうびよう}むが故に我も病む、と維^{ゆい}摩^ま居士^{こじ}も仰せになりました。生^{しやう}々^{じよう}の父母、世々の兄弟のうち、一人を残さば我^{われ}れ成^{じやう}仏^{ぶつ}せじというのが、菩薩の御誓いだと承りました。大慈悲の海の一滴の水が、私共のこの胸に留まりまするならば、たとえ私のこの肉の眼から一切の光が奪われまして、この世の空にかかる月は姿を見せずとも、本^{ほん}有^{ぬしん}心^{れん}蓮^{れん}の月の光というものは、ゆたかに私共の心のうちに恵まれるものに相違^{たしやう}ございせんが、何^{なん}を申^{まう}すも無明長夜の間にさまようて、他^た生^{しやう}曠^{かう}劫^{こく}の波^{なみ}に流^る転^{てん}する捨^{すて}小^お舟^{ふね}にひとしき身

でございます、たどり来^{きた}つたところも無明の闇、行き行かんとするとところも無明の闇……ああ、どなたが私をこの長夜の眠りから驚かして下さいます……昨日も私はこの裏の山へ入つて行きますと、山鳥の声がしきりに耳に入りました。目は見えませんが、物の音は耳に入るのでございます。そのとき私は、ほろほろと啼^なく山鳥の声聞けば、父かとぞ思う母かとぞ思う、のお歌を思い出しまして、この見えぬ眼から、しきりに涙をおとしたことでございます。私共の心眼さえ開いておりますならば、山鳥の音を聞きましても、まことの父と母との御姿を拝むことができましようのに、小器劣根の私には、それができませんのかと思うと……」

弁信法師は、ここに至つてハラハラと泣いてしまいました、やがて涙を払つて、

「斯か様なお喋りはやめにいたしまして、いかがでございましょう、お邪魔にならなければ、拙つたない琵琶の一曲を奏かなでてお聞きに入れましょうか」

誰に話しているのだか、誰が聞いているのだか知らないが――
また、これから誰に聞かせようというつもりか知らないが、弁信法師は、琵琶をかかえて縁に立ち出でました。

そこで調子を合わせにかかると、葉は鶏けい頭とうの多い庭先から若い娘が、息せききつて駆け込んで来て、

「弁信さん、大変が出来ました」

「エ、お雪さん、大変とは何でございます」

弁信は琵琶の調子を合わせていた手をとどめると、娘は、
「先生はおいですか……あの、姉が殺されましたそうで」

「エ？」

弁信が琵琶を手放してしまうと、娘は、

「たつた今、人が来て、このことを知らせてくれましたから、先生に……」

娘は、倒れるように縁側へつかまつて、かおいろ面色も変り、唇がわなないて見えます。

「ああ、それ故にこそ私は、さいぜんからなんとなく胸騒ぎが致したのでございます、さあ、落着いて委細のことを先生に話して上げて下さいまし」

「御免下さいまし」

娘は、やっと縁をのぼって座敷へ通ると、そこに病人でもあるように、蒲団ふとんの上に横たわっていたのが、いま半身を起き直しているところの、一箇ひとりの男の枕辺に坐ると、

「お若どのが殺された？　どこで、誰にやられました」

と尋ねるその人は、机竜之助です。

いつになつても蒼白あおしろい面かお。その時は僧の着るような白衣一枚で、蒲団の中にいたのですが、起き直つて帯を結び直して坐ると、

「誰が何の恨みでしたのか、わたくしはすこしも存じませんが、江戸に近い巢鴨こうしんづかの庚申塚というところで、惨むごたらしく殺されてしまつたそうでございます」

といつて娘は、声を立てて泣きました。

「巢鴨の庚申塚で？」

「多分おいはぎ、追剥にでもつかまつたのでございましょう……そうでなければ、人に恨みを受けるような姉ではございません」

「鳴呼あゝ！」

弁信法師が傍らから、思わず感歎の声を立てたのは、その出来事の悲惨に悲しむよりは、姉を信ずる妹の心に動かされたようです。

「姉は、人に恨みを受けるような人ではありませんでしたのに……」

娘は重ねて、さめざめと泣きながらいいました。

「いいえ、あなたの姉さんは、人に恨みを受けているのですよ」
弁信法師がいますと、泣いていた娘は、躍起やつきとなつて、

「それは違います、わたくしは、あの姉さんとは義理ですけれども、あんな親切な姉さんはありませんでした、皆の人に好かれました、恨みを受けて殺されるような人ではありません」

「親切な人だから恨みを受けたのです、人に好かれるから恨みが集まるのですよ、好かれない人は恨まれません」

「違います、違います」

娘は袖に面を押当てて頭を振りましたが、やがて声を立てて泣きふしてしまふと、竜之助は、

「誰が殺したかわからないのですか」

「先生、殺したのはあなたです、あなたのほかにあの方を殺したものはありません」

と弁信がいました。

「ナニ？」

おぼしめ

「嘘と思召すなら、前生ぜんしやうおよび後生ごしやうをたずねてごらん下さいま

し。天上へ昇りましょうとも、地下へ降くだりましょうとも、あの方の真白い胸に、血のついた刃やいばを突き刺している姿を、あなたのほかに見出すものがありましたら不思議でございます」

「弁信さん、何をおっしゃるのです、ここにおいでなさる先生

が、どうしてそんなこと。あなたは血まよつておいでなさいます」

と娘がささえると、弁信は澄ましきつて、

「私は血まよつておりません、私のいうことが本当でございます」

「弁信さん、そういう無茶なことをおつしやつては先生に申しわけがありません、あなたは何か勘違いをしておいでになります」

娘は泣きながら弁信をたしなめるのも無理はありません。こと巢鴨の庚申塚とは、数十里を離れているのに、当人は半ばは病気で、その上に目の光を奪われている身であるのに――

それでも竜之助は、弁信のいったことを、娘が気にかけているほど気にかけないと見えて、

「かわいそうなことをした」

といったきりで、口を結んでしまいました。

「御免下さいまし、また上ります」

といつて、娘は泣きながら、庫裡くらりの方へ帰つてしまつたあとで、竜之助は蒲団ふとんの下に敷いて寝ていた白鞘物しらさやものの一刀——殺されたという女が記念かたみにくれた——それを取り出して膝へ引寄せました。引寄せてみたところでどうなるものか、この刀に、その女の魂魄こんぱくが残っているわけではあるまいし、といつて、見えぬ目の前にいる見えぬ同士の弁信を、どうしようというのでもあるまい。五十丁峠から陣馬へかかるところで、みちに迷うて行きつ戻りつしていた駕籠を、無事にこっちへ引向けて、予定通りこの月見寺へ導いて来たのは、ほかならぬお喋り坊主のおかげではなかつたか。

その弁信法師は、この時分、もう再び琵琶をかなでるの元気はなくなつたと見え、そうかといつて、それを蔵しまおうでもなく、しよんぼりとして縁先に坐つたままです。

空の月は、青根から大群山おおむれやまの上をめぐっている。

「弁信殿」

「はい」

竜之助の問いに弁信が、例によつて神妙な返事をします。

「お前は心あつてああいうことを言われるのか、それともその時の出まかせか」

重ねて竜之助が問うと、弁信は、

「左様でございます」

同じところを向いたままで、同じようにしよんぼりとしたままで、

「私は口が過ぎていけません。そのことは知らないではありませんから、自分ながら^{つつし}慎みをしようかとも思いますけれども、その場合になりますと、そういう感じがフイに湧き起つて参りまして、そう言わなければだまつていられないのでございます。言つてしまつたあとで、ハツとは思いますが、なおよく考えてみますと、自分のいつたことが間違つていたとは思われませんので、これはいい過ぎたと後悔を致したことが更にございませんのです。その時はお笑いになつた方々まで、あとになりますと、私の申したことにヒタヒタと思ひ当ることがおありなさると見えて、さのみ私をお咎^{とが}めにもなりませんのでございます」

「では、ここにゐる拙者が、巢鴨まで人を殺しに行つたのも本当かも知れない」

といつて竜之助は、冷たい笑いを例の蒼白い面おもてに漂わせましたが、何としたものか、その笑いが急に止むと、その面がみるみる真珠のような白味を帯びて、ひとむらの殺氣が濛々もうもうとして、湧き上つて来るようです。

その時、弁信法師はこれも何と思つたか、ヒラリと縁を飛び下りて、下に揃いぢべうえてあつた草履ぞうりを穿はき、すた、すたと庭へ下りて行つて、庭の一隅いちぐうに四寸角、高さ一丈ほどの卒塔婆そとばが立つて、その下に小石うずたかが堆く積んであるところへ来ると、腰を屈かがめて合掌し、

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

と唱えて、その小石を一つずつ取つては移し、取つては移ししていました。その時褥しとねをガバと蹴つて跳ね起きた竜之助は、白鞘の刀を抜いて縁先に立ちましたが、その見えない目は、まさ

しく盲法師の弁信に向っている。

「あ、先生！ あなたは私をお斬りになろうというのですか」

目の見えない弁信の振向いた面は、おもてやはりピタリと竜之助の面に合っています。

何ともいわない竜之助の白衣の全身から、まさしく殺氣が迸つほとばしているのを感じた弁信の恐怖を、誰あつて来り救おうとするものもありません。

ヒラリと卒塔婆の蔭に身を移した弁信は、恐怖は感じながらも、叫びを立てて人を呼ぼうでもなく、

「先生、あなたが私を斬ろうとなさるのはいけません、今までにないことでございます、今まで私は、あなたの傍におりまして、更にその殺氣というものを受けたことがございませんから、少しも怖れというものが起りませんでしたけれども、今は

怖れます、あなたは、たしかに私をもお斬りになろうという覚悟で、それへおいでになりました」

弁信の小楯^{こたて}に取った卒塔婆の一面に、この時、真向^{まとも}に月がさすと、それに、

「若残一人、我不成仏」

の文字がありありと読める。ただ、斬ろうとする人も、斬られようとする人も、共にそれが認められないだけです。

「此寺^{ここの}へおいでになつてから、これで二度^{ふたたび}あなたの身に殺氣の

起つたことが私の心に響きました。その一度は、先日之夜、あなたは、今のあの娘さん——お雪ちゃんというのを斬ろうとなさいました。その時、私が感づいたものですから、不意に中へ入つてお雪ちゃんを助けてやりました。それともう一つは、たつた今、私を斬ろうとなさるその心です。悲しいことではござい

ませんか、まだ、あなたは人を斬らなければならぬのでござ
いますか」

といったけれども、何の返答もなく、刀を提げてそろそろと縁
を下りて、沓脱くつぬぎの上に並べてあつた草履をつっかけると、声を
しるべに徐々しずしずと弁信の方へ近寄つて参ります。

そこで、弁信は、いよいよ圧迫されて、苦しまぎれの絶叫を
振絞つて、人を呼ぶかと見ればそうではなく、

「先生、私は、あなたの殺気を怖れます、けれども自分の命を
取られることを、さのみ怖れは致しません」

この場合において、お喋り坊主の減らず口は、必ずしも減ら
ず口とは思われないほどの冷静を持っています。それには頓着
無しの竜之助は、刀を片手の中段に持ち直して、ジリジリとそ
れを突きつけて来る呼吸は、絶えて久しく見ない「音無しの構

え」です。兎を打つにも全力を用うるといふ獅子の氣位か知らん。この身に寸鉄もない……寸鉄があつたからとて、それを用うる術すべを知らない盲目の小法師に向つてすらが、彼は正式にして、対等の強敵に向うと同じ位を取つて突きつけて行く時に、言おうようない凄惨せいさんな力が、その刃先といわず、蒼白い冴さえた面おもてといわず、白衣に月を浴びた五体といわず、さつと流れて面を向くべくもないのであります。

ところで、不思議なるは弁信法師。この凄まじい刃先を真向まともに受けて、それを相も変らず卒塔婆そとばの蔭に避けてはいるが、一向に悪怯わるびれた氣色が見えません。

「私は死ぬことを怖れません……染井の屋敷で、神尾主膳のために井戸の底へ投げ込まれた時に、死は怖れではなくして、悦びであることを悟りました、その時まではいわれがなくして死

ぬのがいやで、必死で生きることには執着は致してみましたけれど、今となつては、いわれがありましようとも、なかりましようとも、死ぬべき時に、死ぬることを怖れは致しません、また甘んじて免れ得らるべき命を、殺したいとも思つてはおられませんのでございます」

といいながら、ジリジリと迫つて来た刃先を左へ廻つて避けました。その時、月の光もまためぐつて、卒塔婆にうつる一面の文字には、

「我不愛身命、但惜無上道」

月は冷やかに、道志脈の上を徘徊はいかいすること、以前に變りはありません。

この頃、月をながめている人の話によると、時あつて月が紅あかく見えるそうです。多分、それは黄塵が空中に満ちて、銀環ぎんかんの

色を消す所以ゆえんのものでありましようが、人によつてはそう見ません。
はっこう

白虹日を貫くのは不祥である、月光紅くれなゐに変ずるのも只事ではない。日月は天にあつて、人生を照覧するものだから、心を虚きよにしてそれを直観していると、すべての人間界の異象いしょうがまず以て日月の表に現われるのだということを、まじめに信じているものがあるのですから、夜な夜な月色が紅に変ずるのを、吉兆と見たり、悪瑞あくずいと見たりする者の出づるのも抑えることができません。そうだという迷信に対して、そうでないという正信も成立つてはいないらしい。

一本の卒塔婆を中にして、盲法師のお喋り坊主しゃべの弁信と、刃をつきつけた机竜之助とが相對している時に、たまたま道志脈の上に横たわる月の色が変わってきました。たとえば、一時いつときとは言

いながら、血のように紅く見え出してきたのが不思議です。

とはいえ、それは都大路で見る時のように、多くの人が人だかりして指さし騒ぐのではない。この小高原のあたりでは、もうすでに寝静まり、月見寺の庭には、こうしてただ二人だけが相對しているのみで、しかも、その二人ともに眼がつぶれているのですから、月が紅くなろうとも、青くなろうとも、あえて驚く人ではありません。

しかし、月の紅く見えたのはホンの一時、あれと言っている間に、もとの通りの冷々然たる白い光を静かに投げて、地上は水を流したようです。

机竜之助の刀を突きつけてジリジリと詰め寄るのは、非常に悠長なもので、名人の碁客が一石をおろすほどの静粛と、時間とを置いて、弁信法師に迫っては行くが、まだたしかに両者の距

離は三間からあります。盲目となつて以来、この男の刀の構えぶりが、一層静かになつてきました。刀を以て敵を斬るよりは、刀をふせて敵を吸い寄せるの手段かに見えます。思うに、盲目となつて以来、幾多の人を斬つた手段が皆これでしょう。刀を構えると、全身の殺氣が電流の如く、その刀に流れ寄つて来るのであります。蛇が樹下にあつて口を開くと、鼠がおのずからその口中に落ちて来るように、この流るるが如き殺劍さつけんを突きつけられると、何物も身がすくんで、我とその刃に触れて、命を終らぬということはありません。斬るよりは寧ろ斬むしられるのです。のがれんとするよりは、近づいて来て斬られてしまします。

ひとりこのお喋り坊主の弁信に限つて、その怖るべき吸引力の外に立っているのが不思議。いや不思議でも例外でもない、御同様の盲目で、多分その殺氣は受けても、殺劍が見えないか

らでしよう。

「身に徳があれば刀刃とうじんも段々に折れることでございましょう、徳がなければ刃を待たずしても亡ぶるものでございます。前世の果報が尽きた時に、今生こんじょうの終りが来るのでございますから、死ぬも生きるも己おのれの業ごう一つでございます。業は受けざれば尽きずと釈尊も仰せになりました、逃れんとしても三世の外へ逃るることはできません……私は、もうここを動きますまい、ここにこうして、じつとして立つておりましょう」

彼は相変らず殺劍の前に立つて減らず口——しかし減らず口も、この際これだけの余裕を持ち得ることは、無辺際なる減らず口といわねばなりません。

清澄の茂太郎は、その時分、寺の東南、宮の台なる三重の塔

の九輪くりんの上に遊んでおりました。

「弁信さあーん」

塔の上から三度、弁信の名を呼んだけれども返事がありません。そこで彼は、

「どうしたんだろう」

九輪を抱きながら、月光さわることなき地上を見下ろしました。いつもならば、呼ばない先に「茂ちゃんかい」——庭へ走り出して、見えない眼をこちらへ振向けて返事をするはず。そうすると茂太郎は、「ああ、わたしだよ、弁信さん、琵琶を持ってこつちへおいでよ」「茂ちゃん、お前どこにいるの」「三重の塔の天辺てっぺんにいるんだよ、月がいいからおいでよ」「待っておいで」——そこで弁信が、いったん寺の中へ取つて返して琵琶を持ち出して来るのだが、今宵はさつぱり、返事がありませんから、

「どうしたんだろう」

九輪の上で茂太郎は、しきりに小首を傾けております。

どこへも出かけたはずはない、まだ眠ったとも思われない。打てば響くほどの返事がないのが、なんとなく気がかりで、茂太郎はまもなく、三重の塔を下へ降りて来ました。

下りて来たところも満地の月。月光、水の如くひたひたと流れているものですから、茂太郎の心が浮立って歩む足どりも躍るように、精いっぱいの声を張り上げて、宮原節を歌い出しました。

向うを見ろよ月が出る

おいらは森にいつ行くか

しやるろつとにしやるろは

こう訊きいた

しゃとうには

とう、とう、とう

おいらが持つのは一人の神様

一人の王様

たった一文いちもんに靴片方

麝香草じゃこうそうに露の玉

朝っぱらから飲んだくれ

二羽の雀は満腹ぷう

ばっしいには

じい、じい、じい

おいらが持つのは一人の神様

一人の王様

たった一文に靴片方

こうまのような狼二匹

かわいそうだが酔っぱらい

穴では虎めが上機嫌

むうどんには

どん、どん、どん

おいらが持つのは一人の神様

一人の王様

たった一文に靴片方

一人は悪口、一人は雑言あっこう ぞうごん

おいらは森にいつ行くか

しやるろつとにしやるろは

こう訊いた

ばんたんには

たん、たん、たん

器量いっぱいの声を張り上げて、茂太郎は唄いながら、宮の

台から卵塔場らんとうばを突切つて、

怪体けたいな鼠のお喋りしゃべめ

こないだミラの窓叩き

おいらと呼んだばかりに

娘たちあどこへ行く

ロン、ラ

ほんにいとしや女ども

おいらを迷わすその毒は

オルヒラさんをも

酔わすだろ

娘たちあどこへ行く

ロン、ラ

庭の木戸口へ来ると、ギョツとして、何かに驚かされて立ちすくんでしまいました。

「弁信さあ——ん」

この時、一方では水を切つて落ちて来た一刀。丈余の卒都婆そとばをストリと二つに切つて、南無阿弥陀仏の梵字ぼんじを頂いた「我不愛身命」の残骸が下に、残る所の一面には、「但惜無上道」が冷々たる寂光を浴びて、空を制してそそり立っているばかりです。

「あ！」

と言つたのは清澄の茂太郎で、弁信法師は天に上つたか、地に伏したか、その影をさえ見ることができません。

暫くあつて弁信法師が、

「茂ちゃん、危ないよ」

「弁信さん、どうしたの」

二人は抱き合つて、卵塔場の中へ紛れ込んで姿を消してしましました。

同時に、竜之助の姿もそこには見えません。ただ氷片のような卒都婆の残骸が、いよいよ白く月光を浴びて、夜の更くるに任するのみです。

その翌朝、二つに切られた卒都婆を見て、まず驚きに打たれたのは、寺の娘のお雪ちゃんであります。

「まあ、卒都婆が二つに切れていますこと、勿体ない」

それを拾い上げているところへ、子をつれた鶏が餌をあさりに来て、ククと鳴く。

「綺麗きれに切れている、茂ちゃんでも悪戯いたずらをしたのか知ら」

長さ一間に及ぶ、梵字と経文の卒都婆の半分を、お雪は重そうに両手で抱え上げて、庭を廻って見ると、縁側の日当りのよいところに、弁信と茂太郎とが栗を数えて話をしています。

「弁信さん」

お雪が呼ぶと、

「はい」

「茂ちゃんもごらんさい、こんなに卒都婆が斬れていましたよ」

「ええ」

二人はいい合わせたように栗を数えた手を休めると、お雪は卒都婆を縁の上へ置いて、

「誰が悪戯をしたんでしょう」

といって、茂太郎の面を見ると、

「あたいは知らないや」

茂太郎がいいわけをする。お雪は、深く咎めようとしなが
が、それでも、茂太郎の外に、こんな悪戯いたづらをする者はないよう
な面かおをしたのが気になると見えて、茂太郎はムキになって何か
いおうとしたが、弁信が急にそれを遮さへぎるように、

「雪ちゃん、御覧なさい、私の法衣ころももこの通りに切れています
よ」

「ええ？」

「その卒都婆と同じように、斜はすに切れているでしょう」

「まあ、どうしたのです、わたしが縫ぬいつて上げましょう」

お雪が改めて見直すと、なるほど、弁信の麻の法衣の左の肩
から袈裟けさをかけたと同じように、一筋の切れ目が糸を引いてい
ます。

「法衣だけじゃないのです、下着まで、これと同じことに切れ目が入っているんです。いいえ、下着ばかりじゃありません、たしかにこの私の身体の中にも、これと同じ筋がついていると思います、よく見て下さい」

と言つて弁信法師は、肌を押しぬいで見ますと、赤い筋が一線、左の肩から、胸から、下腹までかけて、絹糸ほどの筋を引いているのですから、そこでお雪が驚いて、

「弁信さん、お前、誰かに斬られたんですか」

「いいえ、斬られたんなら生きちゃいませんが、わたしは斬られなかったのです。その代り、つまり、私の身代りにその卒都婆が斬られたんでしょう」

「誰が斬ったのでしょうか」

「誰か知りません」

「怖いことね」

お雪は慄え上つて思わず小庭の方を見廻しましたが、小春日こはるびより和うららかで、子をひきつれた鶏が、そこでもククと餌を拾っているばかり。

「ちゅう、ちゅう、たこかいな……、弁信さん、お前にこれだけ上げよう」

茂太郎は頓着なしに、山から拾つて来た栗の粒を数えて、一山だけを弁信の前に置き、改めてお雪に向い、

「雪ちゃん、お前にも少しわけて上げようか」

庭の鶏も、縁の上の人も、いずれも平和の気分ではあるが、お雪はなんだか鉛のように重いものが、このうららかな天氣を圧して、青天白日の間に鬼火が流れるように、ゾクゾクと寒氣さむけが立ち、書院の火燈口かとうぐちの方を見やると、そこに微かな人の咳しわぶきの声

がします。

「弁信さん、お前、怖くはないの？」

と言つて見た時、平然として坐つていた弁信の面かおの色が真蒼まつさおで
ありました。

二十二

宇治山田の米友は、道庵先生のために、圧倒的に説き伏せられて、とうとう上方行きの随行を承知することになってしまいました。

米友にとつては、道庵が命の親であるのみならず、たしかに一箇にがての苦手で、この人に向うと、得意のタンカも切れなくなつてしまい、苦々にがにがしい思いをしたが、それといつて今の身分で、道

庵の頼みを拒むべき理由もなく、かえつて無意味に遊んでゐるよりは、有益なことには違ひないから、ともかくも返答に三日の猶予を置いて、これから小石川へ帰ろうとします。

気の短い道庵は、お仕着せや、そのほか旅の用意をその場で調べて、それを風呂敷に包んで、米友に背負せおわせました。そこで米友は、件の風呂敷包を首根くだんつ子に結ゆわいつけ、竹笠をかぶつて、跛足びつこの足を引き、例の杖槍をついて、道庵の屋敷を立ち出でました。

ふらふらと浅草広小路へ出て来た米友は、ここだなと思ひました。ここで、その昔、梯子はしご乗りの芸当をやつて見せて、かなりの人気を博したことがある。その時、ある大名の行列が乱暴をしたから、その先手さきての水瓜頭すいかあたまを十ばかり見つくろつて殴なぐり、吉原の方へ逃げ込んだことがある。その時の前科はもう氣のつく

ものはあるまいが、それでも米友は多少気が引けて、笠をかたげる気分で通つてみても、露店や見世物の賑やかなところを見ると目うつりがして、やがて以前、自分が梯子乗りをしていたところへ来て見ると、そこに店を張っているものがあります。

それは一人の絵描き^{えか}が露店を張つて、通る人の求めに応じて、さまざまの絵を描いているのであります。

ところが、この絵描き^{えか}が、風采^{ふうさい}からしてすこぶる変つています。六尺豊かの筋骨逞^{たくま}しい鬚男^{ひげおとこ}で、髪は結髪^{けつぱつ}にした上から、手拭で頬かむりをし、眼先なかなかものすごく、小刀を前半^{まえはん}にし、大刀を後ろの柳の木へ、戸板を結びつけたしきり、へ立てかけて置いて、その中へあぐらを組んで、しきりに絵筆^{えふで}を揮^{ふる}っているのが、一種異様に見えますから、米友も思わず足を留めてその前に立っていました。

「済みませんが、鍾馗様しやうきさまを一つ描いて下さいな」

町家のおかみさんらしいのが頼みに来ると、

「よろしい」

絵師は、さつさと紙を展のべて、縦横に筆を走らせ、見るまに悪魔除けの鍾馗様を作り上げてしまうと、おかみさんは喜んでそれを受取り、いくらかの鳥目ちやうもくを紙に包んで去りました。

「おじさん、たこ 風の絵を描いておくれ」

「よしよし」

ひきつづき、二人の子供のために、絵師は筆を揮つて、忽たちまちに雲竜うんりゆうと奴やつことを描き上げた腕前は、素人しろうとの米友が見てさえキビキビしたものです。

「こちらへお出しなさい。糸目をつけて上げますから」

絵師が風の絵を描いてしまうと、その後ろに乳呑児ちのみごを抱いて

控えていた、この絵師の女房らしいのが直ちにそれを受取つて、子供のために糸目をつけてやる。この女房も、身なりこそは粗末だが、人品になかなか侮り^{あなど}がたいところがある。

たこ 風の絵を描いてもらつて、糸目までつけてもらつた鼻たらし小僧は、

「おじさん、お錢^{あし}をここへ置くよ」

五六文の錢を抛^{ほう}り出して行つてしまうと、そのあとは暫くお客が絶えていたが、絵師は、別の紙を取り出して、盛んに筆を揮^{ふる}つてゐる。

その逞^{たくま}しい筋骨といい、両刀を離さないところといい、その女房の品格のあるところといい、たしかに變つた絵師夫婦であるが、さりとて落ちぶれ過ぎたと哀れを催すものもありました。が、米友は、その絵師が描きなぐつてゐる絵筆の勢いが、ばか

に氣持がいいので、お得意柄、名人の使う槍でも見るような氣持で、その筆勢に見惚みとれておりました。

感心なことに宇治山田の米友は、何事に限らず、芸の神髓を見ることが好きなのです。生なまな奴がキザな真似をすれば、この男は、やにわに立って叩きのめしたくなる病があると共に、事の妙境に触るるを見てとつた時には、我を忘れて心酔するの稚氣ちきがあるのです。

そこで、この絵師の書きなぐる筆勢を、心酔的にながめていると、あたりの人が散つてしまったのには氣がつきません。ちよつと絵筆をさしおいた絵師が、

「君、絵がわかるかね」

とたずねたときに我にかえつて、

「うむ、絵はわからねえけれど、筆つきが面白いなあ」

「そうか、一枚描いて上げようか」

「いらねえ——」

すげもなくいうと、絵師は、

「君は面白そうな男だ。いつたい、拙者の絵を見ているのか、筆を見ているのか」

「うむ——」

米友は唸うなりました。改つてこう尋ねられてみると、ちよつと返答に困るのです。ナゼならば米友は、そんなに絵が好きではありません。この絵師の描いている画題そのものも、人の足を引留めるほどの奇抜なものでもないから、絵草紙屋の店頭みせさきをも素通りする米友が、ことにこれらの絵に向つて、足をとどめねばならぬ必要は更にはずです。そうかといって筆が好きだというのも、おかしいものですから、ちよつと吃どもつて、

「筆つきがばかに気に入ったなあ」

「ははあ、では、やっぱりこの筆が気に入ったのだな。絵は要らないが、筆が欲しいというのか。そんならこの筆を上げよう」といつて描きかけた筆を米友の前に提示しました。米友は面喰つて、

「俺^{おい}らが筆を貰^{もら}ったつて仕方がねえ」

「それじゃ何が欲しいんだ」

絵師は頬かぶりの中から、巨眼を睜^{みは}つて、改めて米友の面^{かお}を穴のあくほどながめたから、米友が少し癩^{かさ}にさわつて、

「いつ、俺^{おい}らが欲しいといったい？　俺らは物貰^{もら}いに来たんじゃねえんだぜ」

こういつて軽く地団太^{じだんだ}を踏んで見せますと、米友の笠の下から、穴のあくほどながめていた絵師は、何に感心したか、小首

を捻^{ひね}りながら言葉を重くして、

「君」

「何だい」

「君にちつとばかり頼みたいことがある」

と改まっていたいいぶりで、なお米友の面を穴のあくほどながめて、
「ぜひお願いだ！」

絵師はむしろ歎願のような声。それを米友は焦^じれて、

「なんだつてお前、俺^{おい}らの面^{つら}ばかりながめてるんだ。第一、人の面を、ちよつとぐらいならいいが、そう長くながめているのは失礼に当るだろう」

絵師はその時、わざわざ頬かむりを取つて、

「悪く取つてもらつては困る……拙者は、君の面^{かお}に見惚^{みと}れて、つい失礼しちまったのだ」

「ナニ？」

「怒つてはいけないよ、君」

絵師は落着いているけれども、米友はムカムカと来ました。いつぞや金助という男は、この手で米友を嘲弄ちやうろうして、両国橋から大川へ投げ込まれたことがある。絵師もまた危ない刃渡りをしているようなものです。

「君、拙者は君を侮辱するつもりでいうんじゃないよ、他人を侮辱するには自分の現在というものが、ごらんの通りあまりに貧弱だ。ただし、世間の賞美する人間の面つらという面が、ことごとく押絵細工同様の薄っぺらなものであるところへ、君の面を見て僕は驚歎してしまったのだ。拙者は足利あしかがの田山白雲という貧乏絵師だが、今日はこれからななしの財囊ざいのうを傾けて、君のためにおごりたいのだ、ぜひつき合ってくれ給え」

足利の絵師田山白雲と、宇治山田の米友とが会話最中、

「人気者が来た！」

たださえ、物見高い浅草の広小路附近に、潮のような群れが溢れ返って、

「人気者が来た！」

口々に喚き叫んで、押しつ押されつ非常なる混雑になつてしまつたから、自然二人の対話も途切れて、その人だかりをながめないわけにはゆきません。

「みいちゃん、人気者が来たから見に行きましょう」

「はあ、ちゃん、待つて下さいよ」

町並まちなみから走り出でる者。

「御同役、人気者が出て参つたそうでござる、一見致そうではござらぬか」

「いかさま」

通行の者も歩みをとどめてながめる。

「人気者とは何です！」

と中から叫び出でたものがあると、群集は怒りを含んだ声で、
「人気者とは何だと問うのは誰だ、人気者であるが故に人気者である、理由の存するところには人気はない！」

いっかつ
一喝する者があります。

「違う、実質があつて後に、人気はおのずから生ずるのが原則だ、しからざる者は一時の虚勢に過ぎない。当世はまず人気を煽あおつて、しかして後に事を行わんとするの風がある、これ冠履顛倒かんりてんとうで、余弊すく済すくうべからざるものがある、よろしく人気の根元を問うべし」

と焚きつけるものもあります。

しかしながら、問う者も答える者も、現在やつて来る人気者の何者であるかを突留めている者はない。ただ、遠くから人の頭越しに、おびただしい旗と幟のぼりの行列がつづくのをながめているだけです。

「多分尊王攘夷そのうじょういでしょうよ」

聞えないようにつぶやに呟くのは、安政仮条約の時代をよく知っているお爺さんです。

「フランスという国で、かくめいという大戦があつた揚句、今までの掟おきてをばかにするために、ワザとお寺や社やしろをこわして、日本でいえばお女郎とかじごくとかいったような女を、神様同様に守り立てて、車に載せて押歩いたということを、三田の先生から聞きました。世が末になると、いよいよくだらないものが人気になります」

この男は、時代の作る悪人氣と、悪人氣に騒ぎ易い人心をなげいているらしい。

「御心配なさるほどのものじゃございませんよ」

苦勞人が口を出して、

「今、江戸中での人氣ある、商品の売出し広告を、ああして聯合でやっているだけなんですよ、この旗をもらんなさい」

「なるほど」

足利の絵師田山白雲と、宇治山田の米友とは、人氣者の行列とは、没交渉であるから、白雲は語りついで、

「実は君、拙者はこのごろ、三十六童子の姿をうつしてみたいと思つて苦心しているところなんだ、不動明王の眷族けんぞく三十六の童子を、古例になすまずに、おのおのその性格によつて表現を異にしようとかう考えているのだが、その粉本ふんぽんに苦しんでいる……

ところが今、計らず君に出逢つて見ると、まさにこれ天より与えられた模型である。どうか君、拙者のために時間をさいてくれ給え。君の住所を聞かしてくれば拙者が出向いて行こう、君の方にさしつかえなければ拙宅へ来てくれてもよい……ナニ、三日目に旅に出る？ それでは、ぜひ、今日のうちに、ちよつとそこで輪郭だけを取らしてくれ給え、頼む！」

米友は、この無作法な物の頼みも、その中に籠こもる真実性に動かされたものと見え、絵師の頼みに同意を与えると、絵師は喜んで道具を畳んで妻子を返し、自分は米友を誘うて人気者の行列を突切りました。

宇治山田の米友は、夜になつて、その宿所なる小石川の伝通院の学寮へ歸つて来ました。現在の米友の仕事は、ここで、雑巾ぞうきんがけをするだけのことですが、そのうちに、寺侍たちが、いつか米友の槍の達人であることを知つて、今では折々その師範役を兼ねているような有様ですから、寺内でもなくてならない人のようになつていきます。

「遅くなつて申しわけがねえ」

と米友が詫言わびごとをいつて、土間へ入り込んで来た時分に、土間では一斗も入りそうな薬罐やかんのつるされた炉の周圍に、寺侍だの、寺男だのが、腰掛で雑談の真最中であります。

「やあ、友造どのお帰りか」

ここでは友造の名で通つている。

「遅くなつて済まねえ」

笠をとり、風呂敷包を解きながら、再び申しわけをしましたけれど、実はそんなに夜が遅いものではありません。ただ予定通りに帰れなかったことを、米友として、しきりに申しわけながつてゐるのだが、誰も別してそれを咎めようとする人もなく、かえつて寺侍の一人が、意味ありそうにニヤニヤと笑つて、

「友造どの、奢らなくつてはいけないぜ」

「ナゼ？」

米友が円い眼をクルクルさせると、

「なんと皆の衆、今日はひとつ、友造どんに奢らせなければならまい」

「そうとも、そうとも、今日はひとつ、友兄に奢ってもらうがものはある」

「それ、どうだ、友造どの、覚悟をきめて返答さつしやい」

「何だかわからねえ」

米友はようやく首根っ子に結びつけた風呂敷包をほどいて、縁台の上へ置いて、解げせない面かお。それを興あることに思つて、一同の者が残らず米友をまと的に、

「さあ、友造君、奢るか奢らないか」

「わからねえ、奢つていい筋があるなら、ずいぶん奢らねえものでもねえが、わけも話さねえで、人を見かけてむりやりに奢れつたつて、そうはいかねえ」

米友は炉の傍に立つたままで解せない面に、多少の不安を浮ばせていると、

「友造どの、そなたに宛あててて別嬪べっぴんから文書ふみが来ているよ」

「エ、文書が……」

寺侍なにかしの某が、やはりニヤニヤと笑いながら、一通の封じ文を

米友の眼の前に突き出して、

「どうもこの頃中から様子がおかしいと思つていたら、この始末だ、油断も隙もならねえ」

そうすると寺男がまた口を出して、

「全く人は見かけによらねえもんだ、これを奢おごつてもらわなかつた日にや、やりきれねえ」

「うーん」

と米友が眼を睜みはつて唸うなりながら、その一通を受取つて見ると、美しい女文字で表に「友造様まいる」——一同の連中は、面白がつて、まじまじと米友の面かおをながめていると、当の米友はニコリともしないで、裏を返して見ると「本所相生町にて、松より」

「友造さん、最初はその手紙を使の者が持つて来たんですが、待

ち切れないと見えて、御当人が、わざわざおいでになりましたよ」

「うん」

といって米友は、周囲の雲行きに頓着なく、その場で封を切つて読んでみると、

「米友さん、あなたのいらつしやる所を、今日道庵先生からお聞き申しましたから、大急ぎでこの手紙を差上げます。手紙をごらんになりましたら、すぐにおいで下さいまし、お君さんが危ないのです。ぜひ、生きている間にもう一ぺん米友さんに会いたいといっていますから、今までのことは忘れて来て上げてください。これを聞いて下さらなければ、私が一生恨みますよ」

読んでしまうと米友が、暗い心になりました。伊勢の古市ふるいち以

来、幼馴染おさなじみ染のお君が、今、九死の境にいる。駒井能登守にだまされて、身を誤った女であるけれども、こういう場合にこういうれてみれば、さすがに米友もひとごとではない。

再び伝通院の学寮を立ち出でた宇治山田の米友。以前と違つて笠をかぶらないで、「伝通院学寮」の提灯ちようちんを腰にはさみ、例の杖槍はてばなすことなく、門を出て本郷の壱岐坂いぎざか方面へ、跛足びつこを引いて歩んで行きます。

米友としては、たとい、お君の行動に憤りいぎどおを含むとはいえ、妊娠のことも聞いている、病氣のことも聞かないではない、九死一生を訴えられてみれば、行かぬのは義において欠くところありと考えたのでしよう……しかし、心は決して打解けているわけではありません。

今日は、なかなか多事の日である。あれから足利の絵師田山白雲に引っぱられて人気者の中を横ぎり、やつこうなぎ奴鰻で一杯飲みながら——米友は飲まないけれども——その絵師の縦横の画談を聞きつつ、彼が自分を床の間に立たせて、写生を試みている熱心な態度を思い出してみると、尋常な絵師とは思われません。今こそ落魄らくはくはしているが、後来必ずや名を成すのは、あんな人だろうなんぞと米友は考えました。

やがて、柳原河岸近くまで来た時分、ここは貧窮組ひんぎゆうぐみの騒いだところ。自分が金包を落して、それを夜鷹よたかのお蝶に拾ってもらったところ。そのお蝶こそ恩人である。大事な節操を、二十文三十文の金で切売りをして恥じない夜鷹の身でありながら、人の落した大金は大切に保存して、苦心を重ねて、それを落し主にかえしてくれた親切を米友として、ここへ来て思い出さないは

ずはありません。

あの女はどうしている。まだ鐘撞堂新道かねつきどうしんみちの相模屋にいるはずだが、そうだとすれば今晚もここへ稼かせぎに出ているかも知れない、と思つて米友は、河岸の柳の蔭、夜鷹の掛小屋をいちいち覗のぞいて歩きました。

けれども、お蝶らしい女を発見することはできないで、腐れた肉を貪むさぼる有象無象の浅ましむくろい骸を、まざまざと見せつけられたに過ぎません。

あれだけの容貌を持ち、あれだけの心立てを持ちながら、あの境遇に甘んじて、それを抜け出そうともしない女の心が悲しい。

そこを過ぎ去つて、杉の森稻荷から郡代屋敷、以前女が殺された所、盲法師めくらほうしの弁信とお蝶とが連れ立って通りかかった時、

自分はムクと共にあちらから駈けつけて見たけれど、その人は煙の如くに消えてしまった。

あの身体で、あの目で、夜な夜な人を斬らねば眠れなかったその人もどこへか行ってしまった。その翌日病み疲れた枕^{まくら}辺に立って——地団太を踏んでみたけれど、彼はどうしてもその人を憎む気になれなかった——沈^{たい}勇^{じん}にして大人の風あるムク犬は今も無事で、それでも魂の抜けた主人を守っているのだらう。さて顧みれば四^あ辺^{たり}に全く人はない。今時、今の刻限、このあたりを独^{ひと}り歩きするの危険、それは米友だつて知っている。

辻斬の本場ともいふべきこのあたり。深夜にこの辺をうろつく者は、斬りに行くか、斬られに行くか二つの中。ここで米友は、改めて自分ながら危ない夜道だと思いました。

幸いにして「伝通院学寮」の文字が、辻番の目にも諒^{りょうかい}解^{かい}を与

えるに充分であつたと見えて、無事にここまで来た時に、はじめて米友も、うすら淋しさを感じたが、もう一息で両国。そこは、花やかな歡樂郷。橋一つ越ゆれば目的の相生町。

で、以前、女の殺されたあたりの柳の生えた堤どてに沿うて急いで行くと、道路に物が横たわっている。心得て米友は少し廻り込んで歩きながら、提灯をつきつけて地上を見ると、道に横たわっているのは意外にも一本の長い刀。

米友はギョツとして、何かまた、いたずら者の名残り、逃ぐるに急で振落して行つたものだろう、見ぬふりして過ぎるのも卑怯なような気がしたから、ともかくもと腰を屈かがめて地上に落ちた刀を拾い取ろうとすると、その刀がひとりでにスルスルと動き出しました。

刀がひとりでに動き出して堤どての上へのぼると、堤の上から、

その刀を携えて下りて来たものがありました。

「武士たるものの魂を足蹴あしげにすると何事だ」

「ナニ？」

そこで、米友は一閃ばかり飛びしりました。

「武士たるものの魂を足蹴にすると何事だ」

ははあ、例によつて辻斬だな、但し、こいつは少々駈引かけひきがあ

ると米友がその時に思いましたのは、ほんとうに斬る気ならば

前触まえふれはないはずである、ところが刀を往来中おうらいなかへころがして置い

て、文句をつけに出るのだから、飲代のみしろでも稼かせごうという代物で

あつて、必ずしも斬ろうというのが目的ではない、とは感づき

ましたけれども、ともかく、これだけの仕掛をするほどの凶々

しい奴だから、でようによれば斬るだけの腕を持っている奴で

ある。

で、一間ばかり飛びしきつた米友は、提灯をかざして、その下りて来た武士たるものの様子を篤^{とく}とながめました。

こちらがながめるより先に、先方は敵の提灯で、敵の内兜^{うちかぶと}を見定めたと覺しく、

「こいつは少し当^{あて}が外れた！」

やがてカラカラと大きな声で笑い出したのは、何か相当の獲物^{えもの}を期待していたのに、ひっかかったのが一匹の雑魚^{ざこ}に過ぎないと見たからでしょう。なるほど、夜目遠目で一見したところでは、米友は雑魚のようなものです。

「いいから通れ、通れ」

武士たるものは米友に向つて、鷹揚^{おうよう}に木戸を通そうとするが、お情けで網の目からおっぽり出されて、それを有難がる米友ではありません。

「お前に許しを受けなくつたつて通らあな、天下様の往来だ……」
天下様の往来とはいいいながら、この場合において、この男は
大手を振つて通るわけにはゆきません。提灯を左に持つて、杖
槍を右にかい込んで、その円い目を、武士たるものの身のまわ
りへピタリとつけて、やや遠くから廻り込むようにして過ぎよ
うとするのを、武士たるものはじつと立つてながめている。

「待たつしやい」

米友が、ようやく半円形に通り過ぎた時分に、立っていた武
士たるものが、また言葉をかけました。

「何だい」

米友は怒気を含んで答えます。

「見受くるところ、貴様は取るに足らぬ下郎ゆえ、助けて遣わ
そうと思つたが」

「取るに足らぬ下郎でまことに濟まなかつた、それがどうした」
勃然^{ぼつぜん}として、宇治山田の米友がタンカを切りにかかると、武士たるものが、

「推参な、下郎の分際で武士たるものの魂を足蹴^{あしげ}にした不埒^{ふらち}な奴、刀の手前、許すわけには相成らん」

「ばかにしてやがら」

ここで米友は冷笑を発し、

「武士たるものの魂がどうしたんだ、自分の魂を足蹴にされるようなところへほうつておくおびんずるも無かろうじゃねえか」

「何と申す、無礼な奴」

ここで武士たるものが憤^{おこ}り出しました。最初は相当^{おと}の獲物^{えもの}と思つて網を張つたのに、ひっかかったのが存外^{ぎざ}の雑魚^こだから、

逃がしてやろうとした情けを仇に、あべこべに啖呵たんかを切つておびんずる、呼ばわりするのは奇怪な奴、たとい馬鹿にしてもようしやはないと、憤然として武士たるものは、今にも斬つて捨てんず意気を見せました。そうすると米友は提灯を下へ置いて、足場を見計らい、例の杖槍を取つて、半身はんみに構えたものです。

「武士たるものの魂がそれほど大事ならば、大道中だいどうなかへころがしておくがものはなからう、樟脳しょうのうの五斗八升もふりかけて、七重の箱の奥へ八重の鍵でもかけて蔵しまつておいたらどうだ」

「よくも拙者をおびんずるにたとえたな」

武士たるものも容赦のならぬ顔色です。

武士たるものは、今にも斬らんず構えをして、槍を構えた米友の形を篤とくと見たままで、まだ刀を抜き放たないのは、かなり

のくせ、者であります。

下段げだんに身をしずめてゐる米友。風雲甚だ急なる時、武士たるものが、存外せ急き込まないで、

「ははあ、こいつは奇妙だ」
といいました。

さて、米友にもまたわからなくなりました。宇治山田の米友は、槍を使うことにおいては天成の自信を持つてゐるはず、天成の自信に、淡路流の極意を加えて、格法を無視して、おのずから格法の堂に入いつてゐることが、心得ある人を驚かすのを例とする。進んで道場荒しをして、我を売らんとするほどの野心はないが、来つて触れる者を驚かすには充分である。槍を持たせればこの男は、たしかに眼中人が無くなつて、自分の天分以外の達人は有りと、自分の天分以上のものは無いと信じて疑わ

ない。系統格法は論外に置いて、物があらば必ず突き留め得るものと信じて疑わないところに、この男の破天荒な勇氣がきざして来るのであります。我を知るものは必ずや敵を知つて、彼はこの勇氣を思慮なく濫用するということはありません。

わからなくなつたのは、大道へ武士の魂を抛り出して、飲代にでもありつこうとする代物のことだから、恫喝は利いても、腕は知れたものだろうとの予想が外れて、悠然として此方のかかるのを待っている体は、やはり米友その者を知らないから、ちよつとばかり腕に覚えのある馬鹿者が、誰かにオダてられて来たのだらうと、多分、先方はその辺に見くびりをつけたのでしよう。それとも事実腕のある大男の剛の者か。そこで、米友はわからなくなつたけれども、敢て自分の自信を傷つけられたというわけでもありません。

その呼吸を見て取った武士たるものは、

「待ち給え」

刀を抜かないで、てのひら掌を突き出して米友の槍の出端でばなを抑えるようにして、

「君のその槍は、拙者の小手を突くつもりだろう」

といいました。これには米友がピリリと来て、

「エ？」

といって眼を円くしますと、

「君の槍は奇妙千万で何とも形容ができない。いったい、君はどこでその槍を習った。槍先はたしかに宝蔵院の拳一になつて
いるが、槍そのものの構え方は木下流に似ている、といって気合精神はそれらの流儀のいづれでもない、トンと奇妙千万。まあ、仲直りをしよう、仲直りをして一話し致そうではないか」

先方から講和を申込んで来ましたが、その時、米友は、

「うーん」

と唸り出しました。うな今度は全くわからなくなつたのです。武士たるものはいつこう騒がず、

「君、まあ、この辺へ坐り給え。実は君をオドかして済まなかつたが、こんないたずらをしてみたのは、この辺が辻斬の本場になつて、世人が迷惑を致すから、ひとつ見せしめを試みて、今後を戒しめようとして、こうして網を張つてみたのだが、求めてみるとなかなか獲物えものはかからない、ところへひつかかった君は、案外の雑魚ざこだと思つたら、実は意外の掘出し物であつたのだ。勘弁し給え」

聞いてみるとなるほどと頷かれる。してみればこの武士たるものは、極々上の達人でなければならぬ。こういう芸当は、

覚え以上の腕がなければできない芸当である。さればこそ米友に講和を申込んで、その手腕を閑却することができなかったのも道理がある。しかし米友は、前途の急を説いてせつかくの好意を辞退したが、件の武士たるものは、では近いうちぜひ遊びに来給え、住所姓名は、神田お玉ヶ池のなにがしとたずねてみると教えてくれました。

二十四

浅草御門を両国広小路、両国橋を渡り終つて、ほどなく相生町の老女の屋敷に着いた宇治山田の米友。ホッと息をついて裏門の潜り戸くぐりどを押すと、迎えに出でた真黒な豪犬おおいぬ。

「おお、ムクか、久しぶりだ、久しぶりだ」

ちようちん

提灯を持ち換えて、ムク犬の首を撫なでてやる宇治山田の米友。

「友さん、よく来てくれましたね」

そこへ走り出でたお松。米友を案内して一間へ通すお松の眼には涙がいつぱいです。この氣丈な娘にしてこの悲しみ、米友もなんとなしに情けない心に打たれて悄しおれました。

「友さん、お君さんがもういけないのですよ」

「ど、どうして？」

米友は胸を圧迫されるような苦しさで、お松の面おもてをじつと見つめる。

「赤ちゃんが生まれました、赤ちゃんの方は丈夫ですけれども、お君さんがいけないのです、で、自分にそれがわかつているんでしょう、ぜひ、友さんに会わせて下さいって、そのことばかり言いつづけなんですよ、ほんとによく来て下さいました」

「うむ」

「けれども、友さん、そういうわけですからね、いつものようにポンポンいっちゃいけませんよ、たとい友さんの気象で、面白くないことがあるとしても、友さんみたように、あんなに強くいわれるとね、気の弱い人はのぼせてしまいますから、やさしく口を利いてやつて下さいね」

「俺ら^{おい}だつて、好んで悪口をいうわけじゃねえんだ」

「そうでしょうけれども、なるべくやさしくいつて下さいよ」
「ムクがかわいそうだな」

「いって米友は、障子を開いて縁の外を見ますと、お松が、
「ええ、ムクもこのごろは、しおれきっています、御飯をやつても食べやしません」

米友は立つて縁の上に出で、そこで口笛を吹きますと、

「友さん、夜になつて口笛を吹くものではありませんよ、悪魔がその音を聞いて尋ねて来るそうです」

しかしこの時は、悪魔は来ないで、ムク犬がやつて来ました。お松が立つて行つたあとで、米友は、

「ムク」

うるみきつた大きな眼と、真黒い中で、真黒い尾を振る姿を見て、

「ムク、手前は強い犬だったなあ、昔もそうだったから今もそうだろうが、強い犬になるにやあ、飯をうんと食わなくちや駄目だぞ」

「……………」

「飯を食わなけりやあ瘦せちまあな、瘦せちまつちや強い犬にはなれねえぞ、しつかりしろよ」

身を屈めた米友は、手を伸べてムク犬の首から咽喉^{のど}を撫でてやり、

「宇治山田にいる時はなあ、手前がほんとうに怒つて吠えようと、街道を通る牛や馬まで慄^{ふる}え上つて、足がすく、んじまったものだ。こつちへ来ても、おそらく手前ほどの犬は無からう。たとい、おいらが附いていなくなつて、お松さんという人が附いている、お松さんはほんとうに親切な人なんだから、手前はよくお松さんのいうことを聞いて、飯を食わなくちやいけねえぞ」

「……………」

「意^い久^く地^じなしめ、痩せてやがら。ホントに手前はいつまでも強い犬でいねえと、おいらが承知しねえぞ。遠吠え専門の瘦犬は何万匹あろうとも、ほんとうに強い犬というのを殺すのは惜しいなあ、手前もちつとは自分の身が惜しいということを知れ」

米友の声がうるんできた時、お松が戻つて来て、

「友さん、それでは、どうかこつちへ来て下さい」

見事なその一間、絹紬けんちゆうの夜具に包まれて、手厚い看病を受けているお君の身は、体面においてはさのみ不幸なものとはいわれません。

米友が来たと聞いて、その美しい、衰えた、淋さびしい面おもてに、このごろ絶えて見たことのない晴々した色が浮びました。

「お君さん、友さんが来ましたよ」

「どうも有難う」

力のない身体からだを向き直すつもりで、鉢巻をした面かおだけをこち

らへ向けると、米友は無言のまま、そこへ坐り込んでいます。

「友さん、よく来てくれましたね」

「うむ」

「わたしはね、頭の方は癒なおりましたけれど、身体はもう駄目なのよ」

「……………」

その時に、お松が米友に代っていいました、

「そんなことはありませんよ、産後ですもの誰だつて……」

「いいえ……」

お松も信じては力をつけられない。お君も気休めの言葉を、気休めとして聞くほどに自分を知っている。

「ですから友さん、わたしはお前によく話をしたり、頼んだりしておきたいと思つてゐるの……」

「うむ」

「友さん、お前はわたしを憎んでゐるばかりでなく、駒井の殿様をもいつまでも憎んでおいでなのが、わたしは残念でたまら

ない」

「それは昔のことだ、今じゃあそんなことまで考えちゃあいねえよ」

「嘘です、友さんは憎みはじめたら、良い人でも、悪い人でも、終いまで憎んでしまうのですから、わたしは悲しい。ですから、でも今はそんな話はよしでしょう、あいやま間の山にいた時のお友達の昔に返って、友さんにわたしはお頼みしておきたいことがあるのよ……」

お君は、やつとこれだけのことをいうと、すっかり疲れてしまつて、咽喉のどもかわくし、唇の色まで変つています。

「お君さん、お薬を上げましょうか」

「どうも済みません」

お松の手で咽喉をしめしてもらつたお君は、再び言葉をつぐ

元気がないと見えて、目をつぶつたまままで微かに呼吸いきを引いています。

二人も、その安静を妨げない方がよいと思つて、黙つて、お君の寝顔をながめているだけです。

「友さん……」

暫くして呼んだお君の声は、夢の中から出たようで、その眼は開いているのではありません。

「お君さん……」

と米友の代りにお松が返事をしたけれど、お君の呼んだのは囁言うわごとでありました。

二人は、なおその寝顔をじつと見ていると、お君の額にありありと、苦痛の色が現われて、

「あ！」

「お君さん」

お松がその背中へ手を当てると、

「皆さん、ムクを大切だいじにして下さい、お松様、あのことをお頼み致しますよ」

「何をいつていらつしやるの、お君さん、しつかりしなくては
いけません」

「友さん……それでは、わたしを間の山へ連れて行つて下さい……駒井の殿様へよろしく申し上げて、さあいつしよに帰り
ましょう……鳥は古巣へ帰れども、往きて還らぬ死出の旅……」
この時、お君の面おもてからサツと人間の生色が流れ去つて、蟬の
ような冷たいものが、そのあとを埋めてしまいました。

「誰か来て下さい……」

お松が叫んだ時、抱えていたお君の頭が、重くお松の胸に落

ちかかります。

「死、死んだのかい！」

宇治山田の米友が、矢庭^{やにわ}に飛び上つたのもそれと同時刻。

かわいそうに、お君は死んでしまいました。

まもなく、この邸の裏門から驀然^{まつしぐら}に走り出だした宇治山田の

米友は、相生町を真一文字に、両国橋の袂^{たもと}まで飛んで来て、

「これこれ、どこへ行く」

橋際の辻番の六尺棒で行手を支えられた時、

「間の山へ行くんだ」

「何だ……」

「間の山……じゃなかった、小石川へ帰るんだ」

「小石川のどこへ」

「この提灯を見ねえな」
ちようちん

突き出してみたけれども、あいにくのことに、その提灯に火が入っていません。

「ちえッ」

杖槍と、提灯とを、ひっかかえて来たけれども、この提灯へ火を入れることを忘れていた。

「どこから来た」

辻番は穏かならぬ面色かおいろで咎めると、米友は舌打ちをしながら、
「相生町の御老女の屋敷から来て、小石川の伝通院の学寮へ帰
るんだ、火を貸しておくんなさい」

米友は火の入っていない提灯を、辻番所まで持ち込むと、

「それ」

ちよつと億劫おっくうがった辻番が、投げ出すように火打道具を貸し

てくれる。

「カチカチ」

「ちえッ」

「カチカチ」

燧ひうちを打つ手先が戦わなないて、ほくちを取落してはひろい上げ、ようやく附木にうつすとパツと消える。

「ちえッ」

焦しれ立つた米友の挙動を見ていた辻番が、

「それでは燧ひうちがね金がさかさだ」

「ええいッ」

やつとのことで火は提灯へ入ったが、手先が、やはりわなわなとふるえている。

「なるほど」

辻番は提灯に現われた「伝通院学寮」の文字をありありと読んで、やや得心が行ったように、

「何を慌あわてているのだ」

米友の挙動には、不審が晴れない。

「何でもねえんだ、どうも有難う」

そうして走り出すと、

「おい、待たつしやい」

呼び留めた辻番、振返った米友。

「何か包を落したぞ」

「うむ、そうだ」

辻番が拾ってくれた帛紗ふくさづつみを、手早く受取って懐ろへ捻ねじ込む。

「気をつけて歩かつしやい」

辻番も、米友の挙動を合点ゆかないとは思つたが、出て来たところが老女の屋敷で、行先が伝通院ということに諒解を持つたものと見えて、跡を見送つただけである。一目散に両国橋の上を走り渡つた宇治山田の米友が、

「往きて還らぬ死出の旅」

そこで、ピッタリと足をとどめて、

「さあ、わからなくなつた、前と後ろがわからなくなつちまつた、右と左もわからなくなつちまつた」

宇治山田の米友は、両国橋の真ん中の欄干てすりの前に突ツ立って、

「何が何だか、おいらの頭じゃわかりきれなくなつた。来世らいせとい

うのはいったいどこにあるんだ。ナニ、魂だけが来世へ行く？

さあ誰がその魂を見た、その魂が来世とやらへ行つて何をしてい
るんだ。ナニ、この世で苦勞したものが来世で樂をする？ 誰が

それを見て来たんだ、魂が来世へ行つて何を働いているか、見届けて来た人があるなら教えてくれ、後生ごしょうだから……今まで生きてたものが死んじまった、ただそれだけか。花は散りても春は咲く、鳥は古巣へ帰れども、往きて還らぬ死出の旅……今、それがひとごとじゃねえんだぞ、ほんとうに死んだ奴が一人あるんだぞ。ナニ、誰か殺したんだらうつて？ 冗談じゃねえや……ナニ、米友、お前が苛め殺いじしたんだらうつて？ ばかにするな。そうでなければ駒井能登守の奴が殺したんだらうつて？ 何をいつてやがるんだい、何が何だかこの頭じゃわからねえや」

宇治山田の米友は、狂氣の如く同じところを飛び上つています。

栃木の大中寺に逼塞ひっそくの神尾主膳は、このごろは昔と打って変わった謹慎ていの体であります。

謹慎でなければならぬように、すべての都合が運んでいるところへ自分もまた、つくづくと半生の非を悟った。これからの生涯を蒔まき直そうかと考えているらしい。

この男は、悪友と酒癖しゅへきさえなければ、転回の余地がないという限りはない。今、斯様かようにかけ離れたところに来ていれば、悪友の押しかける憂いもなし、酒は自ら悔いているくらいだから、断じて盃を手に取りぬという堅い決心をきめているのです。それに、悪友と酒癖とからこの人を遠ざけた一つの大きな理由は、例のお喋り坊主の弁信を、巢鴨の化物屋敷で井戸の中へ投げ込もうとした時に、釣瓶つるべが刎はねて受けた傷、眉間の真中に牡丹

餅大の肉を殺^そぎ取られて、生れもつかぬ形相^{ぎようそう}となつてしまった。それ以来、世間へこの面^{かお}を曝^{さら}すことが業腹^{ごうはら}で、思いきつて旧領地の縁をたどり、ここへ引込んでしまったのだから、今の謹慎も実は、その面部の大傷がさせた業^{わざ}と言うべきものです。それと、もう一つは、財政がもはや全く枯渇して、化物屋敷の類焼以来は、江戸三界では融通^きが利かなくなつたといふことで、それがおのずからこの男を謹慎にし、多少、謹慎の味がわかつてみると、遅蒔^{おそまき}きながら、生涯を蒔き直そうかという気にもなつてみ、寺僧に就いて、多少、禅学の要旨を味わつてみたり、茶や、生花の手ずさみを試みてみたり、閑居しても、必ずしも不善を為さぬような習慣になつてゐるのです。

しかし、これとても、本心から左様^{はっしん}に発心^{しやうじん}して精進^{しやうじん}しているわけではなく、事情^{しやうじ}からしめた故にそうなつたので、この事

情が除かるるならば——たとえば面の傷が癒着ゆちやくするとか、財政の融通が利いて来るとかいうことになれば、また逆転しないという限りはないが、今のところではその憂いはなく、それで、附近の旧知行所の人々は質朴で、殿様扱いに尊敬するものだから、満足はしていないながらも、無聊ぶりように堪えられないということはなく、どうかすると斯様な生活ぶりに、自然の興味をさえ見出すこともあるのです。

今宵は月が佳いいからというので——大中寺とは背中合わせになつてゐる大平山の隠居から招かれて、碁打ちに参りました。
おおひらやま

この隠居も大中寺へ見えて、主膳とは碁敵ごがたきになつてゐるが、主膳の方がずっと強いながら、この辺としてはくつきようの相手です。主膳の来訪を喜んで、眺めのよい高樓に盃盤はいばんを備えて待受け、

「これは講中の者から贈つてよこしました花遊かゆうと申す美酒でございます、美酒と自讃を致すのもいかなものでございしますが、ともかく、関東としては、ちよつと風味のある品と覚えました故、一献いっこん差上げたいと存じまする」

「折角ながら、拙者は酒を飲まないことに致しておる」

「それはそれは、何か御心願の筋でもあらせられまして」

「いや、別に心願というわけでもないが、酒では幾度も失敗をしでかした故に」

「それは残念でございます。しかし、少々ぐらいはお差支えがございますまい」

「いって、隠居は手ずから神尾の前の盃に酒を注ぎました。」

「せつかながら……では、早速一戦を願おうか」

「今日こそは、先日の仇討あだうちを致さねばなりません」

二人共、酒盃は其方そっちのけにして、石を並べはじめました。

局面が進んで行くと、二人はいよいよ熱中する。隠居は石を卸しながら、ちよいちよい酒盃を手にするが、最初から手を触れないでいた神尾、

「ここはぜひとも切らなければ」

と言つて一石、その手が思わず盃にさわる。

我知らず唇のところまで盃を持つて来て、はじめて気がつき、

「あつ」

と苦い物でも嚙んだように、下へさしおいて、

「ともかく、切つた以上は繋つないでおく」

隠居は考え込んで、

「弱りましたな」

「これで局面が一変」

神尾は喜んで、再びその手が無意識に盃の上へ下りる。

「さあ」

と隠居が、いたく考え込んでいる。得意になった神尾が、知らず識らず盃を唇のところへ持つて来て、

「あつ」

また熱い物でも触れたように、慌あわてて下へ置く。

「そうなりますと、絶体絶命、劫こうに受けるより手がなくなりました。上手うわてに向つての劫は大損でございますが、仕方がありません」

隠居は窮々きゆうきゆうとして受身である。神尾は劫を仕掛けて、いよいよ有利と見える。もはや、充分に死命を制したつもりで得意になると、三たび、その手が盃に触れる。唇のところまで持つて来て、

「いや、これは違つた」

苦々しい面をしていると、気がついた隠居が、

「これはこれは、御酒が冷えましてでございましょう、お熱いのを換えて差上げましょう」

忙がしい中で手を打つて女中を呼んで、爛かんの代りをいいつけ
て、

「では、これだけいただきましょう」

「それは相成らん」

「拙者はこつちの方を少しばかり」

「どう致しまして」

「ここなら頂けますか」

「なかなか以て」

「左様ならば、ホンの少々だけ」

「御免を蒙ります」

「これはこれは。あれも下さらない、これも下さらない。しか
らばホンの三目だけ」

「その三目をやっては全体が活いき返る。さあその次は」

「ごようしやを願います。左様ならばこれだけ」

「以てのほか……：しかしながら、これで拙者の方の劫種こうだねが尽き
たわい、あれとこれと交換では割に合わぬ、じゃと申して、も
うほかには種がない、こりや劫負けかな」

「そのくらいは負けていただかないと碁になりませぬ」

「さあ、これでまた局面が逆転した、悪かつたな」

神尾は当惑して暫く考えていると、またしてもその手が盃に
触れる。

「これでホッと一息致しました」

隠居はホツと息をついて盃を取り、飲みぶり面白く乾すと、

「さあ、難石だ」
なんせき

といって神尾もうっかり唇まで持つて行つた酒を、チビリと一口飲んでしまつて、

「あ」

取返しのつかないというような面。

「こりゃ、の、んでおくか」

「え、どうぞ」

神尾は一石伸ばすと共に、無心で一口つけた盃を、今度は自暴やけの気味でグツと飲み乾してしまふ。

「さあ、どうぞお引き下さいませ」

隠居は碁石とお銚子とを、ちゃんぽんに扱う。

「どうなるものか」

神尾が荒つぽく一石を打ち卸して、その手がまた有心無心うしんむしんに盃に触れる。

「どうぞ、お重ねあそばして、さあ」

隠居はお銚子を打って、碁石をすすめるようなもてなし。

「いよいよ悪かったか」

神尾はついに三たび、盃を飲み乾した時、陣形ことごとく崩れてしまつて、もはや收拾の余地がない。勝ち誇つた隠居は、その傍らいい氣になつて神尾に酒を酌つぐ。業腹ごうはらになつた神尾は、

「投げだ」

碁石を投げ出して、焦々いらいらしく酒盃を取り上げる。

「ハハハハハ、怪我でございます、大きな拾い物を致しました」
幸いにして神尾主膳は、この時まだ全く自制を失つたというのではありません。謹慎の癖がついてみると、破戒とがの咎とががいく

らか身を責めて、ある程度で盃をくいとめたのは大出来です。

改めて一石——そこで主膳は手水ちようずに出た時、廊下であわただ

しく一間へ駆け込んだ人影を見て、小首を傾かしげました。

別に女中が追いかけるように手燭てしよくを持ち出したけれど、もう遅い。

主膳が、酔眼にもし、かと認めたその人影は女。それも江戸の町家、或いは大名の奥などで見るような娘ぶり。

この家に娘はないと聞いていた。してみれば今のは？

主膳はその疑問を解き終らずに席へ戻つて、改めて盤に向う。数番の勝負終つて後、主膳もしかるべきところで切り上げて帰ろうとする。

そこで隠居は、秘蔵の刀剣や書画骨董を取り出して見せる。やがて主膳は隠居に辞儀をのべ、思わず酩酊めいていした申しわけを

すると、

「お口に叶いましたならば、別に一樽いっそんを献上つかまつ仕る」

隠居は別に美酒一樽を仕込んで僕しもべに持たせ、主膳を送らせることにしたのは出来過ぎです。

断わつても聞かれず、月はありながら提灯を持った僕に、別酒一樽を持たせて大平山神社やしろの社を、左へ取つて、石積みの鳥居を潜くぐる時分、酔いが廻まわつて主膳は陶然とうぜんたる心持になりました。

ちようど、向うから無提灯で来た旅の者——月夜ですから無提灯が当り前ですけれども、それにしても旅慣れた姿、この間道をよく登つて来る近在の百姓とも思われません。

すれ違つた時に先方の合羽かっぱが、

「モシ、失礼でございますが、神尾の殿様ではいらつしやいませんか」

「なに、そちは誰じゃ」

そこで神尾が踏みとどまると、旅の者は傍へよつてきて、小腰をかがめ、

「百蔵でございます」

「がんりきか」

神尾主膳が苦々しげに立っていると、がんりきはなれなれしく、

「これはよいところでお目にかかりました、実は、殿様がこちらにおいでなさることを承つて参りましたのですが、ともかく、大平山へ参詣致しましてから、改めてお伺い致そうとこう考えていたところなんでございます、ここでお目にかかったのは何より。そうして殿様は、これからどちらへお越しになろうというんでございますか」

「いや戻り道だ、大平神社の隠居殿を訪ねて、これから大中寺へ戻ろうとするところじゃ」

「左様でございますか」

「百蔵、お前はまた何しに、こんなところへ来たのだ」

「少々ばかり信心の筋がございましたね。それともう一つは、ぜひお久しぶりで殿様の御機嫌を伺いたいと、こう思つて参りましたんでございます」

「それは有難いような、迷惑なような次第だ」

「いかがでしょう、これから殿様のお伴を願ひましては」

「左様……」

主膳は、ちよつと考えていたが、隠居の僕を顧みて、

「これこれ若い衆、そちは、もうよいから帰らっしゃい、ここから帰つて、隠居殿によろしく申してくれ」

「いやナニ、せつかくでございますから、あちらまでおとを
させていただきましょう」

「若い衆さん……」

が、ん、りが、隠居のしもべを見ていいました。

「お帰んなすつて下さい、私が殿様のおともを致して、無事に
お送り申し上げて参りますから、御安心なさるように……おつ
と、それはおみやげでございますか、が、ん、りが頂戴して持っ
て参りましょう」

といつて、僕しもべの手にしていた美酒一樽を、早くもが、ん、りが受
取つてしまいました。

隠居の僕はぜひなくお暇をいただいたわけで、が、ん、りの百
蔵が代つておみやげの美酒一樽をぶらさげ、提灯は断わつてし
まつて、二人が相携えて、大平山を大中寺の方へ、山間やまあいの小径こみち

を伝うて下ります。

「が、ん、り、き、そちはどこで拙者の隠れ家を聞いて来た」

「ええ、福村様から承つて参りました」

「福村から？ 福村はどうしている」

「相変らず……お盛んな御様子でございました」

「そうか」

「時に神尾の殿様、あなた様はいつたい、もうこの土地で、一生を埋めておしまひになるつもりでございますか、江戸の方には未練をお残しなさるようなことはございませんのですか」

「そうさなあ、住めば都の風といつて、このごろのように行い澄ました心持になつてみると、こういつた生涯にもまた相当の味があるものでな」

「ははあ、では、その大中寺とやらで、御修行をなすつていらつ

しやるんでございますね、御修行が積んだら、ゆくゆくは一カ寺の御住職にでもおなりなさるつもりで……いや、頼もしいことでございます」

が、ん、り、き、は、わざとらしく一樽の美酒をブラブラさせる。

「何をいつているのだ」

神尾も久しぶりで相当のはなしがたき話敵が出来たような気分で、が、ん、り、きの相手になつて、ブラブラと小徑をたどる。

「そりやずいぶんと結構でございますなあ、殿様がそういう結構なお心になつたとは露知らず、世間にはずいぶんふざけた奴が多いので、いやになつちやいますなあ」

「が、ん、り、き、そちは妙ないい廻しを致すではないか」

「全く腹が立つちまいますねえ、せつかく、ほっしん発心なすつてくどく功德を積もうとなさる殊勝なお心がけを、はたからぶちこわして行

く奴が多いんで、情けなくなつちまう」

「何がどうしたのだ、誰か修行の妨げでもしたというのか」

「まあ、早い話が……この酒樽なんども、そのロクでなしの一人、ではない一箇ひとつのうちでございましょう、こいつが」

「いってがんりきは、その提げていた酒樽を、邪慳じゃけんにブラブラさせる。」

「その酒樽が……何か悪事でも働いたというのか」

「悪事どころじゃありません、第一、御修行中の殿様を、今、お見かけ申せば、どうやらいい心持にして上げたのも、こいつの仕業しわざかと思ひますと憎らしい」

「がんりきはこういつて、またも酒樽を烈しくブラブラさせる。」

「これ、酒樽に罪はない、そう手荒いことをするな」

「手荒いことをするなとおっしゃったつて、これが憎まずにい

られましょうか、さんざん、殿様をほろ酔い機嫌のいい心持にして上げたうえに、また宿へお帰りになれば、寢酒というやつで、散々のお取持ちをする、思えば思えば、この樽めが憎らしい、憎らしい！」

が、んりきは、今度は、ブン廻すように酒樽を烈しく揺ると、神尾が笑い出し、

「いいかげんにして許してやってくれ。実は近頃、全く禁酒をしているのだ、ところが今宵、碁敵の隠居に招かれて、碁に興が乗つてくると、思わず知らず盃に手をつけたのがこつちの抜かり……四五盃を重ねて、つい、いい心持になつているところへ、隠居が気を利かせたつもりで、その一樽をばお持たせということになつたので、拙者の意志ではない、先方からの好意がかえつて有難迷惑じゃ」

「さればこそでございます、それほど殿様が一生懸命に行い澄ましていらつしやるのを、外から甘えてこつちのものにしよう」と企む奴、いよいよ以て容赦のならぬ樽め」

が、ん、きは、いよいよ樽を虐待してみたが、それでも踏みこわすほどのことはなく、やがて、おとなしくなつて、わざとらしく猫撫で声、

「神尾の殿様、憎いのはこいつばかりじゃございません」

「まだ憎み足りないか」

「憎み足りない段ではござりませぬ、ほんに骨身を食いさいて

やりたいというのは、蒲焼かばやきの鰻うなぎではございせんが、年をとる

ほど油の乗る奴があるんでございます、見るたんびに油が乗つ

て、舌たるいといつたら堪たまつたものじゃありません、あれをむ

ぎむぎ食う奴も食う奴、食われる奴も食われる奴、全く骨身を

食いさいてやりたいほど、憎らしいもんです」

「が、ん、り、き、」

「はい」

「その酒をここへブチまけてしまえ」

神尾主膳はなんとなく焦れ出してきたように見える。

「それは勿体ないこともったいでございます」

「いいからブチまけてしまえ」

「勿体ないことでございますな、おいやならば私が頂戴致しましょう、お下りさがでありましょうとも、お余りでありましょうとも、うまい物には眼のないこのが、ん、り、き、まして手入らずの生き一本いっぽんときては……」

ほどなく大中寺の門前までやって来た時分に、が、ん、り、き、の百蔵は、急に主膳にお暇乞いをして、明日にも改めてお伺い致しますと言つて別れてしまいました。

いかにも泊り込みそうな気合で来て、ふいに外それてしまったから、主膳も、拍子抜けの気味で、そうかといつて、泊り込まれるよりは世話がないから、そのまま門前で、が、ん、り、きと別れてしまいました。

そこで主膳がもてあましたのは、隠居からおみやげに贈られた美酒一樽しもべ。僕の手から、が、ん、り、きの手へ、が、ん、り、きの手からいま改めて主膳に返されてみると、主膳はそれを持扱いていの体です。

これは山門の中へは持ち込めない。そうかといつて、ここへ

無下^{むげ}に打捨^{うつちや}らかしてしまふのも冥利^{みょうり}である。そこで、主膳は門番の戸を叩きました。

「どなたでございます」

というのは門番又六の女房お吉の声です。

「神尾じゃ、又六はおらぬか」

「まあ、殿様でございましたか」

お吉が驚いて戸をあけて迎える。主膳は中へ入って、

「又六はおらぬか」

「皆川の方へ参りまして、まだ戻りませんでございます」

「左様か。お吉、迷惑だが、これを預かってもらいたい。いや預かるのではない、門前の誰かに欲しいものがあつたら遣^やつてしまつてもよろしい」

「何でございますか。おや、これは結構な御酒ではございませ

んか」

「うむ、大平山の隠居から貰つて来たのじゃ。又六は飲けぬ口であつたな」

「こんな結構なお酒を、ここいらの者に飲ませては勿体もったいのうございます、殿様のお召料めしりようになさいませ」

「そうはいかない」

「それではこちらでお預かり申しておきましょう。ああ、ちようどよろしうございます、鉄瓶があんなに沸いておりますから、少々ばかりここでお爛かんを致して差上げましょう、お一人では御不自由でございましたようから」

「それには及ばぬ」

「どうぞ、殿様、せつかく、隠居様のお心持でございますから、そうあそばして一口お召上りなさいませ」

お吉は甲斐甲斐しく、この酒を受取ってお燗の仕度にかからうとします。

主膳は、さきほどが、ん、きに焚きつけられて、もだもだといやな気がさしたのが、お吉のこの愛想で、また前のようにいい氣持になりました。

又六の女房お吉は、さして好い女というではないが、愛嬌があつて、親切者で、日頃よく主膳の面倒を見てくれるから、主膳も好意をもつていたところへ、こうして下へも置かぬようにされると、つい、「それでは」という氣になりました。

「まあ、こんなむさくるしいところへ、どうぞ殿様、これへお上りくださいませ」

お吉は座ござなどを持って来て、すすめるものだから、主膳もついそこへ上り込んでしまいました。

「隠居のところで、御馳走になつて、久しぶりで酩酊めいていの有様、少し休ませてもらおうかな」

「ええ、どうぞ、何もございませんが」

お吉はいそいそとして、酒の爛、有合わせの肴さかなを集めてもてなそうとする親切氣、まだ醒さめやらぬ酔眼で、その親切氣を見ていると主膳は嬉しくなり、そのもてなしを受けてみたい氣になつてゆきます。

お吉の方では、こうして旧主に当る人をもてなすのを光榮とし、取急いで膳立てをして、

「さあ、失礼でございますが」

温かい酒の一献いっこんを主膳にすすめました。

今日に限つて、すべての環境が、主膳を温かい方へ、温かい方へ、とそそつて行くようです。お吉のもてなしを受けてその

温かい酒の盃が唇に触れた時の心持は、隠居の時の苦々しいの
とは違います。

みこしを据えて飲む氣になつてみると、酒の味が一層うまい。
そろそろと酔いが廻つてゆくと、半ば忠義氣取りでもてなすお
吉の親切が、あだ者に見える。

そこで、さいぜんのがんりきのいい廻しを思い返してみると、
たまらない氣になる。先代の愛妾お絹と福村とは夫婦氣取りで
暮しているそう。女も女なら、福村の奴も福村の奴だ。おれ
がこうして殊勝に引込んでゐる氣も知らないで、人もあろうに
度し難い畜生共だ。江戸へ押しかけて、福村の奴を取つて押え
て泥を吐かしてやろうか。

しかし、仕方があるまい。どのみち、おれも今までの仕来り
を考へてみれば、そう立派なことでもないのだ。だが、いま

いましい奴等だ。お絹の身持は言語道断、（ごんごとうだん）福村の奴もこれまで、どのくらい眼をかけてやったか知れないのに、ふぎけた真似をする、外に女がないではあるまいに——年をとるほど油が乗るという淫婦の肉体ほど厄介なものはない。殺してしまわなければその油が抜けない。いまいましい話だ。それを思うと甘かつた盃が急に苦くなります。

「殿様には、よくまあ御不自由の中に御辛抱をなさいます。世が世ならば、私共なんぞは、お傍へも寄ることはできませんのに、こんなところへお越し下さいまして、ほんとうに勿体ない（もったい）ことでございます」

「いや、お吉、お前には何から何まで世話になるばかりで本当に済まぬ、主膳もこのまま朽ち果てるとも限るまいから、何かまた世に出づる時があらば、この恩報じは致すつもりだからな、

又六にも悪くなくいつておいてくれよ」

「殿様、恐れ多いことでございます。宿^{やど}も、殿様がお気の毒だ、お前はよくして上げなければならないと、いつでも申しておりますでございます」

「又六もなかなか心がけのよい者だ、主膳が世に出れば、このままでは置かないつもりだ」

神尾主膳は、どうしたものか今夜に限って、しきりに世に出れば、世に出れば、が口の端^はに出る。このごろはともかくも今の境遇に安んじて、それを楽しむ心さえ起りかけていたのに、今夜は急に、これを不足とするらしい。

「どう致しまして、殿様、私共はいつまでも殿様がこうしてこちらにおいであそばす方が、忠義ができて有難いと申しておりますのでございます。殿様が、以前の御身分にお戻りなされば、

とてもお傍へも寄ることはできません、殿様のおためには、御出世がようございますか存じませんが、私たちのためには、こうしてお身軽くしておいでなさるのが何より有難いのでございます」

「いや、お吉、お前方の親切はほんとうに嬉しいぞ。それが本当だ、今まで拙者が交際していたやつらは、羽振りのよい時だけに限ったものだが、お前たちにはそれがないのが嬉しい、嬉しい。お吉、ほんの志じや、これをお前に取らせるぞ」

といって神尾主膳は差していた脇差を抜き取って、お吉の前に置きましたから、お吉がびつくりして、

「まあ、こんな結構なお差料を、わたくしに……」

「取って置きやれ。ああ、いい心持になった。もう夜もかなり遅いことだろう、又六は今夜は帰るまいかな。あまり夜ふかし

をしてもならん、ドレ、拙者もお暇いとまと致そうか」

こういつて主膳は立ち上ると、腰がよろよろとしました。

「お危のうございます」

「帰る、帰る、どうしても帰る」

主膳は外を見ると、月がもう落ちてしまつて闇です。お吉は提灯ちようちんをつけて主膳を送りに出ました。

千鳥足で外へ出た神尾主膳を、提灯をつけて送り出したお吉。山門を入ると両側は巨大なる杉の木。宏大なる本堂の建物を左にして、書院の方へ進んで行くと、神尾はむらむらと何かに刺戟きげきされました。

この男には、烈しい酒乱の癖がある。ひとたびそれが兆きざした時は、われと人をかえりみるの余地のないことをお吉は知りません。そうして油坂の石段の下まで来ると、そこから急に右

へまわり出しましたから、お吉が、

「殿様、どちらへおいでになりますか」

「お前の知ったことではない」

ずんずん横へ外れて行く神尾主膳。お吉は見えていられないから、追っかけるようにして、

「お危のうございます」

「お前の知ったことではない」

どこへ行くかと思うと、神尾は勝手を知った庭を通つて、大
中寺名代なだいの七不思議の一つ、「開かずの雪隠せついん」の前へいつて、そ
の戸の棧さんへ手をかけて、それを引開けようとする様子ですから、
お吉が、あなやと驚きました。

「殿様、何をなさいます」

「お前の知ったことではない」

「殿様、それをおあけになつてはいけませんでございます」

お吉は神尾主膳の前に立ち塞がつて、その手を抑えようとしました。

ここにいう大中寺七不思議の一つ「開かずの雪隠せつゐん」というのは、昔、佐竹の太郎が皆川山城守に攻められて、この寺へ逃げ込んで住職に救いを求めたが、住職が不在で留守の者が、これを聞き入れなかった。佐竹はその無情を憤いつて、乗つて来た馬の首を寺の井戸の中に斬り落し、自分は大平山の上にのぼつて自殺して果てた。その後、佐竹の奥方が夫君はこの寺に隠れてゐるものと信じて、密ひそかにたずねて来て見ると、右の始末で敢あえなき最期さいごを遂げてしまったということが明瞭になると、そのままこの雪隠の中へ入つて自害を遂げてしまった。その後、どうもこの雪隠に怨霊おんりょうが残つてならぬ。何かと祟たたりがあつて不祥のあ

まり、錠を卸して人の出入りを禁ずること数百年。よつて「開かずの雪隠」の名で今も大中寺七不思議の一つに残っている。それ以来、何人もその禁を犯したものがななんびとい——それを今、神尾主膳が、故意か間違いか、手をかけて引開けようとしている有様だから、お吉の驚いたのも無理がありません。

「殿様、御存じでもございましょうが、これは開かずの雪隠と申しまして、これへお入りになると祟りがございますから、幾百年の間も、こうして錠を卸しておくのでございます、あちらへ御案内致しますから」

お吉が立ち塞がつて、主膳の手をとつて外に案内をしようとする、それをふりきつた主膳が、

「知っている、知っている、祟りを怖れる人には開かずの雪隠、祟りを怖れぬ人にはあけっぱなし……」

知つて無理を通そうとするから、お吉はこれこそ酒のせいと初めて気がつきました。

「殿様、そういうことをあそばすものではございませぬ、佐竹様の奥方がお恨みになりますよ」

「うむ、佐竹の奥方が恨む、その奥方の怨霊とやらが残つてゐるなら、こんなところに閉じ籠めておいてはなお悪い、明け開いて綺麗に済度してやるがよろしい。お吉、邪魔をするな」

神尾は、力を極めてお吉を押しつけようとする。お吉は一生懸命でその禁制を護ろうとする。そこで、ほとんど二人が組打ちの有様です。こうなるとまさしく神尾の怖るべき酒乱が兆して来たもので、その兇暴な力が溢れ出すと、お吉も禁制を破らせては済まないという奉公心も手伝つて、なお一生懸命に支えようと、提灯はハネ飛ばされて闇となり、闇のうちに組んずほぐ

れつの体^{てい}。

「誰か来て下さい」

お吉が叫びを立てたその口を、神尾はしっかりと押えてしまいました。

二十七

神尾主膳はその翌日、頭痛で頭が上がりませんでした。終日小坊主の介抱を受けていたが、こういう時に、早速見舞に出てくるはずの門番の又六の女房のお吉が出て来ません。

酔いはもうさめてしまっているが、従来、酔いに次ぐに酔いを以てして、酔いからさめた時の悔恨を医する例になつていたのが、この時にかぎつてそれをする術^{すべ}がないものですから、し

たがつて、今までに味わわなかつた悔恨の苦痛が、酔いのさめると共に、めぐり来るのを如何いかんともすることができないらしい。夕方になると、お吉が見舞に來ないで、又六がやつて來ました。

「殿様、お加減がお悪いそうです、どんなでございます」

「ああ、又六か」

「かあ、あ、奴も、頭が痛いなんぞといつて、今朝から寢込んでしまいました」

「お吉も頭が痛い？」

「どうもお天気具合が悪いせいでございましょうよ」

主膳はこの時氣の毒だという感じがしました。せつかく、十分の好意を以てもて、なしてくれたお吉の好意を蹂躪じゅうりふんして、枕の上らないようにしてしまつた昨夜の罪。それをお天気具合に歸き

している又六の無邪氣。それを思うと主膳は、かわいそうだとも済まないとも、慚^はじ入るような気分になつたのは、主膳としては珍しいことですが、これはむしろ主膳そのものの本性で、いつもそういう悔恨の時に、良心を酔わせる材料がないせい、かも知れません。

「お吉も病^やみ出したか、それはかわいそうだなあ」

「なあーに、たいしたことはございせんよ、根ががんじょうな奴ですから」

又六は、昨夜、主膳が酒を飲んだことを知らないらしい。お吉が、それを又六には話していないらしい。してみれば無論、開^あかずの雪隠^{せついん}以後の、乱暴を働いたことも、いつさい告げ口がましいことをしないから、又六は仕事から帰つて早々、ただ病氣だと信じて、主膳を見舞に來たのみであることは紛^{まご}うべくも

ない。

「時候のせい、かも知れない、大事にしてやつてくれ」

「有難うございます……それからあの、殿様、ただいま、お客様が、わたしン処^{とこ}まで、おいでなすつたでございます」

「ナニ、客が？」

「エエ、殿様にお目にかかりたいんだが、こちらへ伺つては少々都合が悪いから、わたしン処^{とこ}でお目にかかりたいって、殿様に申し上げてくれと頼まれて参りました」

「うむ、それは誰だ」

「見慣れない旅のお方でございます、あの、お名前は百蔵さんとかおっしゃいました」

「うむ、が、ん、り、き、か」

主膳は寝ながら、向き直つて天井をながめ、ホツと息をつき

ました。

憎い奴、が、んり、きの百蔵。あのロクでなしが来なければ、こんなことはなかったのだ。ただ隠居のところから微酔ほろよい機嫌で出て来た分には、こんなにまではならなかったのだ。あいつが途中でいやに氣を持たせてそのかしたために、お吉のところ
で毒氣が廻つてしまったのだ。それに心を乱されたのはこつちの落度といわばいえ、あのロクでなしが、わざわざこのところを突留めて出向いて来たのは、そもそもこの神尾を、何かのダシに遣つかおうとの魂胆でなければ何だ。癪しやくにさわる小悪党め、憎むには足らない奴だが、見たくもない。主膳はこう思つて、が、んり、きの百蔵という奴が癪にさわつてたまらないから、

「会えない、当分会えないから帰れといつてくれ」

主膳は、又六に向つて、素氣そっけなくいいました。又六は、とり

つく島がないから、

「はい」

といって、腰を浮かすだけです。

又六が帰ると、行燈あんどんを点ともして来た小坊主の面かおを、主膳はすごい眼をして睨にらみつけたから、小坊主が怯おびえました。

「あのな、お前、用が済んだら門番のところまで頼まれてくれ。お吉が病気になつたそうだが、加減はどうか、悪くなければ、お吉にちよつと来てくれるようにいつてくれ」

「畏かしこまりました」

小坊主はおびえながら、承知して行つてしまいます。

しかし、暫く待つてもお吉はやつて参りません。主膳はその時焦じれてもみましたが、またかわいそうだとも思いました。しかしました、来なければ来ないように言いわけがありそうなもの

を、小坊主はその返事をすら齎もたらさない。忘れたのか、ズルけたのか。

その時分、庭で、けたたましい人の声。

「え、油坂で転んだ？ それは誰だエ。気をつけなくちやいけねえ。エ、誰が転んだのだエ？」

「又六さんが転んだんですよ」

「エ、又六がかい。何たらそそつかしいことだ、慣れていくせに」

噪さわぎ立てた問題は、単に、又六が油坂で転んだというだけのこと。

主膳は、そこでまたカツとしました。油坂は転んではならなるところ。そこは、やはり大中寺七不思議の一つ。

本堂から学寮への通路に当る油坂。昔は、そこを廊下で通かよつ

ていた。いつの頃か、学寮に篤学な雛僧すうそうがあつて、好学の念やみ難く、夜な夜な同僚のねしずまるを待つて、ひそかに本尊の油を盗んで来て、それをわが机の上に点ともして書を学んだ。本尊の油の減りかげんが著いしいので、早くも番僧の問題となつた。これは必定ひつじょう、狐狸のいたずらに紛れもない、以後の見せしめに懲こらしてくれんと、ある夜更けて、一三の番僧が、棒を構えてこの廊下に待受けていた。今宵も例によつて人定まるを待ち、本尊の油を盗んで、この廊下を戻る篤学の雛僧すうそう。それとは知らぬ番僧どもは、有無うむもいわず、叩き伏せ叩きのめしてしまふと、脆もろくも敢あえなき最期さいごを遂げた。年経る狐狸たぐいの類にやあらん、正体見届けんと燈ともしをさしつけて見ればこれは意外、日頃、同学の間に誉れ高き篤学の雛僧であつたので、下手人らは青くなつて怖れ、かつ哀しんだけれども、もう如何いかんともする由がない。その

後、この廊下には雛僧のこぼした油の痕が、拭うても拭うても生々しく、その油に^{すべ}つて倒れたほどの人が、やがて死ぬ。幾多の人命がそうして、油のために奪われたので、寺では怖れて、廊下をこぼつて石段に換えてしまった。その石段を油坂というのであつて、ここに住むほどの人で、その因縁^{いんねん}を知らぬというはないはず。おぞましくも今、門番の又六がその因縁つきの油坂で転んだという。時も時で、主膳はいやな氣持がして、またいらいらとしてきました。

それだけで、又六からも、お吉からも、小坊主からも、なんとも音沙汰^{おとさた}がないのに、夜はようやく更けてゆき、主膳はいよいよ眼が冴^さえかえつて眠ることができません。

まよなかとおぼしい時分に、障子と廊下をへだてた雨戸がホトホトと鳴る。

「神尾の殿様」

呼ぶ声で、主膳がハツと驚かされる。空耳そらみみではなかったかと疑いながら、音のした方へ眼をつけて、

「誰じゃ」

「殿様、百蔵でございます。ちよつとここをおあけなすつて」
図々しい奴、しつこい奴、会いたくもない奴。しかし、こうして寝込みを襲われてみれば、主膳もだまつてはおられない。

「何しに來た」

「殿様、お迎えに上りました。といいましても今晚のことではございません、どのみち、殿様に再び世に出ていただくかなければならない時節になりましたから、そのお知らせかたがた……ちよつと、ここをおあけなすつていただけますまいか」

房州の洲崎^{すのさき}で船の建造に一心を打込んでいた駒井甚三郎――

その船は、いつぞや柳橋の船宿へ、そのころ日本唯一の西洋型船大工といわれた豆州戸田^{ずしゅうへだ}の上田寅吉を招いて相談した通り、シコナと千代田型を参考にして、これに駒井自身の意匠を加えた西洋型。長さ十七間余、幅は二間半、馬力は六十。仕事は連れて来た寅吉の弟子二人と、附近の漁師の若い者が手伝う。

終日、工事の監督に身を委ね^{ゆだ}ていた駒井能登守――ではない、もう疾^{とう}の昔に殿様の籍を抜かれた駒井甚三郎。夜は例によつて遠見の番所の一室に籠^{こも}つて、動力の研究に耽^{ふけ}っている。

八畳と六畳の二間。六畳の方の一間が南に向いて、窓を推^おしさえすれば海をながめることができるようになってゐる。床の

間に三挺の鉄砲、刀架に刀、脇差、柱にかかっている外套がいうの着替、一隅には測量器械の類。机腰掛に陣取っている駒井甚三郎の髪を分けたハイカラな姿が、好んで用うる白くて光の強い西洋蠟燭の光とよくうつり合っていることも、以前に変わりません。

駒井甚三郎は、いつもするように研究に頭が熱してくると、手をさしのべて、窓を推おし、海の風に疲れた頭を吹かせる。

番所の目の下は海で、この洲崎の鼻から見ると、内海と外洋そとうみの二つの海を見ることができ。風凧なぎたる日、遠く外洋の方

をながめると、物凄ものき一条の潮が渦巻みき流れて伊豆の方へ走る。

漁師がそれを「潮しおの路みち」と名づけて畏おそれる。外そとの洋うみで非業ひごうの死

を遂げた幾多の亡霊が、この世の人に会いたさに、はるばると

波路をたどってここまで来ると、右の「潮の路」が行手かみでを遮さへつ

て、ここより内へは一寸も入れない。さりとて元の大洋へ戻す

こともようしない。その意地悪い抑留を蒙^{こうむ}つた亡霊共は、この洲崎のほとりに集まつて、昼は消えつ夜は燃え出して、港へ帰る船でも見つけようものならば、恨めしい声を出して、それを呼びとめるから、海に慣れた船頭漁師もおぞけをふるつて、一斉に櫓^ろを急がせて逃げて帰るといふ話。

そのころの最新知識者であり、科学者である駒井甚三郎が、今宵はその亡霊に悩まされているというのは不思議なことです。駒井は今日このごろ頭が重く、何かの憂いに堪^かゆることができない。憂いが悲しみとなつて、心がしきりに沈んで行くのに堪^かえることができない。窓を推して見ると、亡霊の海波が悲愁の色を含んで、層々として来り迫るもののようです。潮流は地の理に従つて流るべき方向へ流れているに過ぎないし、詩人でない駒井は、「そぞろに覚^{さうぼうばんこ}ゆ蒼茫^{そうぼうばんこ}_こ^{ばんこ}_この意、遠く荒煙落日の間^{かん}より

きた
来る」と歌うことも知らないから、

「おれは今、何を憂えているのだろう、何が今のわが身にとつて、この憂いの心をもたらす所以ゆえんとなっているのだ、わからない」

人間と交渉を断つて、科学と建造に他目わきめもふらぬ今の生涯には、過去は知らないが、少なくとも今の生涯には、自分として多くの満足を見出せばとて、悔いを残してはいないはずだ。悔いのないところに憂いのあるべきはずはなからう。今、不意にこうして骨髓をゆすりはじめた憂愁の心は、その出づるところがわからない。

ただ一つ、ここへ来て以来、時あつてか駒井の心を憂えしむるものは、最初につれて来た船大工の清吉の死があるばかりだ。無口で朴直ぼくちよくなあの男、寝食を共にしていたあの男の行方ゆくえが、今

以て不明である——女輕業のお角という女を平沙ひらさの浦うらから救い出して、ここの生活に一点の色彩を加え出したと同時に、清吉の行方が不明になった。

その事が、時あつて駒井甚三郎の心を、いたく曇らすのだが、今宵の淋しさはそれとはまた違う。

人間のたまらない淋しい心は、その抛よるところから切り離された瞬間に起る。その魂が暫し足場を失つて、無限の空間へ抛ほうり出された時に起る悲鳴が、即ち淋しい心である。よしそれほどでないにしても、憂悶は詩人のことで、悔恨は求道者ぐどうしやの段階で、現実と未来に執着の強い科学者が、瞬間に起伏する感情の波に揺ゆぶられるのは恥辱である。

駒井甚三郎は、自覚しないうちに、そういうふう to 感情を輕蔑したがる癖がないとは言えない。今、自分の心のうちに起つ

ている骨髓に徹る淋しい心。その湧いて出づるところをたずねて茫然として何の当りもつかない。地震と海嘯つなみは人間に予告を与えずして来るが、ただ人間がその予告を覚知するまでに進歩していない分のことで、地殻の欠陥がおのずから、地の表面へそういう結果をもたらすに過ぎない、といったように、駒井甚三郎は、おのずから湧き起った心をよ、そこからながめて、批判の態度を取ろうとする。

心の屈托を医するためには、駒井はいつも遠く深く海をながめるのを例とする。海をながめているうちに、この人の頭に湧き起る感情は、未来と前途というところから与えられる爽快な気分です。それと共に、現在の「船を造る」という仕事は、勢いづけられて、すべての過去と現在とを圧倒してしまふのを常とする。わが手で、わが船を造り出して、この涯かぎりなき大洋を

横ぎつて、まだ知られざる国に渡り、その風土と文物とを究め尽したいという欲望。今や国内の人が、その封土ほうどの間に相争かんつてゐる時に、この封土以外の無限の広大な天地に、無究の努力を揮ふるうことの愉快。それを想うと駒井は、自分というものに翼を与えて、天空の間を舞い、海闊かいかつの間を踊り、過去と境遇の立場を、すっかり振り落してしまふ。

そこでこの人は、物の力の絶大なることに驚喜する。物の力を極度まで利用することを知つてゐる西洋人の脳の力に驚嘆する。西洋文明の粹を知ること漸く深くなつて、好学の念がいよいよ強くなる。学べば学ぶほどに、彼我ひがの文明の相違の著しいことがわかる。将来の文明は機械の文明であつて、当分の日本の仕事は、まず以てその機械の文明を吸い取ることだ。これより以上の急務はない——そうしてこの自分の「船を造る」とい

う仕事が一歩一歩とその理想に近づくことにおいて、今の日本の誰もが気のついていない仕事、気がついていても進んでこれに着手している人のない仕事、それがただ自分の手によつてなされつつあるという自負心が、どのくらい駒井の心を高めるか知れない。

しかし、今宵だけは、どうしてもその前途と未来の空想に浸りきつて、我を忘れることができない。

「^{キンツイ}金椎、金椎」

駒井は何と思つたか、珍しい人の名を呼んでみましたが、返事がないので気がついた様子で、「そうか」と苦笑いしながら立つて、廊下伝いに足を運んで行きました。

事務室とも、小使室ともいふべき板張りの床、同じように机、腰掛で蠟燭ろうそくの火に向い、しきりに書を読んでいる少年。それは

頭を芥子坊主^{けしぼうず}にして支那服を着ている。駒井が扉^{ドア}をあけて入つて来ても、この少年はいっこう驚かず、うしろをも向かずに、机に向つて書を読み耽^{ふけ}っている。

「金椎^{キンツイ}」

後ろから肩を叩いて名を呼んだので、はじめて少年はびつくりして、駒井の面^{おもて}を見上げました。

駒井は、相変らずやっているな、という表情で少年に向い、有合わせのペンを取つて紙片に「紅茶」と記^{しる}すと、少年は頷^{うなず}いて、今まで繙^{ひもと}いていた一巻の冊子をポケットの中に納めながら、椅子を立ち上ります。

その時に、駒井は同じ紙の一端にペンを走らせて、「ソノ本ヲ少シ貸シナサイ」——ポケットの中に納めかけた一巻の書を、少年はぜひなく引き出して駒井の前に提出すると、それを受取つ

た駒井は、

「有難う」

これは言葉で挨拶する。少年はそのまま勝手元へ行つてしま
い、同時に駒井もその部屋を立つて自分の部屋へ歸つて、少年
の手から借りて来た書物を二三頁読み返していると、以前の少
年が温かい紅茶を捧げてやつて来ました。

「君もそこへ坐り給え」

これも同じく口でいつて、椅子の一つを少年に指さし示すと、
卓の上に紅茶をさしおいた少年は、心得て椅子に腰を卸しまし
た。つまり二人はここであいたいざ相對坐の形となりました。

「君も一つ」

紅茶の一杯を少年に与えて、自分はその一杯をすす啜りながら、
この少年を相手に閑談を試みんとする。少年は、すすめられる

ままに推戴おしいただいて、その紅茶の一杯に口を触れ、神妙に主人の眼を見てみると、駒井甚三郎は以前の一巻の書物を取り出して、左の片手に持ち、右の手は鉛筆を取って卓の上のノートに置く、少年はその鉛筆に向つて熱心に眼を注ぎます。その時、駒井は鉛筆をノートの上に走らせて、

「キリスト基督ハ何国どこノ人？」

と書き記すと少年は眼をすまして、

「ユダヤいう国、ベツレヘムいうところでお生れになりました」

これは訛なまりのある日本語です。駒井は続いて紙の上に、

「生レタノハ何年ホド昔」

「千八百——年、西洋の国では、その年が年号の初めです」

「ソレデハ基督ハ西洋ノ王様カ」

「いいえ」

「ソレデハ猶太^{ユダヤ}ノ王様カ」

「いいえ」

「ソレデハ基督ハ何者ノ子ダ」

「大工さんの子であります」

「大工ノ子。ソレデハ西洋デハ、大工ノ子ノ生レタ年ヲ、年号ノ初メニスルノカ」

「左様でございます」

「基督トイウ人ハ、ソ^えンナニ豪イ大工デアッタノカ」

「大工さんの子としてお生れになりましたけれども、基督様は救世主でございました、神様の一人子でございました」

「神様ノ一人子トハ？」

「神様が人間の罪をお憐^{あわれ}みになつて、その一人子を天からお降^{くだ}しになつて、人間の罪の贖^{あがな}いをなされました。それ故、基督様

は十字架につけられて、人間の罪の代りに殺されておしまいになりました救世主でございます。この救世主によらなければ、人間の罪は救われませぬ。救世主のお生れになった年ですから、この世の年号の初めとするのがあたりまえでございます」

駒井が鉛筆で問うことを、少年は口で明瞭に答えるところを見ると、この少年の耳は用を為さず、口だけが自由を有する少年、つまり唾おしではないが、聾つんぼでありました。

駒井は次に何を問わんかとして、鉛筆を控えて、その問い方に窮したのです。そのころ第一流の新知識としての駒井が、西洋諸国がことごとく耶蘇ヤソ紀元を用いていることを、事新しくこの少年に向つて問わねばならぬ必要はない。といって、知つているようで知らないのは自分の知識である。いちいち明瞭に答えられてみると、閑談のつもりで相手にしていた相手から、か

えつて自分が苦しめられるような結果になる——つまり、赫々かくかくたる功業もなく、帝王の家にも生れなかった、大工の子の生れた時から、西洋の歴史が始まるという、この単純な事実の解釈が、どうしても駒井の頭で消化しきれなくなつたのです。

駒井甚三郎が金椎キンツイを手許に置くようになった因縁をいえば、過ぐる月、駒井はひとりで鳥銃になを荷つて、房州の山々をめぐり、はしなく清澄の裏山へ出て、そこで一羽の雉きじを撃ちとめたところから、寺の坊主の怒りを買ひ、烈しく責められてもてあまして、いるところへ、山下さんかの鴨川出身の大六の主人が参詣に来合せて、駒井のために謝罪してことなくすんで後、駒井は大六の持船天神丸に同乗して、小湊こみなとからこちらへ送り届けられたことがあります。その時の船の中で、はしなく眼に留まつたのが、右の支那少年の金椎でありました。

大六というのは、房州鴨川の町の出身で、最初日本橋富沢町の大又という質屋へ奉公し、後、日本橋新泉町に一本立ちの質屋を出して大黒屋六兵衛と名乗り、ようやく発展して西洋織物生糸貿易にまで手を延ばし、ついに三井、三野村、井善、大六と並び称せらるるほどの豪商となり、文久三年、伊藤俊輔、井上聞多、井上勝、山尾庸三らの洋行には、この人の力与つて多きに居るといふ話です。

大六は、当時失意の境遇にあるこの人材、駒井能登守を自分の顧問に引きつけたならば、大した手柄だと思いましたがけれど、別に志すところのある駒井はその話には乗らずに、同じ船の一隅でマドロスの服を着けて、帆柱の蔭で福音書ふくいんしょを繙ひもといている異様な支那少年の挙動に目を留めました。物を問いかけてみて、この少年が聾つんぼであることを知り、筆談によつて、その名の「金椎キンツイ」

であることを知り、なお筆談を進めて行つて、ウィリアム先生と
いうのから受洗じゅせんした耶蘇ヤソの信者であることを知り、本来の支那
語と、多少の英語と日本語とを解することを知り、それを奇と
するの念から、大六に請こうて貰い受け、自分の助手として使つ
ているわけです。

駒井と同居することになつて後のこの少年の挙動は、船の時
と同じことで、命ぜられた仕事の合間には、手ずれきつた一卷
の福音書を離すことなく、繰り返し繰り返ししている。日本の
武士が刀剣に愛着すると同じように、この一卷の福音書に打込
んでゐる少年の挙動を、駒井は笑いながら見ていました。

「私が耶蘇になつたといつて、私を憎んで殺そうとしましたか
ら、私、海を泳いで日本の船へ逃げ込んで、ようやく助かりま
した、その時、海の水で本がこの通りいたんでしまいました」

手ずれきつた革表紙を繙いて、頁のしみだらけになつたところを駒井に見せて金権が説明する。

明けても暮れても一卷の福音書にうちこんでいる体ていを見て、駒井はそぞろに微笑を禁ずることができなかつたけれども、その微笑は冷笑ではありません。

別に、駒井自身は、科学者としての立派な見識を持つている。その見識によつて迷信屋を憐れむだけの雅量をも備えているつもりである。あらゆる信心は、みな迷信の一種に過ぎないものとの觀察を持つている。法華經を読めといわれて読んでみたこともあるし、耶蘇の聖書も、その以前、一通りは頁を翻ひるえして見たこともあるにはあるが、全然、空想と誇張の産物で、現実を救うに夢を以てするようなもの——要するに、過去と無智とが産んだ正直な空想の産物と見ておりました。

物と力を極度に利用する西洋の學問に觸れてから、一層その念が強くなつて、神仏の信仰は文明と共に消滅すべきもの、消滅すべからざるまでも識者の問題にはならないはずのものと信じていたところ、その西洋諸国が一齊に、耶蘇というエタイの知れぬ神様の生誕を紀元とするという矛盾に、なんとなく、足許から鳥が立つた思ひです。

駒井甚三郎が、耶蘇の教えを、もう少しまじめに研究してみようとの心を起したのは、この時からはじまります。

翌朝、例によつて金椎の給仕で——この少年は支那料理のほかに、多少西洋料理の心得もあります——あさげ朝餉の膳に向うと、造船小屋の方でしきりに犬の吠える声。造船小屋には常に二頭の犬を飼つて置いて、駒井は警戒と遊獵との用にあてているが、滅多にはない外来客がある時は、まずこの犬が吠え出しますか

ら、隔たつた番所にて、駒井は犬の声によつてまず、珍客のこの里へ訪れたことを知るのであります。

今日は早朝から珍客、箸を取りながら窓の外をながめると、激しく吠えていた犬の声が、急に弱音を立てて逃避するもののように聞えます。最初には珍客に向つての警戒と威嚇の調子で吠えていたのが、急に恐怖の調子に變つてきましたから、駒井は「敵が来たな」と思いました。敵というのは自分に対する敵ではない、犬共にとつての強敵が現われたのだということ、駒井は経験の上から覺つて、直ちに他郷から彼等の同類の強敵が、ここへ入り込んだのだなと、箸を上げながら外を見ると、まもなく、二頭の飼犬が、後になり先になり、或いは吠え、或いは唸り、見慣れない一頭の巨犬おおいぬを遠巻きにして、こちらへ進んで来るのを見受けます。

食事中、駒井はこの窓外の物々しい風景を興味を以てなめました。見慣れない一頭の犬は、ほとんど小牛を見るほどに大きく、^{たくま}逞しく、真黒な犬で、急ぎ足で、まさしく自分たちの番所の方へ進んで来るのに、二頭の番犬は、それを、ひたすらに恐怖しながらも、しかも自分の職責を^{おこた}怠るまいと、引きずられて来る有様です。

「ははあ、大きな犬がやって来たな」

件の大犬は、^{くだん}ほとんど駒井の見ている窓下まで近づいて来た時に、駒井はその犬の首に何物かが巻きついていることを知るとともに、その犬がどこかで見たことのある……と思った瞬間に叫びました。

「ムク」

おお、これはムクだ。甲府勤番支配であつた時、わすれもせ

ぬお君の愛犬。その人にも、この犬にも、無限の思い出がなければならぬ。それと知るや、駒井は箸を捨てて立ち上りました。

「ムク」

犬は駒井の姿を見、その声を聞くと共に、勇みをなして飛んで来る。駒井は縁先へ出てそれを迎える。

「ムク、お前は どうしてここへ来た」

あやしみ、喜びながらもまず気になるのは、その首に巻きつけられた、五寸ほどに切った竹筒を、麻の縄で両方からムクの首に結ゆわいつけてあるもの。駒井は、その竹筒を外して見ると、中に一通の書状、手は女で文言もんごんの意味は、

「駒井能登守様。」

殿様は今、どちらにおいでなさるか存じませんが、私はお君

様に代つて、殿様に悲しいお便りを申し上げなければなりません。

この十三日に、お君様は亡くなりました。お君様は亡くなりましたけれども、若様はお丈夫でございます。お君様のくれぐれの遺言もございますから、このことをどうぞして殿様に一言お知らせを致したいと苦心致しましたが、私共の手ではどうしてもわかりません。ふと思いつきましたのはこのムクのことでございます。ムクは強い犬で、りこうな犬ですから、ムクを放してやれば、殿様にこのことをお伝えすることができるかと思ひまして、このように取計らいましたのは、本所相生町の御老女様の屋敷にいる松でございます。

若様のお名は能登守の一字を戴いて『登』様と仮りに私が申し上げていることをお許し下さいませ——」

その手紙を持ったままで駒井甚三郎は、自分の部屋へ入つてしまいました。そうして、寝台の上に身を横たえて、頭から毛布をかぶつて枕を上げません。程経て金椎が、その扉を押してみたけれどもあかない、叩いてみたけれども返事がありません。

常に、ことわられていることは、研究に熱心の際は外物のさわりがある。扉に錠を卸した時には、軽く叩いてみて返事がなければ入るなど、こう命ぜられてあるから、金椎はその錠を守つて引返しました。

引返して見ると、使命を帯びて来た巨犬は、神妙に以前のことろに控えている。金椎は心得て、それに飲物と食物とを与えました。

その日一日、ついに駒井甚三郎はその部屋を出でませんでした。こういうことは必ずしも例のないことではない。不眠不休

で働いた揚句、二日二晩も寝通したことさえ以前にあるのだから、金椎はそれを妨げに行こうともしなかったが、夜に入つては、さすがに不安でした。

以前の巨犬は、何か返事の使命を待つものの如く、また使命の重きに悩むものの如く、首垂うなだれて、おとなしく控えている。

「ワンワン、こちらへおいで」

金椎は犬を導いて、自分の室の一隅に入れ、犬と食事を共にし、祈りを共にして、その夜の眠りに就きました。

翌朝、例刻にめざめて、例の通りまず主人の部屋を訪れて見ると、昨日は固く鎖とぎされた扉ドアが、今日は押せばすぐにあきました。金椎は、

「お早うございます」

室内に入つて見ると、机にも、腰掛にも主人の姿を見ず、寝

台の上はもぬけの殻からで、人の影はありません。机の上を見ると、常用の大型のノートに一枚の紙が物いいたげにハサまれているのを見る。金椎は心得て、その紙片を取つて見ると、主人の筆でサラサラと、

「金椎ヨ、余ハ急ニ感ズルコトアリ、今朝ヨリ暫時ノ旅行ヲ試ミントス。行先ハ江戸、滞留及ビ往復ノ日数ヲ加ヘテ多分十日以内ナルベシ。留守中ノ事ヨロシク頼ム。昨日、使ニ来リシ犬ハ、最モ愛スベキ忠犬ナレバ、ヨクイタハリ、カヘルトモ、留マルトモ、犬ノ意志ニ任セテサシツカヘナシ。

二十一日午前一時

駒井」

それを読んで金椎は、まだ充分の納得なっとくがゆかないながら、ひ

とまず安心しました。そこで、紙片をしまい、ノートの開かれたところを見ると、まだインキのあとの生々しい文字が目につる。この置手紙と前後して、主人が筆を走らせたのに相違ない。

「死ハ万事ノ終リカ。

彼ノ女ノ罪ハ祖先ノ罪ナリ。

駒井ノ家ノ系統ヲタヅヌルニ、清和源氏ニ出ヅルモノノ如シ——然レドモ——彼ノ女ニ対スル余ノ愛ガ彼ノ女ヲ殺シ、彼ノ女ノ愛ガマタ余ノ生涯ヲ一変セシメタリトヤイハム。

何故ニ余ハ最後マデ彼ノ女ヲ愛シ能ハザリシカ。彼ノ女ハ何故ニ最後マデ余ニ愛セラレザリシカ。

金椎ノ談ニヨレバ、救世主ハ大工ノ子ニシテ——耶蘇ノ教フルトコロニヨレバ、娼婦、税吏、異邦人、姦淫セル女等ガ却

ツテ、驕慢ナル権者、偽者ナル智者、学者ヨリ光榮アル壇上ニ置カルモノノ如シ。

嗚呼、彼ノ女ノ罪ハ祖先ノ罪ニアラズ、彼ノ女ノ死ハ彼ノ女ノ罪ニアラズ——彼ノ女ヲ殺シタルハ余ナリ、駒井能登守ナリ。

余ハ惑乱ス」

記号と、数量と、線と、画とで、書き充たされていたノートが、この頁から一変した感傷の文字で、しどろもどろに塗られていました。

二十九

お濠端^{ほりばた}の柳の木に凭^{もた}れた宇津木兵馬は、どのぐらいの間、何

事を考えていたか自分でもわからないが、突然大きな声をして、
「おれは、もう駄目だ」

と叫びました。

その声に驚かされた通行人が、たちどまつて提灯をさしつけ、
ちようちん

「何でしょう」

「たしかお濠端で、人の声がしましたぜ」

「身投げではありますまいか」

遠くから提灯をさしつけ、

「モシモシ」

返事がありません。

「そこに誰かいるんですか」

なお返事がないので、怖る怖る近寄つて来て、
おそ

「モシ、短気なことをなすつちやいけませんぜ」

「馬鹿！」

兵馬が、一喝いつかつしたので、その二人は、わっ！ とひっくり返つて逃げてしまいました。

「身投げと間違えられた」

兵馬は苦笑いしながら四辺あたりを見廻すと、四辺は真暗で、たしかに自分は濠端に立つて呻うめいている。

「なるほど、この腑甲斐ふがいない自分というものの持つて行き場は、身投げあたりが相当だろう、腹を切るという代物しろものではない」
自分で自分を嘲あざわらっているところへ、鍋焼うどんが来る。

「おい、うどん屋」

「はい、はい」

兵馬は、うどん屋を呼び留めて、熱いうどんを二杯食べて、銭ほうを抛り出し、

「ここは、どこだ」

「へえ、ここはお濠端ほりばたでございます」

「お濠端はわかつているが、お濠端のどこだ」

「へえ、ワラ店だの河岸かしでございます」

「ワラ店の河岸？」

「エエ、左様でございます、どうも有難うございました」

う、どん、屋が逃げるように行つてしまったのは、何か兵馬の権幕におそれを抱いたものと見えます。

「ところで、今は何時なんときだ」

兵馬は、それを聞きはぐつて、その濠端について、ずんずんかみてと上手へ歩き出しました。かなり歩いても濠端には相違ない。

「やい、気をつけやがれ」

であいがしら出合頭に突当ろうとしたのは、やはり二人づれの酔どれ、ど

こその部屋の渡り仲間と見える。よくない相手にとつつかまつた兵馬は、

「馬鹿め」

その利腕ききうで取つて、やにわに濠の中へほうり込んで、さつと走り出しました。あとで、仲間どもが天地のひっくり返るほど喚わめき出したのも聞捨てに――

なお一目散いちもくさんに濠端を急いで行くと往来止め。

「ちえッ」

行き詰つて、むしろ、この往来止めの制札を打砕いて、掘りっぱなしの溝どろの中を泳いで、溝鼠どいねずみのように向うへ這はい上つたら痛快だろう、と思っただけで、往来止めの制札の横の方に置き捨てられた大きな切石の一端に、腰を卸してしまふ。いいあんばいに後ろは背をもたせるように出来ている柳の樹。兵馬は、そ

れに凭よりかかろうとすると、ヒヤリと頭を撫でるものがある。
手をあげてさぐると、いやに生温なまぬるいものが指先にさわる。

「あッ」

兵馬は手をはなして、よく見るとまさしく首くくりだ。

「ええい！」

再び手を出して、そのブラ下がっている足に触れてみると、
生温いと思ったのは最初の瞬間、冷えきって絶命している。

「ちえッ」

さきには自分が身投げと間違えられる、今は首くくりに頭を
撫でられる、兵馬の腹はむしやくしやです。

廻り道をして、やはり一方の濠端を歩む。折々、拍子木と按
摩の笛が耳に入る。

「旦那、駕籠かごはいかが」

とある柳の木の下、これは辻待ちの駕籠屋ですから、喫驚びつくりするには当りません。

「旦那、いかがです、大門おおもんまでおともを致しやしよう、二朱やつて下さい、二朱」

それを、うるさい、と振切ろうとした兵馬が、考え直したと見えて立ちどまり、

「駕籠屋、駕籠屋」

「へえ」

「駕籠を持つて来い」

「へえ、畏かしこまりました」

担かつぎ出した四つ手駕籠。拾い物をしたように、二人の駕籠屋は大喜び。兵馬は何と思つてか、その駕籠に飛び乗ると、駕籠屋は威勢よく走り出したが、その行先を知らない。行先を知ら

ないで担ぐ奴も担ぐ奴、担がれる奴も担がれる奴。

しかし、駕籠屋は、もういっぱし心得ているつもりらしい。

「駕籠屋、駕籠屋」

暫くあつて中から言葉をかけた兵馬。

「相棒、旦那がお呼びにならあ」

「何でございます、旦那」

「お前たちは、何方どっちへこの駕籠を持って行くつもりじゃ」

「冗談じゃございません、先刻さつきお約束を致しました通り」

「まだ約束はしていない」

「御冗談をおっしゃらないように。日本橋並みで大門まで二朱は大勉強でございませう、旦那」

「それはお前たちのひとりぎめだ、わしは甲州へ行きたいのだ」
「え？」

「どうじゃ、甲州までこの駕籠はやつてもらえないか」

「いよいよ御冗談です、旦那」

「冗談ではない、ちと急ぎの用があつて、甲州の松里村といふところまで行きたいのじゃ」

「え、甲州の松里村ですつて？　のう相棒、それじゃあまた御相談を仕直さなくっちゃならねえ」

「お前たちが甲州まで続かなければ、甲州街道を行けるところまで走ってくれ、そこで宿駕籠しゆくかごに移るとしよう」

「なるほど、これから新宿を突走つっぱしつて、甲州街道を行けるだけ急しゅくげとおっしゃるんですか。ようございます。相棒、お客様は宿次しゅくじぎとおっしゃる」

「合点がってんだ」

「時に旦那、そうなりますという、御如才ごじょさいもございますまい

がねえ……」

「よしよし、大概のところは心得ているから安心してやれ」

そこで兵馬は、二朱銀を幾つか紙に包んで与える。

「旦那はわかつていらつしやらあ、急ごうぜ」

「どれ」

そこで、駕籠屋は棒鼻を向け直して、別の方向に走ること暫くあつて、

「旦那、茶飯ちやめしが参りましたから、ひとつ腹をこしらえて参りと
うございます」

夜店の茶飯屋で一人はあんかけ豆腐で茶飯をかき込む、一人は稲荷鮓いなりずしを腹いっぱい詰め込んで、

「さて、旦那、旦那も一ついかがでございます、茶飯にあんかけ豆腐、稲荷鮓——これから町を離れますと、こういうものが

ちよつとございませんぜ」

「要らない。さあお前たち、わしは少し腹工合が悪いから、途中、飲物も食物も取らないつもりだ、通しでやろうとも、宿次ぎでやろうとも、一切お前たちに任せるから、こちらから求めるまでは、一切わしには挨拶なしでやってくれ」

「よろしうございます、そのつもりで一番馬力をかけようぜ、相棒」

「合点だ」

駕籠^{かご}はまたもや走り出す。どうも揺れが以前よりは烈しいようです。

言われた通り、彼等はいっさい兵馬に挨拶なしで、兵馬もこれ以来注文なしで、ひたすら甲州街道を走るようです。

さてまた急に兵馬が、甲州松里村を名ざして急がせるように

なつたのはなぜか。その辺で敵の当りがついたのか。松里村に
めいさつ えりんじ
は名刹恵林寺があつて、そこは兵馬に有縁の地。

これは兵馬としては贅沢な旅行です。やむことを得ざる必要
ぜいたく
以外には、今まで馬駕籠に乗ったこともなし、乗るべき身分で
もなし、かえつて旅装かいがいしく草鞋がけか、或いは足駄が
けで、さつさと五里十里の道を苦としなかつたもの、それを今
は、大風おおふうに通し駕籠でなければ宿次ぎで、甲州へ急がせようと
する。

兵馬の目的には頓着なく、存外鷹揚な客と見たので、駕籠屋
おうよう
は勢いよく急がせる。そのうちに、前後でしきりに聞ゆる鶏犬
けいけん
の声。夜は白々と明け放れたものと見ゆる。やがて道筋が明る
しらじら
くなつて、行き交う人馬の音が繁くなる。まさしく朱引内しゅびきうちを離
れて、甲州街道の宿駅を走っているのだ。

よき程あつて、駕籠がとまる。駕籠屋は一息入れているのであろうが、注文通り、兵馬には一言の挨拶もなく、やがてまた、同じ駕籠を担ぎ出したところを見ると、問屋場といやばではなかつたらしい。

かなり正午まひるとも覺しい頃、駕籠はまたしても置き放されて、人の罵ののる声がかましい。駕籠屋どもは昼食に一膳飯へでも入つたのだらう。相変らず約束を守つて、兵馬には飲めとも食えともいわない。人の騒々しさから察すると、この辺は多分、府中の宿あたりだらう。おや、再びこの駕籠が動き出したところを見ると、駕籠屋どもは通しをやるつもりかな。甲州までには、小仏、笹子の両難所を控えて三十余里の道、ひととおりの瘦我慢やせがまんではやれまいに、ともかく、やるだけやらせてみる。

かくて、兵馬を載せた四つ手駕籠は、そのまま走り出す。

その日中^{ひなか}一日走り通したことを兵馬は覚えている。無論この間には立場^{たてばたてば}立場で多少の息は入れるが、彼等は一生懸命で通しをやっているものに相違ない。兵馬は飢えが迫ってきた、咽喉^{のど}がかわいてきたけれども、一言もそれを要求しない。日が暮れかかったと思う時分に、ただ一回お関所の調べを受けた。それは小仏の下^たの駒木野の関所であろう。それから後に兵馬は眠くなつた。

飢えもかわきもある程度で、駕籠に揺られていると幾分の快感が起る。それとも身心が疲労の末か、兵馬は眠くなり、小仏を越したと覚しい時分には、もう四辺^{あたり}は真暗で、事実上の深山幽谷へ駕籠をかつぎ込まれたもののようです。

疲労と快感で駕籠の中に眠っている兵馬。その眼前に、

「真蒼な面^{まつさお かお}」

「真蒼な面」

「真蒼な面」

「真蒼な面」

が後から後へと流れて行く。兵馬の眼前へ来て、その面が二つに分れて、左右へ流れて行く。それを見ると、昏昏こんこんとしていよいよ眠くなつて幽冥の境へ誘われる。

ハツと途切れたのは、駕籠屋が峠の道で物につまずいたのであろう。それからは兵馬の眼前に、

「悪女大姉」

「悪女大姉」

「悪女大姉」

「悪女大姉」

が、後から後へと流れて行く。やはり兵馬の眼前へ来て、その

文字が二つに流れ去る。真蒼まつさおな面と悪女大姉とが、白蠟のようにも、つれて火焰の如くに飛ぶ。その真蒼な面が、ある時は想像の机竜之助の如く、或る時は一撃に打たれて倒れた兄の文之丞の如く、悪女大姉は文字の如く、絵の如く、糸の如く、幻まぼろしの如く、消えては現われ、現われては消え、からみつき、ほぐれ出し、物に触れて駕籠が烈しく揺れるたびに、いったん途切れてまた現われる。

夜中のある時、駕籠があるところへ、ドツと置かれたと思うと、幻が消えて眼前に現われた大入道。ブン廻しで描いたような、まんまるい、直径六尺もあろう……という顔。オホホホホと笑って眠るが如く、笑うが如く、半眼でながめているのは慢心和尚の面。

通しであつたか、宿次ぎであつたか、それさえもわからず、よ

うやく甲斐国東山梨、松里村の名刹恵林寺めいざつえりんじの門前に着いた宇津木兵馬。

へとへとに疲れて、慢心和尚に面会を申し入れると、無事に入室を許されるには許されたが、

「何しにおじやつた」

例のブン廻しで書いたような真円まんまるい面おもてに、拳を入れて余りある大きな口、眠っているような細い目の中からチラリと白い光を見せられた時は、いい気持がしませんでした。

「実は……」

兵馬が何かいい出そうとすると、

「どうだい、宇津木、敵討商売かたきうちしょうばいは儲もうかるか」

「儲かりません」

ぜひなく兵馬もこう答えてしまいますと、

「儲からない？ 儲からない商売を、いつまでもやっている奴があるか」

「いって慢心和尚が居丈高いたけだかに叱ると兵馬は、

「それでも……」

「何がそれでもだ」

慢心和尚は頭からガミガミと怒鳴りつけて、

「何がそれでもだ、お前の面つらを見ると、いつでも敵討かたぎうちが丸出し

で、おれは昔から大嫌いなのだ、敵討というやつは全くおれの虫が好かない」

「いいえ、左様なわけではございませんが……」

「そういうわけでなければ女のことだろう。敵をたずねて歩く奴と、女の尻を追ひ廻す奴ほど、気の利きかない奴はないものじゃ」

「全くその通りでございます、全く私は腑甲斐のない、意気地

のない、氣の利かない奴の骨頂なのでございます……」

「何、何といった……腑甲斐のない、意氣地のない、氣の利かない奴の骨頂だと自分で知ったら、ナゼ早くくたばつてしまわないのだ、この娑婆しゃばふさげの馬鹿野郎」

と言つたかと思うと慢心和尚は、いきなり手で、兵馬の横面よこづらをピシヤリと打ちました。

「あッ！」

兵馬としては、その掌てのひらを避ければ避けられたのかも知れない。或いはまた避ける隙も、余裕もないほどに、和尚の手が早かつたのかも知れない。ともかく、ピシヤリと一つ打たれてしまいました。

「ざまを見ろ！」

「恐れ入りました」

「何が恐れ入った」

「何もかも、もう駄目です」

「何が駄目だ、この馬鹿野郎」

慢心和尚はヒドク怒っていると見えて、この悪罵と共に、三たび、拳を上げて、兵馬の首をピシヤリと打ちました。兵馬は脆くも打たれたままで、悄しおれ返っていると、立ちはだかった慢心和尚が、

「万能余りあつて一心足らずというのが貴様のことだ、馬鹿なら馬鹿で始末がいいが、なまじい腕の出来るつもりが癩にさわる、この猪口才ちよこざいめ」

といって慢心和尚は、続けさまに兵馬を打って、打って、打ち据すえました。

「恐れ入りました」

「恐れ入ることはないわい」

すこしの仮借かしやくもなく、打って打ち据えて、とうとう兵馬をそこへ打ち倒してしまいました。

「和尚なればこそ……」

打ち倒されながら兵馬が、やっとこれだけのことをいうと、慢心和尚は透すかさず、

「生意気千万、何が和尚なればこそだ、和尚なればこそどうしたのだ」

打ち倒された上を更に滅多打ち。兵馬の髪は乱れる、刀、脇差は飛ぶ。

「和尚なればこそ、このお慈悲……」

「ナニ、お慈悲だ？ もっと擲なぐりたいのか、この骨無しめが！」
といって、打ち倒した兵馬を突き飛ばすと、慢心和尚は足をあ

げて兵馬を蹴つて蹴りつけて、座敷の中を蹴ころがして、縁へ蹴落し、縁にひっかかっている兵馬を、地面の上へ蹴落してしましました。

三十

上野原の月見寺では、お喋り坊主しやべの弁信が、仏前の礼拝を済まして廊下を戻つて来ると、お針をしていた雪ちゃんが、

「弁信さん」

「え」

「お入りなさいな、お茶を入れますから」

「有難うございます」

そこで雪ちゃんは、縫物を片づけて、火鉢の鉄瓶に手を当て

てみて、炭をかき立てると、弁信はもうピタリと座敷へ着座を
してしまいました。

「茂ちゃんはいませんか」

お雪がいうと、

「いいえ、あの子はまた山遊びなんでございましょう」

と弁信が答える。お雪ちゃんは早くもお茶をいれて、お盆の上
へお煎餅せんべいを盛り上げて弁信の前へ出し、

「お煎餅を一つお上りなさいな」

「へえ、有難うございます、遠慮なくいただきますでございま
す」

弁信はおいしいだけで、お茶を吞みます。

「さあ」

お雪ちゃんは、お煎餅を二枚はさんで弁信の掌ての上にのせて

やり、

「甘いのがようござんすか、辛いのがお好きですか」

「ドチラでもよろしうございます、結構でございます、そうしておいて下されば、わたくしが自由に頂きますから」

「茂ちゃんも来るといいんですがね、呼んでみましょうか」

「いいえ、あの子は人間と遊ぶよりは、山で兎や蛇と遊ぶのが好きなんですから、ほうっておきましょう」

「そうですか」

お雪は弁信にお茶と煎餅を与えて、自分はまたお針仕事にとりかかると、

「お雪ちゃん、御精が出ますねえ」

「いいえ」

「何を縫っていらつしやるの」

「何でもありません、冬物の仕度を少しばかり……」

「そうですか、お手廻しがようございますねえ」

「急に思い立ったものですから」

「え、何を思い立ったのですか」

「弁信さん」

お雪は、ちよつと針の手を休めて、弁信の面をながめる。

「何でございます」

「あなたは、人の心持が前以てわかるんですつてね」

「何をおっしゃるのです、それはわかることもあれば、わからないこともありますよ。あたりまえでしょう。私は人様のよう
に、目でもって様子を見るのができませんから、勘でおおよ
そのところを察してみるのはです。それが当ることもあれば、当
らないこともあるじゃありませんか」

「ですけれども、弁信さん、あなたは人並みの目の見えない方より、ズット勘がいいんですね。その証拠には、たった今だつてそうですよ」

「たった今が、どうか致しましたか」

「今わたしが、急に思い立ったといつたでしょう、その時に、あなたは、え、何を思い立ったのですか、と聞き直しましたね、それが、わたしの胸へハツと響きましたよ」

「それは、どういうわけですか」

「いいえ、そのわけをあなたに聞いてみたいのですよ」

「私は、そう思ったから、そう聞いてみただけなんですが……」

「ね、弁信さん、わたしが急に思い立ったといつたのと、あなたが手廻しがようございますねといったのは、別々の心持でしたねえ」

「そうですね、今から冬物の仕度をなさるのはお手廻しのよい方で、急に思い立ったとおっしゃるのは調子が合わないようですから、何の気もなしに私は、何を思い立ったのですか、とお聞き申してみたのです」

「弁信さん、聞いて下さい、わたしは、こういうことを思い立っているんですよ。あのね、盲目めくらの先生を湯治とうじに連れて行つて上げたいと、そう思い立ったのが先で、それから冬物の仕度にとりかかりましたのです」

「え、あの先生を湯治にですって？」

「そうですよ」

「どこへですか、どこへ湯治にお連れなさるといいますか」

「それはずいぶん遠いところですから——」

「遠いところ——なるほど、この近辺には温泉というものは聞

きませんね」

「ええ、武蔵の国にも、甲斐かいの国にも、温泉らしい温泉はございません」

「そうです、その代り隣国の信濃しなのと相模さがみには、たくさんの温泉がございます」

「弁信さん、わたしは先生を、信州のお湯へ連れて行つて上げたいと思っていますのです」

「信州はドチラのお湯ですか」

「信州もズット奥の方なんですよ」

「信州の奥——信州はこの甲斐の国よりもいつそう山が遠く、日本の国の天井になつていると聞きましたが、その信州の奥？」

「ええ、信州もズット奥、飛騨ひだの国の境の方になるのだそうです」

「飛驒の国の境ですか」

はっこつ

「そうです、そこに白骨のお湯というお湯が湧いているんだそうです。そこへ入りますと、難病がみんな癒なおるのだと久助さんが教えてくれました。一冬そこに籠こもつていれば、どんな難病も癒つてしまいますそうで、丈夫な身体の人が入れば、一生涯無病で暮らせるそうでございます」

「ははあ、久助さんが、そういうことを教えたものだから、お雪ちゃん、あなたは直ぐその気におなんなすつたのですか」

「そうではありません、わたしが久助さんに尋ねたのです、どこぞよい湯治場はありませんかと。そうすると久助さんが、いろいろのお湯を教えてくださいましたけれども、ほんとうに命がけで難病を癒そうとするならば、山は深いほどよく、そこに一冬籠るがよいと教えてくれました。つまり、そこで久助さんが、白

骨のお湯……を名ざして詳しく教えてくれました」

「そうしてお雪ちゃん、あなたはなんですか、その山深い白骨のお湯へ、先生と、久助さんと、三人きりで、これから一冬を籠ろうという決心なんです」

「ええ、今から出かけて行つて、そうして雪の山の中に冬を過ごして、来春、暖かくなりはじめた時分に——その時、あの先生のお目も癒り、わたしも、少し弱いのですから、すっかり身体が癒つてしまえば、こんな結構なことはないじゃありませんか。第一、死んだ義姉^{あね}がどのくらい喜ぶか知れません」

「お雪ちゃん、あなたはほんとうにまだ子供ですね」

「何をいつてるの弁信さん、急に人をからかい出して」

「お雪ちゃん、あなたは幾つにおなりなさいますか」

「ほんとにおかしな弁信さん……」

「私は、お雪ちゃん、あなたはもう年頃の娘さんだとばかり思っておりますのに、そういうことをおっしゃるのだから驚いてしまいます。信濃の国の白骨のお湯とやらが良いお湯と聞いたばかりで、その間の道中がどのくらい難渋だか、そのことをあなたは考えておいでになりません。またその難渋の道中をつれだつて行く人たちが、善い人か、悪い人か、それも考えてはおいでになりません——私がここでうちあけて申し上げますと、あなたはその白骨のお湯へおいでになった後か、その途中かで、キツと殺されてしまいます、いきては帰ることができません」

「まあ——」

「お雪ちゃん、病^やんでいる人を癒^{はつこつ}す白骨のお湯は、またいきた人を白骨としてかえす力のあることを御存じはありますまい」

「いやなことを——せつかく思い立つたものを、ケ、チをつけるものではありません、それもほかのことと違つて」

「いいえ、決してケ、チをつけるのではございません。お雪ちゃん、あなたは義姉^{ねえ}さんの志をついで、あの先生に再び目の見せて上げたい、それが死んだ義姉さんへの供養^{くよう}と思つておいでになる志はよくわかりますけれども、それをする時には、あなたはやはり義姉さんと同じ運命を覚悟しなければなりませんよ」

「何ですつて、弁信さん、あなたのおっしゃることがわかりません」

「私にはよくわかります。お雪ちゃん、このごろあなたは、あの先生を好きになつているのでしよう、自分では気がつかないながら、最初のうちは気の置ける、気味の悪い人だと思つてい

た人を、このごろになつては、だんだん惹きつけられて、好きになつてゆく心持が、目に見るように私にはわかるのです。それですからあなたは、白骨のお湯へ殺されに行くのを自分で知らないで、自分で楽しみにしているのです」

「弁信さん、そういうことをいつてはいけません……あの方のお目を明るくしてあげたいというのが義姉さんの志なんですもの、遺言同様の願いじゃありませんか。わたしがあの方を、好くの好かないのなんて」

お雪はここで、真赤になつていいわけを試みました。弁信はそれを肯うけがおうともしませんで、

「ああ——私が傍にいなければ、あなたという人は、もう疾とうの昔に殺されてしまつていたのです」

弁信はこういつて、深い嘆息を洩らしました。

「弁信さん、もう、そういう話は止めにしましょう、あなたは、いつぞやもそんなことをいいました、義姉あねを殺したのはあの先生だといいい出して、わたしはヒヤヒヤしてしまいました」

「お雪ちゃん、わからないのですか、私のいつていることが」

「もう、止めて下さい、殺すとか、殺されるとか、そういうことを、わたしは聞くのはいやでございます」

お雪が座に堪えないほどの心持を、言葉の調子で見て取った弁信は、穏かに、

「悪うございました、ついまた口が出過ぎました。では、左様な忌いまわしい言葉は使いませんが、それでも、言いかけた心持は、言わないではおられないのが私の気性でございます……ただもう一言ひとこといわせて下さい。心あつても、なくても、あなたはあの先生を好きになつてはいけません、好きになると殺されます……」

どうも失礼を致しました」

といつて弁信法師は、いわん方なき悲痛の色を浮べて、そこそこに辞してこの室を立ち出でました。

急に暗い心になったお雪は、また氣を取り直して、湯氣の立つた鉄瓶から、お盆の上の急須きゆうすへお湯を注いで、別の襖ふすまをあけて徐しずかにこの部屋を立ち出でました。

お雪がお盆の上へ急須を載せて持つて来た部屋は、机竜之助の籠こもっている部屋です。竜之助はこの時、起き直つて座蒲団の上にチャンと坐り、刀を抜いて拭いをかけておりますと、

お雪が、

「お茶を召上れ」

「これは有難う」

「先生、その刀ですか、義姉あねがあなたに差上げたのは」

「これではありません」

「今も、弁信さんがいやなことをいいました」

「弁信が……」

「あの方はよい方ですけれども、時々変なことをいい出すので困ります」

「勘がよすぎるのだ」

「でも、気になってたまりませんもの」

「何をいいました」

「お怒りにならないように。弁信さんおこがいますには、私が傍にいないければ、お雪ちゃんというものは、疾とうの昔にあの先生に殺されてしまっているのだと、こういいました。そういわれた時に、わたしはゾツとしました」

「でたらめをいう奴だ」

「なんぼなんでも、あんまりじゃありませんか。弁信さんは先生のことを、人さえ見れば殺したくなる悪人のように思っているんじゃないでしょうか。この間も……あなたの前で、あんなことをいい出して、わたしはお気の毒で、お気の毒でたまりませんでした」

お雪はお茶をすすめるのも忘れて、竜之助の刀の下に戯たわむれている。戯れているのではない、刀そのものの危ないことを知らないのです。無知と大胆とは、いつも隣り合っている。

「お雪ちゃん、これが、あなたの義姉ねえさんから貰った刀です」

竜之助は拭った刀を壁へ立てかけて、別に例の白鞘しらさやの一刀を取り出しました。

「そうですか」

スルスルと拭いて見せた刀を、お雪は無邪気にのぞき込んで

いると、竜之助が、

「比べてみたところが、実によいあ、んば、いに、元のそちらの刀の鞘へは、まるのです、目釘めくぎの穴までが、ピタリと合うのは誂あつらえたようですから、少し手を入れて、中身を入れ替えてみようとして、いるところですよ」

「それは、ようござんしたね。それで、先生、どちらの刀がいい刀なのか」

「それは無論、こつちの方が……義姉さんから貰ったのがいい刀ですよ」

「いって竜之助は、前と同じように拭いはじめました。

「ですけども、刀には祟たたりがあるということですから、御用心をなさいます」

「祟りのあるほどの刀は、いい刀なのだから、人によつてはそ

れを好きます」

拭い終った竜之助は、その刀を前と同じように壁へ——拔身のままで紙を枕にして、手さぐりに立てかける拍子に、どうした小手の狂いか、以前に立てかけてあつた刀がカラカラと倒れました。それを引起して立て直そうとすると、今度は後ろに立てたのがスルスルと壁から横つ走りをはじめます。

「先生、わたしが立てかけて上げましょう」

お雪が見兼ねて手を出すと、その手を追っかけるもののように、刀はお雪の方へスルスルと横つ走りをして来ましたから、

「おお怖^{こゝ}い」

せっかく手出しをしたお雪が、恐れてその手を引込めると、竜之助は早くも一方を立て直して、一方を手に取り上げ、手さぐりで、その目釘を抜きにかかると見えます。

「お雪ちゃん、その火箸を、ちよつと貸して下さい」

「はい」

目釘を押すための火箸を取つて、お雪が竜之助の手に渡そうとする時、つい、着物の裾がからまつて、用心しながらいま立てかけた刀を、カラカラとひっかけると、

「あれ、危ない——」

^{かお}面の色を変えたお雪の膝の上へ、心あるもののようにその刀が落ちかかりました。お雪はハッと飛びのくと、その煽^{あお}りで、その刀がまた横に飛んで、ちようど、目釘を押えている竜之助の方へ飛びかかったものですから、その柄^{つか}で竜之助がそれを受け止めた形は、刀と刀とが絡^{から}み合つたようです。

「先生、今のをごらんになりましたか」

お雪は、真蒼^{まつさお}な面^{かお}の色になつていました。

「ああ、先生にはおわかりになりますまいが、今のはこの刀が、わたしに飛びついて、それからまたあの刀へ飛びついたのです。刀がいきていました」

竜之助は頓着せず、二つの刀を押並べて、火箸のさきでその目釘を押し抜いて、今や、その中身の入替えにかかろうとするのを、お雪は唇の色まで変って、苦しそうに、

「お待ち下さいまし。先生、わたくしは、その刀は入替えをなさらない方がよいと思います、どうも今のことが不吉でございますもの……今、その刀がわたしの方へ飛びかかる時に、わたしの眼の前へ、ちらりと義姉ねえさんの姿が浮びました。義姉さんが怖い目をして、およしといって、わたしを睨めた時に、この刀が、わたしに向って飛びついて来たように、わたしには思われてなりません。きっと、その刀は、その鞘に納まるのがいや

で、こちらの刀は、自分の鞘へほかのものを入れるのがいやな
んです、それに違いありません、そうとしきやわたしには思わ
れません。いやなことを無理になさると、きつと怖ろしい祟りたた
がありますから、刀はそのままにしてお置きなさいまし、その
方がよろしうございます」

お雪は不思議なほど躍起やつきとなりました。

「物は取りようじゃ、この二つの刀の鞘が詭あつらえたようにし、つく
りと合い、目釘の穴までがピタリと合うのは、あいえんの証拠
に違いない」

竜之助はお雪の一生懸命な忠告を取合わず、やすやすと中身
を入れ替えて、再びぬぐいをかけました。お雪はなんともいえ
ない情けない思いをしながら、その様子を見ていましたけれど、
ただ一時の恐怖と、幻覚から醒さめてみれば、あながち、それを

押止める根拠を持たないところから、そのまま引上げました。

三十一

その日の夕方のことです。お雪は寺の後ろの井戸端で洗濯物
を取入れていると、そこへ、疲れ果てた一人の若い旅のさむら
いが来ました。

お雪には知らない人ですが、これが宇津木兵馬であります。

「少々御無心ですが、水を一ぱい頂かせて下さい」

「さあさあ、どうぞ」

お雪は快く井戸の水を汲み上げてやりました。

「このお茶碗で召上れ」

「有難うございます」

水を飲んで若いさむらいは、さも元気がついたらしく、ホッと息をつきましたが、さて、再び動き出すにはあまりに疲れていると見えます。その痛々しい有様が、お雪をしてだまつて見過すには忍びなからしめたと見え、

「どちらへおいでになりますか」

その問いには答えずに、

「ええと——この辺にしかるべき旅籠はたごはありますまいか」

「町へおいでになりますと」

お雪は返事と共に、町までさえ出で悩む若い旅人の疲れが気の毒でなりません。若い旅のさむらいもまた、宿をたずねるにはたずねたが、一足も進む気色けしきはなく、

「甚だ恐れ入りますが、今宵一晩、いずこの隅にでも御厄介になれますまいか」

「そうでございますねえ」

お雪は十二分の同情を以て、この旅の若いさむらいを見て、
「むさくるしいところで、お厭いといなくば……」

といわれて、若い旅のさむらいは、もう占めたという喜びを隠すことができません。

「雨露うろをさえ凌しのがせていただければ……」

「お待ちくださいませ、ちよつと聞いて参りますから」

お雪は、この旅の若いさむらいを泊めてやるつもりで、庫裡くらの方へ行つてしまいました。単純な同情だけではなく、この若い旅のさむらいが、たとえ全く知らない人にしてからが、どう間違つても、後にわざわざいを残す人でないという印象が、そうさせたものに違いありません。しかしこの娘の人は同情しても、相談の相手が何というか知らん。この寺の住持が何というか知

らん。

恵林寺の慢心和尚に叩き出された兵馬。ここまで飲まず食わずに來たのが、ここへ來て一杯の水にありついたが、その水を与えた主の心は温かい——水は甘かった。その井戸の釣瓶つるべの水で手拭を湿しているところへ、お雪が戻つて來て、

「あの、せつかくでございしますが……」

若い旅のさむらいは、その言葉でハツとしたらしい。果して、この人は同情しても、寺の実権者がその同情を受入れないのか。

「はい」

「こつちの方はお客が泊っておりますから、本堂の方へお一人でお休み下さるならば……と申しますが、そのくらいならいくらもございせんから、わたくしが町の旅籠はたごまで御案内を致して差上げましょうか」

「いいえ……それで結構です」

と兵馬は、あらがうように言いました。

「淋しいところは厭いといませぬ、が、なお申し上げておきませなければならぬことは、仔細しさいあつて、私は今の身に一銭の蓄えというものがございませぬ、いずれ、御恩報じは致すつもりでございますが、それ故に……」

兵馬が口ごもっているのを、お雪は打消して、

「いいえ、その御心配には及びませぬ、ただ淋しいところで、それだけがお気の毒でございます——」

ともかくも兵馬は、足を洗つて庫裡くらの炉辺ろへんへ通りました。もう夜分は火があつても悪くはない時分です。

「ずいぶんお疲れでございましょう」

お雪がいますと、

「疲れました、不意に思い立つて、不意に帰るものですから」

「江戸の方へお帰りでございますか」

「左様——江戸を出て、甲州の塩山にちよつと知合いがあるものですから、そこへ尋ねて行きましたが、その人に会えず、空しく立帰るところでございます」

「それはそれは」

お雪は、兵馬が何故に甲州へ来て、何故に帰るのだから知りません。兵馬もまたこれを尋ねられないのに、答える必要はないのです。

「少しばかり歩いたとて、そう疲れるはずはないのですが、なにぶん、今度のは不意に思い立ったものですから——」

しかしながら、その言いわけに落ちて行くのも、お雪にとつては通り一遍で、

「そのつもりで出ませんと、旅は疲れるものでございます。あの、御飯を差上げとうございますから、あちらへお越し下さいませ」

兵馬は、ちよつと動き兼ねる風情ふぜいで、

「それは痛み入りますが、おさしつかえなければ、ここで御好意にあずかりましょう、そうして、いずれへなりとも休ませていただきとうございます」

「それでは……」

といって、お雪は勝手の方へ向い、

「茂ちゃん、茂ちゃん」

と呼びますと、

「はい」

と子供の返事。

「お客様の膳を、こちらへ上げてください」

「はい」

黒塗りの膳を捧げて出て来た少年は、清澄の茂太郎であります。

「何もございませんが……」

お雪が、その膳を兵馬の前に据えると、兵馬は恐縮して坐り直し、

「あつかましい至りですけれども、ドコまでも御好意に甘えて……」

兵馬はおいしいたいて膳に向います。事実、食膳に向う時、兵馬は色の白い飯に向つて、ふる慄えつくほどの有難味を感じました。

兵馬が箸を取り上げた時、

「茂ちゃん、済みませんが行燈をここへ持つて来て下さいな」
あんどん

そこで以前の少年が、身の丈ほどの四角な古びた行燈をヨチヨチと持ち出して、

「持つて来ました」

「御苦労さま、お客様の傍へ置いて下さい、もう少しこつちがいいでしょう」

「ここでいいですか」

「ちやうど、ようござんしょう」

お雪ちゃんが、何もかもとりしきっているもてなし、兵馬は

涙に咽ぶ心持で箸を取り上げながら、行燈を見ると無性に懐か

しくなります。古びた紙の色に黄がかった光。見廻すと、天井

が高く、四方がただっ広く、大きな炉の傍にはお雪が一人、行燈を持つて来た少年は立ちながら栗をむいている。台所では誰

やら水仕事をしているらしい。

「塩山の恵林寺へ参りましてな、あそこの師家しけの慢心和尚に、相談をかけようと致したが、和尚に追い出されて、またスゴスゴとここまで戻つて参りました」

兵馬が問わず語りにいい出すと、お雪が、

「恵林寺へおいでになりましたのですか」

兵馬はえりんじと棒読みにしてしまうが、お雪はえりんじと「え」へ力を入れていいいます。

「左様、恵林寺では、ヒドイ目に会いましたが、こちらでは温かい御好意を受けまして、これで生き返った思いが致しました」
「おかまい申すこともできませんで……」

兵馬が涙に咽むせびながら、徐しずかに一杯の飯を食べ終った時、どこかでビーンと絃いとの鳴る音がしました。まさしく平家琵琶の調

子でありましたから、兵馬は、はて、この寺にはまだ琵琶法師がいるのだなと感じました。

けれども今の兵馬には、琵琶に耳を傾けている余裕がありません。

食事が終つて、清澄の茂太郎に本堂へ案内された時、

「あの琵琶を弾ひいているのは誰ですか」

「あれは弁信さんです」

弁信さん——だけでは茂太郎の独合点ひとりがてんで、兵馬にはのみこめない。

「そうして、あの娘さんは、君の姉さんですか」

「違います、あれはこのお寺の娘さんです」

「では、君は？」

「わたしは居候いそうろうです、わたしも弁信さんも、それから吉田先生

も、三人ともにこのお寺の居候で、あの娘さんだけがお寺の人なんです」

「そうですか」

その時、茂太郎は持つて来た行燈を片隅に置くと、そこは本堂の一部の細長い部屋で、壁には狩野派かのうはの山水がいつぱいに描かれてある。隣室から夜具を運んで来た茂太郎は、早くもそれを展のべ終つて、

「お休みなさい」

「有難う」

かいがいしく世話をしてくれる少年に、兵馬は何かやりたいものだと思いましたが、さて何も持つておりません。

「行燈をここへ置きますから。燧ひうちどうぐ道具はこの抽斗ひきだしに揃えてあります」

「それはそれは」

「お客様」

さて改まつてこの少年が兵馬に向い、

「この裏の戸はあけないようにして下さい」

「よろしい」

「もし何か変つたことがあつても、今のところからお出になつて、決してこの裏の戸をあけないようにして下さい」

と、ことさらに念を押すのがおかしいと思いましたけれども、兵馬は、

「念には及びませぬ」

そこで刀、脇差をさしおくと、清澄の茂太郎がまだ物足らぬ顔で、

「この戸をあけると、怖こわい化物ばけものが出るんですよ、だから……」

そこまで念を押さなければ、兵馬もさして気にも留めなかつたが、

「化物が……」

「ええ、化物が出るかも知れませんか、あけないで下さい」

「大丈夫です」

これだけ念を押しておいて、さて茂太郎もやや安心顔に、再び、

「お休みなさい」

といつて出かけようとする、丁度、そのあけてはならないといつた方角の縁の下あたりで、唸る声うなが聞えました。この唸る声を聞くと、早くも面色かおいろを変えたのが茂太郎で、

「いけない」

といいました。さては、もう、その化物なるものが出だしてし

まつたのか。犬の唸り声としてはなんとなく凄い。やや長く唸りを引き出したから、釘づけのように突立つた茂太郎が、

「いけない、いけない」

と畳の上に二三度、地団太じだんたを踏んで、

「だまつておいで、今、何か捜さがして来て上げるから、だまつて待つておいで」

といって縁の方へ飛び出して、あけてはならないと断わった戸口を、ガタガタと自分で一尺ばかりあけて、外を覗のぞき、

「吠えてはいけないよ……おとなしくしておいで」

そこで、今しも凄いいなりを立てはじめた化物が、すっかり静まつてしまいました。もとへ戻つて来た茂太郎は、兵馬に向い、さも妥協を申し入れるような態度で、

「お客様、だまつていて下さいね、後生ごしやうだから。言うと、あた

いが叱られるんだから」

「何です、今のは」

「あれはね、お客様、本当のことをいえばお化けじゃないんですよ、狼が二匹、この縁の下にいます、あたいが山から連れて来て隠して置くんです、いうとみんなに叱られるからね、誰にもいわないで下さいね」

少年の哀願を聞いて兵馬も驚きました。なるほど狼を連れて来て、隠しておくのでは叱られるにきまつている。けれども、こうなると、連れて来られた狼よりも、連れて来たこの少年が怖ろしい。

別にその夜更けて、月見寺の裏庭から動き出した真黒い人影があります。

これは山岡頭巾で面の半ば以上は隠れ、黒い紋付の羽織、着流しでスラリとした形、腰に大小、手に竹の杖をついて、ふらふらとして夢の国を歩み出したその人は、机竜之助でありました。庭を越えて、宮の台なる三重の塔をめぐつて駄路へ行く路、或いは動き、或いは動かず、しかしながら闇路を縫うて、徐ろに下りて行くのは、紛れもない駄路への一筋路であります。

打絶えてこういうことはなかった。曾て甲府の城下にある時、また本所の弥勒寺長屋を出でて、江戸の市中をさまよう夜な夜なは、この姿で、この男の動くところには、必ず血が流れていったのに——今はもうその時でも、その所でもなかったろうはずなのに——ひらりひらりととめどもなく歩いて行く手は人里。

自然は眠り、人は定まつて、屋の棟も三寸さがる時に、悪魔は人の寢息を嗅^かぎに出る。

昼は光明の世界、夜は悪魔の領分。

光明の世界に働いた人は、闇黒の夜は寝てしまえばよい。闇黒を悪魔に与えてその跳梁^{ちようりょう}に任^{まか}し、夢の天国を自ら守る人には、永久に平和が失われないのである。

天真なる小児に、夜歩きをさせてはならない。

老いて子に従うことを知る者も、また夜の悪魔の領分を犯してはならない。

忠実なる昼の勤勞の疲れを味わう人は、夜の酣睡^{かんすい}をほしいままにし得るの特権がある。

美しきも、美しからざるも、若い娘たちは夜歩きをしてはならない。

恋があろうとも、なかろうとも、若い男たちは夜遊びにふけてはならない。

親の死目に急ぐ旅でさえも、なるべくは悪魔の領分を犯さないがよろしい。

善良な夫はその妻に夜歩きをさせない。貞淑なる妻は夜の夫の全部を自分のものとする。

そうしておけば、悪魔はその食うべきものがなくなる。闇黒の世界に闇黒を食うて、ついに闇黒以外のものに累を及ぼすということがなくなる。

夜眠らざる人は罪惡である。或いはその罪惡を守る人である。どうかすると火の番の廃止を恐れて、火をつけて廻る火の番さえある。

ところで、悪魔は大抵はひとり歩きをするものである。ひとり

歩きをする者の全部が悪魔ではないが——天才と悪魔とは往々ひとり歩きを好む。

孤独は人を偉人にするか、或いは悪魔にすることがある。故に人は夜を怖るると共に、独り^{ひと}を怖れなければならぬ。

善良なる青年は早くよき処女を求むべきである。かくて良き夫はまたその妻に好き子供を産ましむべきである。良き子供はまたなるべく良き兄弟と、良き朋友^{ほうゆう}の多くを持つのが幸いである。

したがって、よき親はまた当然その子のために、よき配偶を心配する。

偉人と悪魔のみが孤独である——しかし、この悲しむべき悪魔に、今宵は連れのあることが不思議です。

机竜之助が、暗黒の世界に、ひとり闇黒の身を歩ませたその

背後に、影の如く、形の如く、彼がとまればこれとまり、これが歩めば彼も歩んで、ある一定の間隔を置いて、ドコまでもついて来る二つの黒い物影があります。

これは何。犬に似て、犬よりは瘦やせている。獾ばくというものに似て、獾よりは残忍。

それは月見寺の本堂の縁の下にいました。竜之助が庭へ姿を現わした時分に、同じく縁の下から這はい出して、最初は少しく唸りましたけれども、やがて静かにそのあとを音もなく歩んで来るのみです。

この二つの黒い物影は狼——送り狼という。物を見れば、それが転ぶところまでついて来る。その物の転ぶを待つて、骨まで食くいつくすのがこの狼の本性であります。

そこで悪魔は二箇ふたりづれになりました。

けれどもこの小規模のハイランドには、むぎむぎと闇黒の餌食となるほどの罪造りはいないと見えて、夜の領分を、夜の人が行くに任せて、驚く人も、驚かるものもありません。

黒影の人と、送り狼とが、或いは行き、或いはとまり、見えたり、隠れたり、ひらりひらりと夜遊びをしている深夜のハイランドの天地は、至極沈静無事なことですから、かえつてその別の方面は、無事ではありませんでした。

寺の本堂で熟睡に落ちていた宇津木兵馬。それを不意に呼び起すもの。

「モシ」

この時早く、兵馬は眼をさまして脇差の下げ緒を手繰たぐつていと、

「モシ、お目ざめでございますか」

物を憚るはばか小さな声。

「どなたでござる」

「御免下さいまし、私はただいまこのお寺に御厄介になつております弁信と申すめくら盲目の小法師でございます」

「どうか致しましたか」

「はい、お静かに願います、お静かに——」

おかしい物のいいぶりだと思ひました。けれども、怪しい物のいいぶりだとは思ひません。何かに怖れて、オドオドとしてやつて来たもので、人を驚かそうとして忍んで来たものでないことは明らかです。自分がオドオドしながら、お静かに、お静かに、と暗いところを歩み寄つて来るのが笑止といえは笑止だが、何かの変事を後ろに惹ひいて来ていることは間違ひなからう。兵馬もおのずから固唾かたずをのむと、

「御免下さいまし、お休みのところをお驚かし申して甚だ失礼でございますが……」

この際、馬鹿丁寧な前置はいらないはず。

「いつたい、どうしたのです」

「あの、ただいまこのお寺に盗賊が入りましてございます」

「ナニ？ 盗賊が……」

それは聞き捨てにならない。

「でございますけれども、どうかお静かに願います、入りました盗賊は、たしか二人でございます」

「二人？ 二人だけですか」

「エエ、二人だけのようでございますが、まあお待ち下さいまし、私はここで大きな声を致してよろしいか、また、あなた様に出合っていただいてよいか、それがわからないのでございま

す。なぜならば、もうあの二人の盗賊は、多分、住持の老僧と、お雪ちゃんという娘と、それから針妙しんみょうのお光さんというのを、三人だけ縛り上げてしまったようなのでございます。ここで声を立てようものなら、あの盗賊たちが怒って、あの三人を殺してしまうかも知れません。ですから、だまっていた方が無事でしょうか。知って知らないふりをして、盗賊たちを取るだけのものを取らせてやった方が無事でしょうか。それともほっておけば、いい気になって、針妙のおばさんや、お雪ちゃんがあぶないのではないでしょうか。私の思案には余りました。あちらにいる先生のところへ、そつと参りましたところが、いつもおいでのところいらつしやらないから、そこで、あなた様のこととを思い出して御相談に上りましたのです。何を申すも、わたくしは目の不自由な小坊主でございますから……」

「こうしてはおられぬ」

兵馬は脇差の下げ緒を口にくわえて、手早く帯を引結びました。

「あなた様、お出会いになりますか」

「聞き捨てになろうことか」

「けれども、あなた様、どうかもう一応お静まり下さいまし。人の危うきを聞いて難におもむくのは勇士の心とやらでございですが、それがために二重三重の災難の生ずることもございませう、一旦のはじめに目をつぶれば、とにかく目の前の急から救われることもございますから……」

「かれこれといっている場合ではござらぬ」

兵馬は案内知つたる庫裡くらの方へと進みました。

住持の居間では、たしかに人の言い罵ののる声がします。兵馬は

ぬきあし
拔足して、その明け開いた襖ふすまの蔭に立寄つてうかがうと、弁信法師の報告はほとんど見て来たようで、住持は床柱の下に、お雪と針妙とはやや離れたところに、いずれも両手を結ゆわえられ、猿轡さるぐつわをはめられて、引転がされているところに、頬冠ほおかむりした二人の兇漢が、長いのを畳へつきさして、胡坐あぐらを組んで脅迫ていの体は、物の本などで見る通りの狼藉ろうぜきです。

こういう場合には兵馬は経験がないではない。そこで、もう一応見届けようと踏みとどまりました。それとは知らず二人の盗賊は、おちつき払すじもんくつて倭文句を並べている。それとてまたいてい紋切形もんきりがたの倭文句で、この寺は裕福だと聞いて来たのに、これんばかりの端金はしたかねでは承知ができねえ、もつと隠してあるだらう、有体ありていにいつてしまわねえと為めにならねえ、というようなこと。

暫くあつて一人の盜賊がつと立つて、お雪の方へ寄りましたから、兵馬がハツとしました。盜賊の怖るべきは物を取るよりも、女を脅迫することである。兵馬はその例を京都でよく知っている。

「御免下さい」

お雪の泣き声。それはお雪だけの猿轡はすを外したものです。

「静かにしねえと為めにならねえ」

盜賊が物々しくその泣き声を抑えつけて、その次にわざと小声で、

「姉さん、これからお前は土蔵へ、おれたちを案内するのだ。さあ、鍵があるだろう、鍵を持って土蔵へ案内するがいい」と、こういつて脅迫しはじめたものです。

その脅迫をのがるる由もないお雪は、強しいて手燭を持たせら

れて、二人の白刃しらばの間にハサまれて、この部屋を出ようとする時分、

「盗賊め——」

といつて飛び込んだ兵馬は、先に立つた盗賊の真甲まっこうを一太刀きると、

「わッ！」

「やつたな、それみんな、叩き切つちまえ」

兵馬にきられたのが倒れる途端にお雪も倒れて、手に持たせられた手燭を取落す。この時一人の盗賊は心得て、部屋あんどんの行燈を蹴倒してしまつたから、部屋は忽ちたちまに真暗闇です。兵馬は、すり抜けて、床柱の方に、三人の味方をかくまつて立っていました。

そこで、真暗闇の室内は、混乱驚愕の闇仕合となる。

兵馬としては、これらの盜賊を斬るよりも、家中の者の安全を保護するが先である。盜賊共はこうなると、物を盜るよりは逃ぐるが勝ちである。一人の奴が物慣れていると見えて、手当り次第にそこらの物を取つては投げつけるのは、隙を見て逃げ出すつもりに違いない。兵馬はその方角をみはからつて、また飛び込んで斬ると、

「あッ！」

といったのは確かに手答えのある声。

兵馬は賊の投げつけた枕を払つて、その切先でたしかに賊の背筋を切つたらしい。

その悲鳴をあとに、用意の雨戸を蹴外けはずして、二人の盜賊は外の闇に飛び下りてしまいました。

あとを追いかけるよりは、内のものを看護するのが急である。

そこで兵馬は、

「お怪我はありませんかな、お怪我は？」

といって、行燈の傍かたわらへ手さぐりして火をつけようとする、

「お客様、有難うございました」

「おおお雪さん、無事でしたか、お怪我はありませんでしたか」

「ええ、おかげさまで助かりました」

「皆さん無事です、早く、あかりを欲しいものですな」

「はい、ここに」

といってお雪が探し当てた火打。あかりをつけて見ると、ありとあらゆる物を投げ散らかしたあたりの狼藉ろうぜき。血痕が襖にも障子にも飛び散っている。急いで、縛られた住持と針妙の縄目を解いてやると、いずれも死に近いほど恐怖はしていたが、怪我といつては別段にありません。

やがて、それぞれ元気づいた後、兵馬はなお人々を励まして、
ともかく、この事を役向へ訴え出づると共に、人を集めて盜賊
の行方を追究させなければなるまいと言い出すと、にゆうわ柔和なる寺
の老住持が言いました。

「まあお待ち下さい、おもてぎた表沙汰にすることは見合わせが願いたい。

皆々身体からだに怪我もなし、取られたのは少々の金、寺から縄付き
というものを出したくもなし、あのくらい懲こらしめていただけ
ば、二度とこの界限へ近寄るはずもなからうから、何事もこの
ままに」

と、さすがは坊さんらしい意見で、この事は訴えもせねば、世
間へも発表せず、これまでの災難とあきらめてしまおうという
ことに一決しました。

そこへ、弁信法師もやって来る。何か済まないような面かおをし

て清澄の茂太郎もやつて来る。みんな寄つてたかつて見舞やら、慰問やらで、賑やかなことになりました。

なんといつても、一同の感謝は兵馬の上に集まり、よい人が泊り合わせてくれたことを喜ばずにはられません。兵馬はまた、弁信法師の知らせ方の用意周到であつたことを今になつて讃め、家の者は弁信の勘のよいことを、いまさらに讃めて兵馬に語りました。

さて、盗賊の何者であるかということに就いて、兵馬は、どうしても多少案内を知り、この寺の裕福なことを頭に入れて来たものに違いなかうというところ、お雪が、

「それについて思い出すのは、昨日の日に箕直みなおしが来て、妙にジロジロわたしの面をながめて、いやな笑い方をして出て行きました、あれは山窩さんかの者かも知れませんか」

「ああ、山窩かも知れません」

と針妙のおばさんが、まだ慄えふるの止まない声でいう。

「山窩？」

「おおいやだ、山窩の奴」

山窩、山窩と口々にいつて、いやな顔をしてしまいます。

山窩は日本の国内にあつて、定まつた住所と籍とを持たない、一種の漂泊人種であります。彼等の起源は学者もよく知らないが、かなり長い歴史をもつて今日に至っていることは確かである。彼等は多く春夏秋冬によつて、なるべく氣候の温暖清涼の地をそれからそれと辿りたど渉わたるといふ。秋の末から翌年の春にかけては太平洋の岸、東海道は房総の地から武相、伊豆半島から駿遠、或いは紀州から摂津、更に備前、備中、備後、安芸等あき、畿内きないから山陽道にわたつて漂うのを常とし、これらの地を蚊が

襲うようになると、彼等は東海道と東山道、或いは山陽道と山陰道との山脈間の村落、または北陸道方面を徒渉としようするのを例とする由。

彼等の中には世を渡る偽りの職業として、箕直し、天の橋立、風車売り、猿廻し、蒲焼かばやきう売りなどを業とし、人里に立入つて様子を見届けた上で、強盗に押入る者がある。

「山窩の生活」の著者のいうところによると、彼等はセプリ（天幕）を引揚げるまでに準備をととのえ、女子供は三十里の先へやつておいて、一夜に五軒十軒を荒して巧たくみにフケてしまふ。そうして彼等の逃走の範囲は日本国中に及ぶ。しかしながら東海道の山間近いところが彼等の根拠地で、漂泊の彼等に、忘れ難い懐かしみの土地となつてゐるらしいということである。

一同が山窩のことをいい出して、白け渡つた時、

「あ、奥の先生は、どうしたでしょう、吉田先生は」

この時分になって、ひとり残された机竜之助のことが問題になりました。

「先生のところへ行つて見ましょう。茂ちゃん、一緒に来て下さいな」

お雪は思い出すと、このことが、たまらないほど心配になったものと見え、茂太郎と、弁信と、三人づれで出かけましたが、暫くして安心の色をたたえて帰つて来ました。

「あの先生は、何も御存じなく休んでいらつしやいます」

三十三

その夜はこうして明けましたけれど、朝になって上野原の駅

路外^{はず}れ、火の見櫓^{ひやぐら}の下に、一つの恐怖が起りました。

そこに無残な死体が二つまである。鳥沢の馬方が一番先にそれを発見して、忽ち^{たちま}黒山のように、起き抜けの人を集めてしまいました。

「斬られたんじゃない、食われたんだ、食われたんだ、狼か、山犬に食われたに違えねえのだ——」

誰が見ても、一見それと領^{うなず}かれる。二個^{ふたつ}の死骸のどちらのも、ほとんど半分が食い散らかされている。で、山間の人には直ちに狼か山犬だと判断する。落ちていた二三の毛筋を拾って、これが狼様の毛に違いないというものがある。狼は時とすると、様の字で敬畏^{けいゐ}を表象されることがある。

追々集まって来た人も、すべてそれに一致する。そうして食われた人間は土地の人でないことをも承認する。二人ともに頬

冠りが食い残されているところを見れば、まさしく夜荒しをして歩いた悪者に違いない。いわば自業自得じごうじとくである。しかしながら、かりにも狼の出没するという形跡は、別に土地の人を恐怖させずにはおかない。今晚から夜歩きをことさら警戒せねばならぬ、若い者は集まって悪獣狩りをしなければなるまいという者もある。そのうち宿役しゆくやくたちも寄つて来て、その所持品を調べてみると、中から金包が出た。その金包の紙をほどいて見ると、それには報福寺の印がある。そこで報福寺へ使が飛んで来た。表沙汰おもてぎたにしないようにとの、老住職の心づくしも無駄まぬかになつて、どうしてもこの盗賊の被害者としての引合いを免れないところから、柔和な老住持はこれを苦にした。見兼ねて兵馬が、その衝しょうに当ることになった。兵馬とても、かかり合はいいやだけれども、こうなつた以上は、自分が引受けた方がよからうと、

その現場へ出向いてみることに決心しました。

しかし、この寺に縁もない宇津木兵馬という名を名乗りたくない。この寺に親戚の者で、ちょうど泊り合わせた片柳なにが、しという名で、現場へ出向いてみようということ。

兵馬とても、同じように信じている。手傷を負った二人の者共が深夜を逃げのびて行く手に、食に飢えた狼——この辺には出没しそうなところで、事実またその出没を見届けたものも多いという——に襲われて、その毒牙にかかったものに相違ない、これ自業自得、天の配剤、というように観察して来て見ると、「それ、お寺様からおいでになつた」

道を開いて通してくれたから、兵馬は、その屍骸に近づいて見る。

それは、おもて面も向けられない惨憺さんたんたるもので、なるほど悪獣に

食い散らされた残骸ということは一見して兵馬にもわかる。またその頬冠ほおかむりの体ていや、着物の縞柄しまがらを見ても、多分——ではない、全く昨夜の悪者共に相違ないと頷うなずかれたが、ただしかし、兵馬が、もう一層近く寄つて、この屍骸を検視した時に、容易ならぬことを発見しました。

この屍骸は、二つとも斬られている——食われる以前に——その一つは左の肩からほとんど下腹部まで垂直に——他の一つは横なぐりに頭蓋骨を——それは実に水も堪らぬきりかたであると共に、尋常茶飯じんじょうさはんの如く慣れきつたるきり手である。兵馬は舌を捲いて怖れました。

誰もが、食われたことを知つて、斬られたことに気がつかない。物に慣れた検視ならば、やはり同じように戦慄せんりつして、舌を捲いて、怖るべきものを、ここに集まっている人々は、誰もそ

ここまで気がつかない。

「これはたしかに、昨夜入った賊共に違いござらぬ、この紙も、この金も、たしかに——しかしながら解げせぬことは……」

兵馬は、実に、これだけのきり手を、如何いかよう様に想像し、如何様に判断すべきかに苦しみました。

これがために宇津木兵馬は、その日発足ほっそくというわけにもゆかなくなりました。

しかし、食い散らされた死体のことは、誰も兵馬と同じ疑いを抱くものではなく、ただ狼が人を食うという噂うわさのみが、駅路筋に伝わって、聞く人をして戦慄せしめるに留まったのは寧ろ幸いでした。ために、食い散らされた二個の死体は、町はずれの馬うますてば棄場へ持つて行つて埋められ、いつさいの責せめが狼に帰せしめられてしまうと、自然、報福寺も宇津木兵馬も、これ以上のか

かり合いからは免れた次第です。

けれども兵馬の胸には、解き難い疑問がいくつも残されているが、この際、まだ混乱から癒されぬ頭では、その一つを選んで熟考する暇がない。

その日一日、兵馬は茫然として暮らし、夜になって、例の本堂へ休ませられる時に、蒲団をのべに來たのが、例の清澄の茂太郎であります。

「お床をのべて上げましょう」

「有難う」

その時、兵馬の頭にきらめいたのはこの少年だ。昨晚、哀願的に自分に向つて妥協を申し入れたのは――

「おじさん」

「何です」

「昨夜のことは、誰にもいわないで下さいね」
ゆうべ

「ああ、誰にもいいはしないが、あの狼はどうしました」

「山へ逃がしてやりました」

「君はいつたい、どこからその狼をここへ連れて来たんですか……」

「ええ、あたいが、山へ行つてそつと連れてきたんですが……」
「昨晚、火の見櫓の下で、盗賊を食い散らしたのはその狼だろ
う」

「あたいもそうだと思うんです。ですから、それが知れるとよ
けい叱られちまうんですよ。けれども、もう大丈夫です、山へ
逃がしてやりましたから」

「君は、どうしてまた、そんな怖いものをここへつれて来たの
だ、狼が怖くはないのかね」

「山で遊んでいるうちに、あたいのあとをついて来て離れないものだから、ついお友達になつてしまいました」

「狼と友達？」

兵馬は呆れてしまいましたが、この面立ちおもだの可愛げな少年が、山へ行つて狼と遊び、狼がそのあとを慕うて離れないというのは奇怪ではないか。

「ふん、それで、お前は狼が怖くはないのかね」

「怖がありません、大好きです。狼ばかりじゃありません、山の鳥や獣はみんな好きです。あたいが好きだから、向うもあたいを好きなんですよう」

「で、その狼は、平常ふだんから、君が大事にして育てていたのではないのか」

「いいえ、昨日、山へ行つて口笛を吹いたら出て来たんです」

「食いつかなかったの？」

「食いつきませんかとも」

「不思議だ」

兵馬は驚嘆して、この少年の面を見比べますと、別段、山男の落し児とも思われない目鼻立ちの清らかな少年に過ぎません。「だけでもね、おじさん、あたいが一つおかしいと思うのは、ゆうべ、誰かあの狼をこの縁の下から連れ出した人があるんですよ。それは、泥棒の入った前ですね」

途方もないこと。この少年を別にして、どこの国に、狼を引張り込んだり、つれ出したりする奴がある。兵馬はこの少年の平気な面をかえって怖ろしいと思いました。

「そう無暗に狼を引き出したり、引込めたりする奴があるものか」

といたしますと、

「いいえ、狼だつて、そんなに怖いものじゃありません、こつちが怖がるから、向うも怖がるんでしょう」

語気によつて察すると、この少年は山に行つて、あらゆる悪獣毒蛇をも友とし得るの魔力か、無邪気さかを持っているらしい。

夜具を展^のべ終つた茂太郎は、大きな桐火鉢の縁^{ふち}へしがみつくように坐り込み、

「おじさん」

兵馬はおじさんといわれるのがなんとなく擦^{くすぐ}つたい。

「何だ」

「おじさんは劍術が出来るんだらう」

「それは少しは出来る」

「剣術が出来れば怖いものは無いんだね」

「そうもいかないね」

「荒木又右衛門と柳生十兵衛と、どっちが強いの」

「それは柳生十兵衛が強いだろう、先生だから」

「それでは柳生十兵衛と宮本武蔵では」

「それはわからない」

「おじさん、あまくさぐんぎ天草軍記の話をしてくれないか、寛永年間の天草

軍記」

妙な無心をはじめたものです。

「君は話が好きかね」

「大好き。そのうちでも、あたいた草軍記が大好きなんだから、おじさん、知ってるなら教えておくれよ」

「わたしは、よく知らない」

「よく知らなけりや、少しでもいいから」

話を聞いたがつてせがむところは、世の常の少年と少しも變りはない。けれども、兵馬にはこの少年の知識慾を満足せしめるほど、天草軍記の知識を持つていないという引け目があるのと、もう一つは何か最初から氣にかかることがあつて、

「それより、拙者の方で君に聞きたいことがある、このお寺には君とあの弁信殿と、そのほかにまだお客があるの？」

「そのほかに吉田先生がいます」

「吉田先生とは？」

「あたいは知らないけれど、弁信さんがよく知っています」

「その人は何をしています」

「病氣なんでしょう」

「どこにいます」

「あちらの奥の八畳の間に一人でいます」

「若い人ですか、お年寄ですか」

「どうだか知りませんが、そんなに年寄じゃないでしょう、お雪ちゃんと、よく話が合うくらいだから」

「君は、その人と会ったことはないのか」

「ありません。会わせてくれないんだもの」

「会わせてくれない？ 誰が……」

「弁信さんが、あぶないから、お前、あそこへ行つてはいけないと止めるから、あたい、一度も行かない」

「どうして危ないの」

「どうしてだか、それがわからないんです。ただ、危ないから、あのお部屋の傍へ寄つてはいけなないと、無暗に弁信さんが止めるから、あたい、変だと思つてゐるの。そのくせ、弁信さんは、

自分じゃ平気で入って行くんだからね。でもこのごろはあんまり行かなくなりました。その代り、お雪ちゃんがちよいちよい行きますよ。あたい、変だと思うけれども、人が止めるものを無理に行きたかないから、それで行って見たことはありません。悪い病気の人かも知れません」

「茂ちゃん、茂ちゃん」

あちらでお雪の呼ぶ声。

「ああい」

茂太郎は大きな声で返事をして立ち上り、

「お休みなさい」

「お休みなさい」

兵馬は、やがて寝に就きました。まもなく、軒を打つ雨の音。

庭の立木もさわぐ。ようやく雨が降りしきる模様。

あまだれ

雨垂に枕を叩かせて、うとうとと寝入る兵馬。昨夜もあの騒ぎでおちおち眠れない。このごろ中よく眠れない。今宵こそは、ともかくも一夜の熟睡を貪^{むさぼ}つて、明日はこの寺を立つのだ。

現在、同じ寺のうちに、多年敵^{かたき}と覬^{ねら}う人と泊り合わせの運命に置かれながら、それを怪しむこともなく、それを尋ねる縁もなく、今日はこうしてちかより、明日はまたこうして離れて行く。彗星^{すいせい}と遊星^{うせい}とが、近づく時は圈内^{けんない}に入り、離れる時は何千万里の大空をそれて行くように。

三十四

両国広小路の人混みを離れた一人の大男、三歳^{みつ}ばかりになる

男の子を十文字に背負つて、極彩色の花の中宿なかやどの日傘をさし、両国橋の袂たもとまで来て、

「もうし、物をお尋ね申したいが、あの本所の相生町というのは、どう参つたらよろしうございますかね」

「相生町へ行きなさるか……」

尋ねられた若い衆は、すぎこし方かたを指さして、

「それ、この橋を渡りきると左手に辻番がある、それを左へ行つちやいけねえよ、右へ行くんだね。右へ行くと元町というのがあらあ、それを河岸かしへ伝つて行くと相生町へ出まきあ、左が松坂町……」

「どうも有難うございます。序ついでにお聞き申したいのは、その相生町に、御老女様のお屋敷というのがござりますか」

「御老女様のお屋敷だつて？ そんなのは、ツイぞ聞かねえが、

まあともかく、いま言った通りに行つてごらんなさい、相生町へ出たら、もう一度聞いてごらんなさるさ」

「有難うございます」

丁寧にお辞儀をして、教えられた通りに橋を渡りかけた子持ちの大男。

それを、やり過ごして見送つている尋ねられた若い者二三人。

「いいかつ、ふく、だなあ、たしかに十両がものはある」

そのかつ、ふくに見惚みとれている通り、いま物を尋ねて過ぎ去つ

た大男は、たしかに相撲に見まほしき肥満の若者でありました。

けれども相撲ではない証拠には、その着物といい、言葉つきとい

い、ドコまでも質朴しつぽくな田舎者いなかもので、前髪がダラリと人のよい面かおつ

きの広い額の上にさがつてゐるところは、もうかれこれ二十歳はたち

であろうのに、どこかに子供らしいところがあり、草鞋わらじがけで

かなりの道中を、江戸までスタスタ歩いて来たものと見えます。「えてして、宝の持ち腐れというものが、この世間にはどのくらいあるか知れねえ、うまく掘り出せば横綱になる代物しろものを、一生、田の草取りで終らせるのがいくらもあるだろう、今のなんぞも百姓には惜しいもんだ」

二三の若い者は、これを捨ゼリフの送り詞おくことばで、あっちへ向くと、もう両国の盛り場の人混みへ見えなくなつてしまいました。この大男は武州沢井の水車番の与八。背に負うているのは机竜之助とお浜との間に出来たことし三つになる郁太郎であります。

その尋ねて行く先は、相生町の老女の家。

橋を半ばまで渡った時分に、人が争つて南の欄干たかに集る。

「あいたいじに相対死」

「相對死」

「何ですか」

「つまり心中なんです、あれごらんない、心中者の死骸が見
つかりました、ああして船の中へ引き上げたところです」

「なるほど」

「どこの人ですか」

「それはわかりませんが、姦通まおとこだということです……引き上げ
られてからまたその死骸を、三日の間曝さらされるんだそうですよ」

「業曝ごうさくし」

「罪ですね」

橋の下を潜り抜けて、矢の倉の河岸の方へ行く小舟には、打
重なった死骸。白い肌、濡れた髪、なまめいた衣裳の乱れ、男
女相抱いた姿が、晴天白日の射るに任せている。

「南無阿弥陀仏」

眼をつぶつた与八。

「畜生、洒落^{しやれ}てやがら、こつちは心中どころじゃねえ、おまんまが食えねえんだ」

与八の傍で、憎たれた口を利^きいた一人の乞食。この声で、眼をさました郁太郎が、むつかり出すのを与八がなだめて、その場を外し、志すところの相生町へ急ぐ。

三十五

相生町の老女の家の一間に、まだ新しい仏壇の前で、お松は赤ん坊を抱き、

「乳母^{ばあ}や、ごらんない、登様が笑いましたよ。まあなんとい

う可愛いお児さんでしょう」

「まあ、お可愛いこと」

乳母やと二人、同じようなことをいつて、一人の赤ちゃんを可愛がつている。

「まあ、成人したら、どんなにお立派になることでしょう、この目鼻立ち、殿様にそっくりなんですよ」

「お姿は殿様に似ても、お心は殿様に似ないように御成人なさいまし、ねえ、坊ちやま」

「何をいうんです、乳^ぼ母^あや」

お松は乳^う母^ぼのいったことをたしなめるように、

「お心なら、御器量なら、残らずあの殿様におあやかりなさいまし」

「いいえ、お心はあの殿様に似てはなりませんよ、登様」

「乳母^{ばあ}や、まだやめないの、そんなことをいうと罰^{ばち}が当たりますよ」

「いいえ、罰は当たりません、登様、あなたのお父様は薄情なお方ですから」

「いけません、登様、あなたのお父様は、いいお方なんですよ」
「いいお方ならば、こんな可愛ゆい坊ちやまを、こうしてはお置きになりますまいに——」

「でも仕方がありませんね、お父様はこのことを御存じないんだから……そのうちムクが帰ったらきつと、あなたのお父様から便りがありますから、それまで待つていらつしやい、そうしてお父様のお便りがあつた時は、この憎らしい乳母^{ばあ}やをうんと叱つておやりなさい」

「ほんに、ムクはまだ帰りませんが、途中で間違いがあつたん

じゃないでしょうか」

「いいえ、大丈夫です、あの犬に限って間違ひなんぞはありやしません、きつとそのうちに殿様のおいでなさるところを突留めて参りますから、見ていてごらん」

「ですけどもお松様、よしんば殿様はあの手紙をごらんになつても、お返事を下さいますか知ら。殿様は不憫ふびんと思召しても、お家への義理で、知って知らないふりをなさるんじゃないか知ら。またお附の衆が、こんなことを知つたら、かえつて仲を隔てるようなことになりやしないかと、わたしはそれを心配していますよ」

「いいえ、駒井の殿様は、そんなお方じゃありません……もし、そういうお方でしたら、かえつて幸いですよ、このお子さんをわたしが弟にしてみたいものです」

「お松様、あなたが、坊ちやまを横奪よこどりなさるんですか。坊ちやまの周囲まわりには怖い人ばかり附いていますね」

「怖い人が附いていて丈夫に育てて上げなければ、お君様に申しわけがありません。登様、あなたのお父様がほんとうに薄情なお父様でしたら、あなたは、わたしの子になつておしまいなさい、ねえ、登様、登というお名前は、わたしが附けてあげたんですからね。お父様なんぞ来なくてもいいでしょう、松がいればあなたは御満足でしょう」

「さあさあ、乳母ばあやがおっぱいを上げますから、乳母やのお子さんになりなさい、お松様はお乳を上げることができませんから、本当のお母さんにはなれません」

「乳母やは、ああいう口の悪い人ですからね、乳母やに懐なついてはいけませんよ」

といつて、二人はたあいもなく、一人の嬰兒みどりごを可愛がつていと、次の間で、

「あの、皆様、もうお説教が始まりますから、広間へお集まり下さいまし」

「まあ、そうでしたね、もうお説教の刻限でしたのに、忘れていました、参りましたよう。坊ちやまがむつ、からなければ、乳母ばあやもいらつしやいな」

「はい、わたしもぜひ聴聞ちようもんをさしていただきたいつもりでございます」

こういつて二人はこの部屋を立ちました。

広間には今、五十名余りの男と、三十余名の女とが席を分けて集まっています。

女座の方は、けんしきの高いこの屋敷の御老女様を中心に、

数多あまたの女中。男は例の荒くれな浪士たちを主にして、老少の者も交っています。

ここでお説教がはじまる。この取交ぜた一座に聞かすお説教師も、相当に骨が折れるだろうと心配される。

お松は乳母うぼを連れて御老女の背後うしろの方へ坐る。しかし容易にお説教の導師は現われない先に、ともかくも定員がほぼ揃うたと見きわめて、前の方に控えていた例の南条力が、坐ったままで膝を一同の方へ捻ねじ向けて、

「さて、おのおの、今日は御老女の思召おぼしめしと、我々の希望とにより、慢心和尚を屈請くつしょうして、一席の説教を聴聞致す次第でござる

が、和尚は、今日、甲州の恵林寺から下山致された。御承知でもござろうが、甲斐の恵林寺は、武田信玄以来の名刹めいさつで、昔、織

田信長がああるの寺を攻めてやきうちを試みた時、寺の主快川国師かいせんこくし

は楼門の上に登り、火に包まれながら、心頭を滅却すれば火もおのずから涼しといて、従容^{しやうよう}として死に就いた豪い^{えら}出家である。それで只今の慢心和尚も、道力堅固^{どうりき}を以て知られてはいるが、なにぶん越格^{おっかく}のところが多く、我々には測り兼ねる器用がござる故、今日は懇ろ^{ねんじ}に請うて、初学の者、或いは婦人子供たちにもわかるように、特に垂示^{すいじ}を煩わす次第でござるが、しかし、あの和尚のこと故に、時々脱線して……凡慮^{あた}には能わぬことをいい出されるやも知れない。しかし、そのうちには必ずや身になるべき教訓も多きことと思わるる故、神妙に聴聞なさるよう。わかつてはわからなくても、その道の者の為すこと、言うことにはおのずから妙味の存するもの故に……左様な次第でござるから、和尚は今日は日頃と違い、全くものやわからかに……」

南条力がこう言つて紹介の半ばに、一人の女中が廊下から来

て、そつとお松の袖を引き、

「お松様」

お松も小声で、

「何ですか」

「あの、沢井の与八さんとおつしやる方が、尋ねておいでになりました」

「与八さんが？」

「いって、お松は驚きもしたし、この席も立てない心持で、ちよつと返答にさしつかえたが、思いきって、

「今わたくしが参ります」

「言つてお松は、そつとこの席を外しました。」

「裏の潜門くぐりの所に待っておいでなさいます」

「そうですか」

お松は廊下から下駄を穿^はいて、小門の所まで出て来ますと、郁太郎を背負い、日傘をさした与八が立っていました。

「おお、与八さん、よくおいでなさいましたね」

「お松さん、久しぶりでしたね」

「まあ、こつちへお入りなさい」

「お忙がしくはねえですかね」

「いいえ」

お松は欣々^{いそいそ}として与八を自分の部屋の方へ導いて来ましたけれど、久しぶりのお客をもてなしたいし、それに今はじまろうとするお説教も聞きたいしで、

「あのね、与八さん、ちようどよいところです、今ね、あの広間で有難いお説教がはじまるところなんですから、そのまま足を洗って、広間へおいでなさいな、一緒にお説教を聴聞致します」

しょう。お説教が済んでから、いろいろとあなたのお話を伺いましょう、ね、いいでしょう」

「それは有難いことでございます、そんならわしも、お説教のう、ひとつお聞かせ申していただくべえ」

三十六

お松も再び席に着き、与八も郁太郎を抱いて末席についた時分に、慢心和尚が壇上に現われました。

以前から近づきの人はともかく、はじめて慢心和尚の姿に接したものは、あつ！ と驚きの声を禁ずることができません。

世の中には、こうもまあ面かおのまるい人があるものかと、あつ、け、に取られてその面を見直すばかりであります。

實際、和尚の面は、ブン廻しで描いたほどにまんまるく、眉と目は、細く霞のように上庭じょうていの一部に棚曳たなびき、鼻は、ほんの申しわけに中央に置かれ、その代り比倫ひりんを絶して大きいのはその口と唇で、大袈裟にいえば、夜具の袖口ほどあります。

で、正式に袈裟けさころも法衣をつけて、侍者を従え、ユラリと演壇へのぼって、むんずと坐を組み、

「オホホホホホ」

と面かおに似にげない愛嬌笑いを試みた時に、霞のように棚曳たなびいていた細い眉と目が、一時にドヨミ渡りました。

「さて」

慢心和尚は笏こっを取って、机を一つトンと叩き、

「今日は、愚僧に向つて説教をせいとのことであるが、愚僧は今日までトンと説教ということを致したことがないじゃテ。釈

迦もそれ人を見て法を説くといった。つまり説教というものは、その場その場のお客様次第のものじゃ。法というものは不増不減のものだが、教えというものは融通変化、自由自在でなければならん。法は本体じゃ、教えは化者じゃ。うまく化かされたのがエライ、うまく化かされたのが救われたというわけじゃ。愚僧もこれ、多年坊主を商売にしているが、説教をして人を化かすことが大の不得手な……坊主によるとずいぶんこれに妙を得たのがあつて、これ、お同行衆や、朝に白骨となり夕に白骨となる何かんとやると、それ、後生安楽、南無阿弥陀仏、バラバラ、バラバラ（財布からお賽銭を取り出して投げる真似をする、聴衆笑う）……さて、昔、六祖慧能大師というお方は始いしうす終石臼を背負つてお歩きになつた、行くにも石臼、帰るにも石臼、悟り得ざる時も石臼、悟り得た後も石臼、寝るにも石臼、坐

るにも石臼、人を度するにも石臼、法を説くにも石臼、石臼でなければ夜も日も明けない……」

この時、突然聴衆の中から、

「石臼とならばドコまでも、箱根山、白糸滝の中までも……」

頓狂声で交ぜつ返したものがあから、ドツと笑つて、誰も彼もあいた口がふさがりません。

「叱！」

叱る声と、笑う声でドヨミ渡つている中に、抜からぬ面かおで男子席の一隅にすまし込んでいるのが道庵先生であります。

さてこそ、今の交ぜつ返しはこの先生から出たと、先生が生だけに一同が腹も立てません。御当人は多分居眠りをしていたのが、何かに驚かされて、ふと眼がさめ、夢うつつでついこんなことを口走ってしまったものと見えます。一同が呆あきれ返つ

て、先生を目の敵にした時分には、先生すましたもので、再び舟を漕ぎはじめているから始末にいきません。

「オホホホホ」

慢心和尚は、さも嬉しそうに愛嬌笑いをして、

「その通りじゃ、石臼とならばドコまでも、箱根山、白糸滝の中までも。そこで相手が石臼だから、ついて離れない。三界流さんがいるてん転のうち、離れ難きは恩愛の道じゃ。六祖は石臼を引きずって歩いたが、生きとし生ける者の、恩愛に引きずられて歩かぬというはない」

慢心和尚はそれから、一時浮き立った席を、徐ろおもむに静めて綿密な説教を進めて行きました。

古人の行持ぎようじの親切なことをこまごまと教えてゆく時は、自分もホロホロと泣いてしまいました。

「臨濟りんざいは三たび黄檗おうばくに道をたずねて、三たび打たれた。江西こうせいの馬祖は坐禅すること二十年。百丈の大智は一日作なさざれば一日食くらわず。趙州じょうしゅう観音院くわんおんいんの和尚おしょうは、六十一歳にして、はじめて発心ほつしん求道ぐどうの心を起して諸方あんぎやに行脚し、七歳の童子なりとも我に勝まさらん者には我すなわちこれに問わん、百歳の老翁なりとも我に及ばざる者には我すなわち教えんといつて歩いた。古人、道を学ぶの親切なること、ただただ涙のこぼれるばかりじゃ……これ、ひとり参禅弁道のためのみではござらん、すべてまことの師道には、この親切というものがござる。愚僧の如きも初めの頃、師匠から打ぶつて打ぶつて打ちのめされて、命からがら漸く今日まで永らえてみると、打たれた師の拳こぶしが有難いが、今はこの丸い頭を打つてくれる奴が一人も無いかと思うと、無性むしやうに情けないのじゃ」

こういつて、また慢心和尚がホロホロと泣き出しました。

この時は、しんみりして誰も笑う者がありません。なかには何か知らぬ哀れに誘われて、シクシクと貰い泣きをする女たちさえありました。

和尚は話頭はなしを進めて、

「養うて教えざるは父のあやまち、教えて嚴ならざるは師のおこたり、とそれ実語教にもある通り、人の親となり師となるものの任は重い……」

ここまでは至極尤もつともであつたが、これからがいけない。

「しかるに今時の馬鹿野郎は……」

と来たから、男子の席が、そら始まつたと面かおを見合わせる。

「師匠も弟子もみんな粗製濫造のガラクタばかりじゃ、びゅうと膨ふくれ上たちまつて忽ちペチャンコ……それというのが出来が嘘だか

ら、師匠が本物でないから、力がないから見識が立たぬ、見識がないから景氣とゴマカシで世を渡ろうとする、他を誹謗ひぼうすることを知つて、己おのれの徳を養うことを知らぬ」

「そこだ！」

この時、またも聴衆の中から頓狂声を振り上げたのは、例の道庵先生であります。舟を漕いでいたはずの先生が、突然奇声を張り上げたから、またも一座を動揺させました。

「先生、静かに——」

その時、道庵先生はもう舟を漕いではおりませんでした。トロリとした酔眼ねぼけまなこだか寢惚眼みほだか知らないのを睜みはつて、両の肩を怒らせ、掌を膝に置きながら、首をのべて慢心和尚の面をまともに見つめ、

「そこだ！ 今時の馬鹿野郎は物になっていねえ、それというの

は教育が悪いからだ、教育の根本を改良するのが現代の急務だ」
道庵先生は途中から慢心和尚の言葉を聞きかじって、ヒドク
共鳴してしまつたものと見え、しきりに昂奮し出したのを、寄つ
てたかつてなだめると、まもなく納まつて、またコクリコクリ
と舟を漕ぎはじめました。

道庵先生の合の手を、^{あい}慢心和尚はその度毎に嬉しそうに、細
い目をあいてながめていましたが、この時も至極上機嫌で、

「オホホホホ、全くあの先生のおっしゃる通り、教育という
ものが先に立つのでござるから、ことに子を持つ御婦人方には、
教育に心していただきたい。ところが、教育の根本ということ
は、慢心を戒めるということでござる。慢心があつては、すべ
てのことが行詰まるばかりじゃ。足らぬ、至らぬという謙遜^{けんそん}な
心があつてこそ物事が上達する、上達の道は無限であるによつ

て、謙遜の心も無限でなければならぬ」

慢心和尚の説教は、慢心を否定するという至極常識的な結論で終りを告げました。

三十七

説教が済んでこの一座が崩れて、おのおの行きたい方へ散って行くうちに、浪土豪傑連は、裸になつて庭の一隅に築いてある土俵の周囲に集まつて、早くも相撲すもうの勝負をはじめました。

今日はこれから、本式の関取せきとりが来て、稽古をつけるのだということ。

ちょうど、説教の席から、郁太郎を抱いてこの場へ通りかかったのが与八の災難といえは災難で、そのかつ、ぷくが、この素人

相撲の認めるところとなつて、その前途を立ちふさがれ、

「君、君は相撲だろう」

勇士豪傑の取的連とりてきれんが与八を擁ようして、これをみのがさないことにする。

「いや、わしは相撲取りじゃござりましねえよ」

「嘘をつけ、相撲だろう、そんな子供は抛ほうり出して、ここへ来

て一丁揉もめ」

「違いますよ、わしは相撲取りじゃござりましねえ」

迷惑がつて与八が申しわけをすると、

「まあ、何でもいいや、この身体からだでは力をもてあますだろう、一

丁附合え」

「御免なさい、わしはなア、お松様のところへ尋ねて来た与八という水車番の男でございまさあ」

「とにかく、体格と力量とは比例するものだから、その体格で力がないとはいわせない、一丁来い」

「御免なさいまし、わしは相撲の手なんぞはちつとも知りましねえ」

「知らなければ教えてやる、また本式の相撲になりたければ、いところへ紹介してやるぞ、今に横綱の陣幕もここへ来るだろう」

「御免なさいまし、わしは水車番の与八でございます」

「何だ貴様、しきりに水車番、水車番を振り廻しているが、水車番なんぞは自慢にならん、その体格で相撲になつてみる、天下の力士として諸大名へお出入りが叶うぞ」

「どうぞ御免なさいまし、わしは水車番でございますから」

「始末の悪い奴だ、今の横綱力士陣幕も、もとは出雲のお百姓いずも

だ、それが今は飛ぶ鳥を落す日ひの下開山したかいざんで、大名やさむらいと膝組みで話のできる身分になっている、貴様もその体格で勉強さえすれば、世間はいつまでも水車番では置かないぞ」

「いいえ、わしは水車番で結構なんでございます」

「少々足りない」

「まあこつちへ来い」

勇士豪傑の取とり的連では、どうしても与八をつかまえて、物にしなければおかなしつこさ。これがために与八は迷惑を極めているにも拘らず、それをグングン土俵の方へ押して行こうとするから、郁太郎がわつと泣きました。

「子供が泣くから御免なさいまし」

「意気地なしめ」

「与八さん、与八さん」

そこへお松の声。

「与八さんはいませんか」

「はい、ここにいますよ」

与八は助け舟にすぎる心持で返事をする、乳呑児ちのみごを抱いて廊下を駆け出して来たお松が、

「与八さん、こつちへおいでなさい、相撲はあとで、ゆつくり見せてもらいなさいましな」

「ああ、そう致しましょう」

「皆さん、この方はわたくしのお客様ですから、わたくしの方の御用が済まないうちは皆さんに貸して上げません」

「これはこれは」

力士連は頭をかかえて恐縮する。この場へ出て来たお松は、勇士豪傑をたしなめるように、

「なに、あなた方、与八さんになうものですか」

「お松どのに叱られてはかなわない」

取的連が頭をかかえて恐縮がることほど、お松はこの屋敷で御老女様のお氣に入りで、幅利きになっていました。

ここに奇妙な二組の子持が坐っている。

与八はその大きな膝の上に郁太郎を据え、お松は後生大事にみどりこ嬰兒を抱いて、

「与八さん、それはよい功德くどくをなさいましたね、大菩薩峠の上へ御地蔵様をお立てなさいまして」

「ああ、功德というほどのことでもありませんが……どうです、お松さん、もう一ぺんあの峠へ登ってみる氣はありませんかね。行ってみる氣があるなら、わしがそこから馬に乗せて行つて上

げまさあ」

「ぜひつれて行つて下さい。そうして与八さんの立てたお地蔵様を拝んで、お爺さんの供養をして上げたら、どんなにお爺さんが喜ぶか知れません……御老女様にお暇をいただいてみますから」

「もう追々寒くなりますからね、寒くなると雪が積つて行けませんから、来春らいはるになつて、あのお地蔵様の供養をしたいと思つているところですから、お松さん、その時においでなさいな」

「あ、そうしましょう、来春ならばね。そうしてその時に、与八さんのお地蔵様へ、わたしも何か御奉納をして上げたいと思います」

「それは、いい心がけです」

「何がよいでしょう」

「そうだねえ……ああ、お地藏様の前へお燈籠とうろうを一つ上げていただきましよう」

「結構ですね。では、わたし、きつと金かねのお燈籠を一つ御奉納しますから」

「その前に、わしは、一度あの峠へ登つて、お堂の屋根を葺ふいて来ますから」

「それはなかなかお骨折りですね、ずいぶん費用もかかることでしょう」

「なあに、それでも、ぽつぽつ寄進についでくれる人がありますでね……わしが一人で、こつこつと木を運んだり、石を運んだりして、どうやらお堂の形が仕上がりました」

「まあ、できないことですね。ですけれどもね、与八さん、一人で行くのはおよしなさい、あんなこわいところへ」

「なあに、別段こわいことはありませんよ」

「いいえ、あんなおそろしいところはありません、思い出しても怖いところ。わたしのお爺さんは何だつて、本街道を通らないで、わざわざあんなおそろしい道を通ったのでしょうか。わたしはあの時のことを思い出すと、くやしきつてくやしきつて。あの峠を通りさえしなければ、お爺さんもあんな目にあわず、わたしもこれほど苦労はしないで済むものを、恨みなのはあの峠です。菩薩なんて誰が名をつけたんでしょう、悪魔峠か、夜叉峠やしやとうげでたくさんですわ。おそろしい峠、にくらしい峠、いやな峠」

「峠が悪いんじゃないでしょう、人間が悪いんでしょう」

「ああ、人間が悪い。あの悪い奴はまだ生きてるんでしょうか。何の罪も恨みもない、わたしのお爺さんを、あの峠の上で斬ってしまった悪い奴は、机竜之助というんですつてね……ほんとう

に悪い奴、兵馬さんの兄さんを殺したのもあいつの仕業しわざですつてね。あんな奴ですから、まだほかにどのくらい人を殺しているかわかりやしません。何だつて神仏はあんな人間を、この世に生かしておくんでしよう。それから、気の知れないのは兵馬さんの姉さん。どうしてあんな悪い奴を好いて、兵馬さんの兄さんのようなよい人を棄てたんでしよう、ほんとにあれこそ魔がさしたんですね」

お松は、このことになる、我を忘れて、口を極めて、悲憤がほとばしり、そうしてところと人とを呪うのが日頃とは別人のようで、

「ほんとうに大菩薩峠は、悪魔峠です」

その時、何に驚いたか、与八の膝に抱かれていた郁太郎が、け、たたましい声で泣き出しました。その泣き声に誘われてか、お

松の抱えていたみどり、児も、悲しい声で泣き出しました。

三十八

二人の子供が申し合わせたように泣き出したものですから、二人の守は、あわててそれをなだめにかかりました。

子供が泣きやんで笑顔をつくると、呪わしかったお松の気色きしよくも、忘れたように笑顔になりました。

それから二人は、一別以来のことを何かと打語らい、現在の生活ぶりをおたがいに話し合つた中に、与八の生活もこのごろはすこぶる多忙で、ことに感心なことは日頃心がけて、附近の山々のあきちへ杉苗を植えたのが、早や三千本になるといふ話。水車も二三本杵きねを増して、人を雇うて働いてもらつていふとい

う話。その他、何かと近処から相談を持ち込まれて、世話をし
てやっているという話。

お松もまた、兵馬の身の上のことは口に出さず、自分として
はこのごろの生活は安定もあり、人の鼯^{ひいき}も受けているし、自
分も働き甲斐があることを物語りました。

その晩はこの屋敷へ泊って、翌朝ここを立つて武州の沢井へ
帰ろうとする^と与八に、よい道づれが出来ました。

恵林寺の慢心和尚も、同じところを出でて甲州へ帰ろうとす
るところ。

和尚は錫杖^{しゃくじょう}をついて、笠をかぶり、袈裟衣^{けさぎも}に草鞋^{わらじ}を穿^はこうと

して式台に腰をかけているところを、郁太郎を背負^{ひぎみず}っている^{うやうや}与
八が、跪^{ひざまず}いて恭しくその草鞋の紐を結んでやりますと、

「うん」

といつて、自分の手を休めた慢心和尚が、傲慢な態度で与八に紐を結ばせておりましたが、与八が丁寧に結び終つて後、和尚の背後には、数多あまたの豪傑連が送りに出ているのに、和尚は容易に動こうともしないで、与八の姿をじつとながめていたが、

「ああ」

と感嘆の声を洩らし、そのまま与八の手を取ると、自分の腰をにかけていたところへ腰をかけさせて、自分はその前へ土下座をきり、三たび与八に向つて礼拝らいはいして出かけましたから、見送るほどの者共が、和尚氣がちがつたのではないかと怪しみました。やがてこの道づれは滞りなく江戸の朱引内しゅびぎうちを出てしまつて、例によつての甲州街道を歩み行くうちに、どちらが先ということもなく、二人が話をはじめる。

慢心和尚の、与八に対する態度というものは、打つて変つた

親切を極めたもので、その話しぶりなども、嘯んで含めるほどに優しいものになっていることが不思議です。

与八から尋ねられて、和尚は欣よろこんで、慧能大師えのうだいしの石臼の物語をはじめ、

「慧能ガ嚴父ノ本貫ハ范陽ナリ。左降シテ嶺南ニ流レテ新州ノ百姓トナル。コノ身不幸ニシテ父又早ク亡ス。老母孤ひとリ遺ル。南海ニ移リ来ル。艱辛貧乏。市ニ於テ柴ヲ売ル」

といつて、貧乏のあまり、薪を売つて母を養つていたことから、ふとお客様が金剛經を誦じゆするを聞いて開悟し、黄梅の五祖弘忍大師こうにんだいしのところへ行つて米を舂ついて允可いんかを受け、ついに達磨大師以来六代の伝衣でんえを受けて、法流を天下に布しいたこと、その米舂こめつきの因縁と石臼のことなどを細かに物語つて聞かせたのみならず、本来は本街道を通つて帰らるべきものを、与八のため

にわざわざ裏街道へ廻つて、多摩川の岸を沢井まで、送らるべき人が送る身になつて、とうとう与八の水車小屋へ一晚泊り込みました。

それのみならず、その翌日は、この水車の仕事が面白いといつて、和尚は法衣ころもの袖を高くからげて、米搗こめつきから、粉挽こなひきから、俵の出し入れから、水門の上げ下ろしから、穀物の干場の仕事まで、与八を助けて、せっせと稼いで、その稼ぎぶりの確かなことに本職の与八を驚かせ、夕方になると、さつさと出発してしましました。

慢心和尚が裏街道を甲州へ入った時分、宇津木兵馬は上野原の月見寺を出て行方不明になりました。行方不明というのは、西の方、恵林寺へ再び戻る気配もなく、東の方、江戸の地へ足を踏み入れた様子もなく、あれから横そ外れて、つまり甲武信

三州の山々の群がる方面へと入り込んでしまったのです。しかし、それも一人ではありません。寺に逗留とまりゆうしているうちに遊びに来た獵人かりうどの案内で、三日分ほどの食糧を携帯したままで、山を分けて入り込んでしまったのです。

それからまた一方、寺の娘のお雪が机竜之助と共に、案内知つた久助を先に立てて、信州の白骨の温泉へと志したのは間もないことでありました。白骨の温泉はよく人を活かすべく、また人を殺すべしと言つた弁信法師は、あれ以来、留立てをせず、この一行の駕籠かごの出立する時も、見えない眼で見送りをし、無事を祈つて、自分は少なくともその帰るまで、この寺に留まるとどことを約束しました。弁信が留まれば、おのずから清澄の茂太郎も留まります。

法隆寺の夢殿ゆめどので

浮世うきよ烏がらすが

こう鳴いた

おっしやらしやらしやら

しやあらしやら

斑鳩いかるがの陣太鼓

おしとど、おしとど

追いこんで

おっしやらしやらしやら

しやあらしやら

生れた奴は罰ばち当あたり

あした
明日死んでは可愛いそう

可愛いそうだが若緑

おつしやらしやらしやら

しやあらしやら

天朝様も米の飯

おいらの方でも米の飯

狼様はドコへ行つた

滝の上の三船山

おつしやらしやらしやら

しやあらしやら

カマキリ三枚

飛び飛んで

ゆうばりおか

がま

夕張丘へ墓が出た

かつらぎやま

にじ

葛城山へ虹が出た

三枚草履がホーイホーイ

おっしやらしやらしやら

しやあらしやら

飛鳥あすかの山では火が燃える

おっしやらしやらしやら

しやあらしやら

その晩、清澄の茂太郎は寺の庭へ出て、さ、さ、さをすりながら
器量いっぱいの声で歌い出すと、弁信が、

「茂ちゃん、もうお月様が出ましたか」

「いいえ」

「お星様は」

「まだ」

と答えた茂太郎は、

くらがり峠で日が暮れた

ようどう峠で夜が明けた

おっしやらしやらしやら

しやあらしやら

暗い中で、さ、さ、さをすって器量いっぱいに歌をつづけましたが、興に乗じたと見えて、ついに無我夢中でおどりました。

底本：「大菩薩峠 7」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成 8）年 3 月 21 日第 1 刷発行

2003（平成 15）年 4 月 20 日第 2 刷発行

底本の親本：「大菩薩峠 四」筑摩書房

1976（昭和 51）年 6 月 20 日初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：大野晋、門田裕志、富田倫生

校正：原田頌子

2004 年 1 月 8 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。